無限の世界

蒼風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無限の世界

【Ｎコード】
Ｎ７３６７Ｔ

【作者名】
蒼風

【あらすじ】
いくつもの世界がゲートと呼ばれる次元の門を通じて繋がる無限世界（インフィニティーワールド）
少年、風野刀弥（かざのとうや）は偶然にもそんな世界に渡ってしまう。
旅の魔術師リアと出会い、彼女と世界を巡る旅をすることになった。
旅によって出会い、もたらされるもの、それらを通じて刀弥はこの世界の住人へと変わっていく。

＊異世界成長系の物語です。剣術を使う主人公と魔術師のヒロインがメインです。

一章一話「無限の世界へ」（1）

声を掛けられ少年は振り返る。
青色の瞳が見つめる先には一人の少女が立っていた。
腰まで真っ直ぐ伸びた赤銅色（しゃくどういろ）の髪が印象的で、それが風になびいて揺れていた。ぱっちりと見開かれた瞳には瑠璃色（るりいろ）が宿っており、顔立ちも綺麗に整っている。
間違いなく美少女と呼ばれる類の人物だ。
周囲に立ち並ぶ木々が風の音と共にざわめいている。
少年は彼女をじっと見つめていた。
彼女も少年をじっと見つめていた。
何故、少年は彼女と出会ったのか。
物語は少し前まで遡る……

乾いた音が剣道場内に響いた。
艶のある床、陽の光を取り込む窓、それらの情景の真ん中で二人の人間が竹刀をぶつけあっていた。
一人は白のシャツと黒のズボンを着た短い黒髪の少年だった。まっすぐ相手を見据えた青い瞳がとても印象的だ。
もう一人は少女。青い瞳や黒髪、そして顔立ちといった部分は少年と共通しているが、背中まで伸びたその髪が彼との違いを如実に示している。服装は白の服と黒のロングスカート。
少年の名前は風野刀弥（かざのとうや）、少女のほうは風野紋乃（あやの）。年齢は刀弥が一四歳で紋乃が一三歳。
両者は剣道場の中央で竹刀を斬り結んで押し合っていた。
互いに押し合っているため、ぶつかり合っている竹刀はどちらも小刻みに震えている。

けれども、やはりというべきか。徐々にだが刀弥のほうが押し始めている。

己の不利を悟った紋乃はすぐさま後ろへと下がり、右足を前に竹刀を左へと引いた構えを作る。

――この構えは……

紋乃の構えを見て刀弥がそう思った直後、彼女は右足で床を強く踏み、飛ぶような勢いで刀弥に迫ってきた。と同時に左へと引いていた竹刀を思いっきり振り抜いてくる。

風野流剣術『疾風』

地を強く蹴って相手の傍らを通り過ぎる瞬間、速度を乗せた一撃を放つ剣技だ。

これに対して刀弥は防御を選択。

竹刀がぶつかり合い、その衝撃が竹刀を通じて刀弥の腕にも伝わってくる。

その勢いに体が下がりそうになるが、それでもなんとか刀弥は踏み止まった。

疾風を防がれた紋乃は通り抜けることができず、その動きが止まってしまう。

すかさず刀弥は突きを放ち、反撃に移る。

紋乃は身を傾けることで突きを逃れ、そのまま距離をとろうと後ろへ飛んだ。

しかし、逃がさないとばかりに刀弥が彼女を追いかける。

追いついた直後に縦の一閃。その流れの早さに紋乃は思わず目を見開く。

完全に意表を突いた攻撃。にも関わらず、紋乃は何とかこれを受け止めることに成功した。

――いい反応だ。

竹刀を結びあわせながら、刀弥はそんな称賛を頭の中で漏らす。

かつての彼女は、この手の意表を突いた攻撃に反応できず敗北するというパターンを何度も繰り返していた。

だが、今回は見事に止めてみせた。実力が伸びている証拠だ。
それを嬉しく思いながら、刀弥は次の行動を始める。
竹刀を結びあわせているため、今、彼女の注意は上へと向いている。
故に彼は下、右足による足元を狙った蹴りを見舞った。
別に竹刀以外を使うのは卑怯ではない。これは剣道の試合ではないし、ルールも定めていない。予想外の動きに対応できなければ、それは相手の想定が甘いだけの話だ。
予想通り、上に警戒を集中していた彼女はそれ故に気付くのが遅れ、足元を崩される。
体勢を崩していく紋乃。そこを狙って、刀弥は再び竹刀を振り下ろす。
バランスを崩した状態で攻撃を受け止めるのは難しい。
けれども、紋乃は左手で傾いた己の身を支えると、右手だけの竹刀でこの攻撃を受け止める。
刀弥の攻撃の重さに彼女の竹刀が若干押されるが、それでも彼女は何とかこの攻撃を防ぎきってみせた。
そして、その直後に反撃の足蹴りを繰り出す。
それを後ろへと飛んで避ける刀弥。だが、それは相手も想定済み。
刀弥が後ろに飛んだのを見計らって紋乃が起き上がる。
そうして今度は紋乃のほうから攻めてきた。
刀弥に近づき右から左、斜めに振り上げる剣戟を仕掛けてくる。
刀弥はそれを竹刀で防ごうと竹刀を右側へと運んでいく。
けれど、刀弥の竹刀に紋乃の竹刀がぶつかることはなかった。
彼女が攻撃を止め、新たな構えを作ったからだ。
――さっきの攻撃は囮か。
仕掛けると見せかけ、こちらの防御姿勢をとらせたところで本命で空いた部分を攻める。いい攻撃方法だ。
新たな構えは右腕だけで持った竹刀を腰のバネを使って後ろへ回し引き絞るという、弓矢を連想させる構えだった。

そして、踏み込みと同時に矢のような刺突（しとつ）を放ってくる。
風野流剣術『一突（いっとつ）』
踏み込みの速度と腰のバネを使った突きの剣技。
狙いは竹刀から離れた左肩。防御は間に合わない。
瞬間の判断で回避を選択。反時計回りに身を回すことで一突（いっとつ）から逃れる。だが、躱すだけで刀弥は終わらせるつもりはない。
身を回した体を利用して、横の一閃を紋乃に目掛け放つ。
技を放っている最中の彼女は避けることも防ぐこともできない。
そのまま、剣道場内に快音が響き渡った。

「はぁ、負けました」
溜息と共に紋乃は敗北の言葉を口にした。その顔には残念という感情がありありと浮かんでいる。
「技に頼りすぎだ。技は強力だがその分、癖が強い。使いどころを間違うと最後のようなことになるぞ」
それを聞いて彼女は表情をしかめた。
「それは……わかってるんですけど……」
自覚はあるが、中々直せない。刀弥にも覚えがあることだ。
「まあ、しっかり直せ」
そう励まして刀弥は紋乃の肩に右手を置いた。と、ここで先程の戦いの途中で抱いた感想を思い出す。
「あ、それと……途中、追撃の一撃を防いだところ。あれはいい反応だったと思うぞ」
それを聞いた途端、それまで沈んだ面持ちだった彼女が一転して嬉しそうな表情に変わった。
「本当ですか？」
「ああ、今までだったら食らってたしな」
その表情のまま詰め寄る彼女に押されつつも、刀弥は素直に肯定

する。
　すると、褒められた彼女はますます上機嫌になっていく。
「全く……」
　その反応に呆れる刀弥だが、その面差しはどこか微笑んでいるようにも見えた。
　そんなときだ。
　剣道場の入り口が開き、そこから一人の女性が顔を覗かせた。
　紋乃によく似た容貌（ようぼう）に、どこか落ち着いた感じの雰囲気。顔立ちだけ見れば若く、初めての人が見れば二人の姉だと思ってしまうだろう。
　だが、こう見えて二児の母親なのだ。
「母さん。どうしたんだ？」
　自分の母親、風野智子（ともこ）の姿を認めた刀弥が用件を問い掛ける。
「昼御飯ができたから呼びに来たのよ」
　智子の返答に二人が時計を見ると確かに時間は正午を指している。
　どうやらかなりの間、熱中していたようだ。
「わかった。すぐ帰るから母さんは戻っててていいよ」
「わかったわ」
　刀弥がそう返事をすると智子は満足した表情を浮かべ、家へと戻っていった。
　二人の家は剣道場の右隣にある。そのため気軽に行き交うことができるのだ。
「それじゃあ戻るか」
「はい」
　そうして二人は竹刀を壁に立て掛けると、昼御飯を食べに家へと戻るのだった。
　風野家の家は日本家屋で上から見た場合、Ｌ字型の形になっている。横線部分の一番右側が玄関で右上の空きは庭になる。白の壁と黒い瓦の屋根の家で縦線の内側部分が廊下という構造だ。
「「ただいま」」

玄関に上がった二人は帰宅の挨拶を述べると、靴を脱ぎそのまま居間へと向かう。

居間へと向かう途中、美味しそうな匂いが漂ってきた。そのことに気が付き、二人は少し顔を綻ばせる。

居間に入ってみると、既に昼御飯はテーブルに綺麗に並べられていた。どうやらメニューはご飯と野菜と肉の炒め物らしい。

「戻ってきたか」

料理に気を取られていると、そんな声が聞こえてくる。声の主は、先に席に着いていた二人の父親だった。

風野源治（げんじ）。どこか厳格そうな雰囲気はあるが、これでも理解のある父親だ。あまり顔立ちが二人とは似てないが、それは二人とも母親似のせいである。

風野家は源治と智子、刀弥、紋乃の四人家族だ。源治の仕事は以前は警察官だったが、今は辞めて剣道の道場を開いている。それ以外は割と普通の上手くいっている家庭だ。

「剣術の訓練をしていたそうだな」

「ああ、紋乃とな」

席に着きながら刀弥がそう答えると、同じく席に着いた彼女が首肯する。

風野家は代々祖先から続く剣術を伝承してきた。当然、刀弥たちにもそれは求められている。ただし、剣術さえ伝承し続けるのなら後は何をしていても――当然、犯罪以外なら――問題ないので剣道場を継ぐ必要はない。

「そうか。それで紋乃の剣術はどうだった？」

剣術の訓練は主に源治が二人の指導をしているが、時折、今日のように刀弥が紋乃の指南（しなん）をするときがある。

紋乃は刀弥のほうが親切だと言うが、本人からすれば教えるほうはまだまだだと思っている。

「技に頼ろうとするところはまだ直ってないけど、実力は間違いなく上がってると思う」

尋ねられた刀弥は、思ったままの評価を口にした。
その評価内容に思わず紋乃が頬を緩める。
「なるほど」
源治はそう呟き、当の本人にその視線を移した。視線が自分に向いたことに気が付いた紋乃は、慌てて表情を元に戻す。
そこに丁度、智子がやってくる。
彼女が席に座ると、四人はいただきますと言って昼御飯を食べ始めた。
「午後はどうするつもりだ?」
昼御飯を食べていると、源治がそんなことを尋ねてきた。
「ちょっと、本を買いに外に出るつもりだけど」
少し迷った後、刀弥はそんな返答を返す。
「それなら、私も行きたいところがあるので一緒に行きましょう」
すると、それを聞いていた紋乃がそんなことを言いだしてきた。
「ああ、いいぞ……」
「じゃあ、出掛けるときになったら言ってください」
「……本屋ってことは駅前まで行くのかしら?」
そうして二人で話していると突然、智子が話に入ってくる。
「そうだけど……何か買い物?」
駅前には智子がよく利用しているスーパーがある。刀弥もそのことは知っていたので、そう予想したのだ。
「ええ、メモを渡すからついでに買ってきて」
「わかった」
何でもないという様子で刀弥が頷く。
「それじゃあ、お願いね。あ、お金は返ってきてからでいいかしら?」
「ああ」
まだ財布に余裕があることを思い出しながら、頭を縦に振る。
そうしてこの話は終了し、皆食事に専念するのだった。
やがて、昼御飯が終わり、皆が自分の食器を流し台へ運んでいく。

そうやって食事が終わると、それぞれが思い思いの時間を過ごすのであった。

刀弥はというと食後の運動代わりにと、庭で素振りの練習をしているところだった。

庭と言っても土と雑草しかないので、それほど綺麗な庭とは言えない。しかし、広さは十分にあるので素振りのような練習をするにはもってこいだ。

そんな場所で刀弥は一心不乱に竹刀を振っていた。竹刀が振られる度に風を斬る音が庭に鳴り響く。

メトロノームのようなそのリズムを聞きながら、彼はただひたすらに竹刀を振る己の感覚に意識を研ぎ澄ましていく。

音が消える。風の感触がなくなる。匂いを感じなくなる。竹刀を振る度に不必要な情報がなくなっていき、その分、よりはっきりと己の体の感覚を自覚していく。

ほどなくして、彼は己の体の動き以外の全てを感じなくなった。

客観的に見て、刀弥の素振りの動きは十分速いといえる。しかし、刀弥の感覚からすれば、まだまだだという感想しか出てこない。

無駄な部分に力が入っている。体全体の連動が悪い。もっと必要な部分から力を引き出せ。

無駄な部分に力が入っていると、それが邪魔になって挙動が鈍る。その結果、威力と速度が落ちてしまう。だが、逆を言えばそれを無くすことによって威力、速度の上昇が見込めるということだ。

体全体の連動は体全体で動作をすることによって、体の負荷の分散や同時使用による動作速度の向上、力の上昇が挙げられる。

どちらも僅かな変化だが、何事も積み重ねが大事だ。

だが、いずれも修正するのは中々難しい。こういうのは既に体が癖として覚えこんでしまっているからだ。

そのため、直した動きを何度も繰り返して体に染み込ませる必要がでてくる。

まずは体の細部を一つ一つに意識を回して、ゆっくりと体を動か

していく。
そうして次に、理想的な動作へと修正してく。これが出来れば、後は体に覚えこませるだけだ。
しかし、そこで邪魔が入った。
突然、竹刀の叩く音が庭に響いたのだ。その音と叩かれた痛みで、刀弥の意識が現実に帰ってくる。
痛みのするところをさすりながら背後を見ると、音の主が笑顔で彼の視線を出迎えた。
「油断大敵です」
「……何か用か？」
せっかくいい感じに気分が乗ってきたところで邪魔をされたので、刀弥の顔は不機嫌だ。
鋭い目付きで紋乃を睨む。
「えっと……そのもう二時頃ですけど、鍛錬（たんれん）に集中して出掛けるのを忘れていませんでしたか？」
想定外の反応に紋乃は戸惑いつつも、なんとかそれだけは言い返す。
「え？」
彼女に言われて慌てて携帯で時間を確認してみると、確かに彼女の言うとおり時間は二時を少し過ぎていた。
「やはり、また剣に熱中していたようですね」
微笑を浮かべそう言ってくる紋乃に、刀弥は少しだけ顔を赤くする。
「みたいだな。それじゃあ出掛けるからお前も準備してこい」
「はい」
嬉しそうな声で紋乃が返事をする。
それ聞いて刀弥も己の準備を済ますために自分の部屋へと戻ることにするのだった。

一章一話「無限の世界へ」（1）（後書き）

０７／０５

見直してみたら文章に違和感を抱き少し修正。

内容を変えず文章表現だけ変えただけのつもりです。

ついでに年齢が間違っていることに気付きこちらも修正。

０７／２４

できる限り同一表現を省こうと修正。

一章一話「無限の世界へ」（2）

出掛ける準備といっても刀弥がしたのは、財布を持って黒の上着を白のシャツの上に羽織っただけの簡単な準備だけだ。
紋乃も服装はそのままで、白いハンドバックを持っただけの簡易なもの。
今、二人は並んで歩いていた。その横を車が何台か通り過ぎていく。
今日は二〇二〇年五月三日。ゴールデンウィークの初日だ。
そのせいか、車や人の行き交いは多い。
空は大きな雲が多いが、概ね晴れで間違いないだろう。
「そういえばお前はどこに行く気なんだ？」
紋乃の行き先を知らないことに気付いた刀弥は、隣を並んで歩く彼女に訊いてみることにした。
「えっと……化粧品です」
少し恥ずかしそうな表情で、彼女はそう返事を返す。
「場所は？」
「本屋とスーパーの間ぐらいにあります」
記憶を探ってみると、確かに思い当たる店がある。
「じゃあ、俺、紋乃、母さんの順番で回るか」
「はい……ところで兄さんは一体、何の本を買うつもりなんですか？」
首を傾げながら紋乃は刀弥の方を見る。
「何の本って普通にライトノベルだけど」
「棚に並んでる奴の中で、何か新しいのがでたんですか？」
ライトノベルと聞いて紋乃が関心を持つ。彼が買っているライトノベルのうち、いくつかは彼女も読んでいるためだ。
「いや、面白そうなのが出たから買ってみるだけだ」
「では、機会があれば読ませていただきます」

それについて刀弥から特に返答はなかった。これはつまり別に構わないという意味だ。

こ貸し借りについて、二人の間に遠慮はない。

先程の会話のように彼女が刀弥のライトノベルを読むこともあれば、彼が紋乃の少女漫画を読みあさることもある。

もちろん、丁寧に使うことが大前提ではあるが、二人とも他人の物を適当に扱うほど大雑把な性格ではないので今のところ問題は起こってない。

「それにしても、兄さんはそういうのをよく買いますけど好きなんですか？」

「まあ、俺的にはかなり面白かったしな。設定や登場人物の内面がわかるのもよかったし……」

刀弥がライトノベルに興味を持ったのは、中学二年生の頃からだ。なんとなく表紙に惹かれて買って読んでみたところ、翌日にはそのシリーズを全部買ってしまった。

そうして中学三年になった今では、数も増えて今や棚を埋め尽くそうとしている。

これでも飽きた本は古本屋などに売りに言ってるのだが、実際はそれよりも買う本のほうが多いので棚の本の数が減らないのだ。

紋乃の質問はそんな状態を見て、『自分の兄はライトノベルがそんなに好きなのか？』と言っているのだと刀弥は解釈した。

しかし、彼女は首を横に振る。

「いえ、そういう意味ではなく……兄さんが買う本は戦闘ものが多いので、そういう内容が好きなのかなと……」

少し考え込んだ後、どこか気恥ずかしそうな顔で紋乃がそう聞き返してくる。

「ああ、なるほど」

それを聴いて、刀弥は先の質問の意味を理解した。

事実、刀弥が購入するライトノベルの内容は、そういうものが多い。好きか嫌いかと訊かれれば好きだと答えるだろう。

「まあ、好きだな」
「それは、物語で実際に戦う登場人物たちに自分を重ねているからですか？」
新たな問いに、少し熟考する。
その指摘通り、そういう面がない訳ではない。しかし、正直にそのことを言うのも何だか恥ずかしい。
「……まあ、ないとは言えないな」
しばらく刀弥は悩んだが結局、正直に話すことにした。
とはいえ、やはり恥ずかしいものは恥ずかしい。口に出しながら、顔が赤くなっていくのを感じる。
そんな彼に、紋乃が新たな問い掛けを投げ掛ける。
「兄さんは将来、剣術が活かせる道にいきたいと考えてるのですか？」
「は？」
いきなり話が大きく変わったような気がして、思わず刀弥はその歩みを泊めてしまった。
それを見て紋乃もその足を止める。
「何でいきなりそんな話がでてくるんだ？」
落ち着きを取り戻し、再び歩みを進める刀弥。
ライトノベルの話が将来の話とどう繋がるのかわからず、彼は首をひねるしかない。
「その……兄さんがそういう内容の本を買うのは、兄さんの理想がそこにあるからだと思っていたので……」
「つまり、お前は俺が『剣術で大暴れしたい』とかそういう感じの願望を抱いていると思ってたわけか？」
自然と目が半目になっていく。
そんな刀弥を見上げながら、紋乃が申し訳なさそうな顔をしながら頷いた。
その反応に刀弥はついつい溜息が出てしまう。
「別に俺はそんなこと、思ってないんだがな」

「ですが、どれだけ剣術の才能があろうとも何の意味も成さないのが今の現実です」
自分のことのように、悔しげな顔で紋乃は告げる。
そんな彼女を見て刀弥は苦笑してしまった。
「それはそれで平和なことなんだから、いいことだと思うけどな」
「それはわかってます」
とはいえ、その表情は納得しきれていないという様子だ。
仕方なく刀弥は話に付き合うことにした。
「まあ、剣術は好きだし、せっかく磨いてきたものだ。それを活かせる道にいきたいという思いはある」
そこは否定しない。それが率直な気持ちだからだ。
「しかし、だからと言って『剣術で大暴れしたい』とは思っちゃいない」
「そうなんですか？」
その問いに刀弥は首を縦に振る。
「大体、お前はどうなんだ？」
「え？」
「『え？』じゃないだろ。お前だって俺ほどじゃないけど、いろいろ読んでるじゃないか。そう言うお前のほうが、そういうことを考えているんじゃないのか？」
「そ、そんなことは……」
慌てた様子で紋乃は否定する。
「なら、俺だってそんなこと考えちゃいない。これでこの話はおしまいだ」
「……はい」
何とも言えない表情のまま、彼女は承知した。
そんな雰囲気を払拭する意味もあって、刀弥は新たな話題を振る。
「大体、将来の職業よりも今は高校受験の心配のほうが先だろう？」
「それもそうですね」
今更ながらそのことに思い至り、思わず紋乃は苦笑してしまった。

中学三年生の今年は、高校受験が控えている。
勉強はそれなりにでき成績も悪くはないが、やはり人生の大きなイベントということもあって多少の緊張はある。
「確か、近所の高校を受けるつもりなんですよね？」
「ああ」
できれば公立へ行きたいと刀弥は考えている。あまり両親に金銭的な負担を掛けたくないという思いがあるからだ。
「部活動は何かやるつもりなんですか？」
「できたら、剣術の訓練に専念したいんだけどな……」
その辺は少し悩んでいる。
そういう思いがある一方で、部活動に興味がないわけではない。
――もし入るとしたら、剣道部だろうか。
他の部活にも興味はあるが、やはり剣に惹かれるものがある。
二人が通っている中学校には剣道部がなかった。もっとも、あったとしても入っていたかどうかはわからなかったが。
というのも中学に入った当時は剣術の訓練が厳しく、部活に通う余裕などなかったからだ。
今でこそ、それらも余裕でこなせるようになったが、あのときはかなり大変だった。
訓練自体は小さな頃からしているが、中学に上がったと同時にいきなりその量と難易度が上がったのを刀弥は覚えている。
紋乃のときはまだマシだったが、刀弥はかなり厳しい訓練を課せられていた。
恐らく、それだけ期待されていたのだろうと今になって思う。
「もし、入るとしたら何部ですか？」
「剣道部のような気がする」
思ったままのことを口に出した。
すると、紋乃は予想通りという顔を浮かべる。
「そう言うお前だったらどこにするんだ？」
その反応に少しむっとし、仕返しとばかりに尋ね返す。

「私もきっと剣道部ですね」
「なんだ。同じじゃないか」
その指摘に、紋乃もむっとした顔を見せる。
「いいじゃないですか。別に……」
「別に馬鹿にした訳じゃないんだけどな……ただ、考えることは同じなんだなと言いたかっただけだ」
「……そうですか」
その言葉を聴いて彼女は機嫌を直した。
やがて、紋乃が新たな話題を振ってくる。
「そういえば兄さんは休みの間、ご友人たちとどこかに出掛ける予定はないのですか？」
「ないな」
はっきりとした口調で刀弥は断言した。
「……思うんですけど、兄さんってあまり交友関係が広くありませんよね？」
「ほっとけ」
そのことについては、刀弥自身も自覚している。
剣術の訓練を優先していたせいもあって、刀弥はあまり人付き合いが良くない人間だと周囲から認識されていた。
本人もそれをどうにかするつもりがなかったので放っておいた結果、今の状況と言う訳だ。
現状、友人と呼べるような付き合いのある人間は数えるほどしかいない。
「第一、全くいない訳じゃないだろう？」
「私の知る限り、兄さんと交友関係があると言えるほどの付き合いがあるのは、幼馴染の双葉（ふたば）姉妹と従姉の高峰（たかみね）さんぐらいなんですが……どちらも女性なのはわかってますよね？」
「……」
どちらも付き合いは長いのは厳然たる事実なので、一応間違ってはいない。しかし、女友達しかいないと思われていたのは刀弥とし

ては不本意だ。
「他にもいるぞ。神永（かみなが）の奴とか……」
「……ああ、父さんの友人関係の子ですね」
少し思い出すそぶりをした後、紋乃がそう返してきた。
時折、刀弥たちは父、源治に連れられて彼の武術関係の友人に会いにいっている。その目的は剣術の訓練もあるのだが、相手方の子供との交流もその中に含まれている――どちらかと言えば、従姉の高峰もこちら側の付き合いと言える――。
歳の近い者同士、仲良くなって互いに切磋琢磨しあう。それが大人たちの考えた目論見だ。
実際、そうやって仲良くなって個人的に交流している人もいる。先程、名前を挙げた神永という人物もその一人だ。
ただ……
「そういえば、そちら関係では兄さんは人気者でしたね」
「まあ、意味は違うがな」
その言葉の意味を考えながら、刀弥は苦笑気味に答える。
その理由は、刀弥が彼らと行った試合の戦績と関係がある。
全試合全勝。
刀弥は、今まで同年代相手の試合では負けなし連勝を維持している。そのため、次こそは勝とうと多くの者たちがリベンジに燃えているのだ。
源治やその友人たちにとっては目論見通りの展開なのだろうが、当人としては少し困りものだ。
なにせ会えば毎回『勝負だ！！』と仕掛けられるのだから……
「……っと見えてきたな」
そんな話をしているうちに、目的地である本屋が見えてきた。
「さて、さっさと買って他の用件も終わらせるとするか」
「あ、待ってください」
これ以上、この話題でからかわれるのも嫌だったので刀弥は話を切り上げ、本屋へ急ぐことにした。

そんな彼の後を、紋乃が慌てて追いかける。
そうして兄妹は本屋の中へと消えていくのであった。

一章一話「無限の世界へ」（2）（後書き）

０７／０５
文章表現を若干修正
０７／２４
できる限り同一表現に対して修正を実行。

一章一話「無限の世界へ」（3）

「あれ、紋乃に刀弥さん。こんなところでどうしたんですか？」
紋乃の買い物を終えた直後、二人を呼ぶ声が耳に入った。
声のほうへと振り向くと、そこには瓜二つの容姿をした少女たちが二人立っていた。
「梨絵、梨花」
「久しぶりだな。双葉姉妹」
紋乃は嬉しそうな、刀弥は、なつかしそうな声で少女たちに声を掛ける。
「刀弥さん、久しぶりです」
「……お久しぶりです」
片方の少女は明るく、もう片方の少女は静かに二人に挨拶をしてきた。
双葉梨絵と双葉梨花。先程の話に出てきた幼馴染の双子だ。明るいほうが姉の梨絵。静かなほうが妹の梨花だ。
刀弥から見れば一つ年下の妹みたいな存在で、同じ学校に通っている。紋乃とは同じクラスの友人らしい。
「元気そうだな」
「刀弥さんも元気そうで」
「……二人とも、買い物？」
挨拶もそこそこに梨花が問い掛けてきた。
「はい」
自慢するかのように紋乃は上機嫌に頷く。
「それなら丁度良かったです。私たち最近オープンしたお洋服屋に行こうと思ってたんですけど、よかったら一緒いきませんか？」
「え？　それって皆が噂していたあそこですか！？」
興奮した様子で紋乃が反応するが、そこで母親の用件を思い出したようだ。表情が固まってしまう。

「全く……行って来いよ。母さんの買い物は俺が済ませて帰るから」
そんな彼女を見て刀弥は溜息を吐くと、そう言って助け舟を出すことにした。
「ですが……」
兄に用件を任せて、自分だけ楽しむということが心苦しいのだろう。
紋乃が困った様子で悩んでいた。
「気にするな。洋服屋なんて俺が言ってもつまらないだけだし。第一、俺が行っても荷物持ちにしかならない。そんな面倒を押し付けられるくらいなら、母さんの用事を済ませて先に帰ってるさ」
そうして刀弥はその場から去ろうとする。
「それじゃあな。あんまり遅くなるなよ。双葉姉妹もな」
「はい、また」
「また～」
梨花や梨絵の別れの言葉を聞きながら、刀弥はは母親の用件を終わらせるべく早足でスーパーへと向かうことにするのだった。

買い物を済ませた刀弥は帰途についていた。
メモを渡されたときに内容を確認してなかったので気が付かなかったが、量がかなり多い。
ひょっとしたら、紋乃と買い物に行くということで多めに頼んだのかもしれない。
「まあ、それはどうでもいいか」
少々重いが、きついというほどではない。その程度には体を鍛えていた。
太陽は既に西に大きく傾いており、大きな雲の多かった空は今や雲ひとつない空へと変わっていた。
そんな空を見上げなら、刀弥は歩いている。

ふと、刀弥は行きで紋乃と交わした会話を思い返す。
「『剣術で大暴れしたい』か……」
先のときに言ったように、刀弥はそんな思いを持ってはいない。
ただ、少し、ほんの少し現状を残念に思う心があるのは確かだ。
剣術が用を成さない時代……
銃がその力を示す現在、どれだけ剣術を磨いたところでそれが必要とされることはもはやない。
そのことは、剣術が好きな者として残念に思っていた。
「はぁ、考えたところで無意味だな」
思いと共に大きく息を吐き出す。
そんなことを考えて現状が変わるわけではない。
それに、どれだけ意味のないところで自分が剣術を好きであることは事実だ。
ならばそれでいいじゃないかと、刀弥はそう結論をする。
ふと、正面を見ると、公園の入口が視界に入ってきた。
「……少し休むか」
そう呟くと、刀弥は公園へと向けて歩を進ませる。
肉体的にはまだ平気だ。
ただ、先程の考え事のせいか、気分が少し重かったので精神的に少し休憩をしたいと思っていたところではある。
そこは小さな公園だった。
遊び場はブランコとすべり台と砂場と僅かな上、その遊具すらも小さいという有様だ。そのせいなのか、夕方だというのに閑散としている。
寂しい公園だなと、刀弥は辺りを見回しながらそんなことを思った。
幸い、ベンチが一つだけだがあった。
そこ休もうと思い、彼は公園の中へと入っていく。
そのときだった。
突然、刀弥の目の前が真っ白になった。

――何だ？

いきなりの事態に、彼は反射的に手をかざしてしまう。

遮った手のの隙間から眩しさが漏れる。どうやらあの白は光だったようだ。

一体、何がこのこの光を生み出しているのか？

そんな疑問を考えている間にも光はその光量を増していく。

もはや手で遮っていても、目を開けていられないくらいだ。

そして、光に全身を包まれたと思った瞬間。

刀弥は、足元の地面の感触が消えたことに気付いた。

「え？」

何の前触れもなく地面の感触が消えたことに刀弥は驚く。

落ちるという感触はない。それは幸いなことなのかもしれないが、地面から離れたことなどない人からすれば浮いているという状態だけでも不安と恐怖が生まれてくる。

一体、何が起こったのか？　どうしてこうなったのか？

そんなことを考えながら刀弥の意識は暗闇の中へと落ちていった……

鳥の囀り（さえずり）が聞こえてくる。

「ん……」

その音に誘われるように、刀弥の意識は覚醒していく。

目を開けて最初に見たのは、青々とした木々の色だった。

――ここは？

気だるさを感じながら、刀弥は己の記憶を探る。

そして公園で自分の身に起きたことをはたと思い出すと、その途端、その身をガバっと起こす。

おかげで意識は完全に覚醒した。

そして、その目覚めた瞳で辺りを見渡すと、そこは森の中だった。

右を見ても、左を見ても、前を見ても、後ろを見ても森、森、森、森……

視界は木々や茂みによって遮られ、ほとんど遠くまで見ることはできない。

いきなり見知らぬ森の中にいるという事実に、刀弥は呆気にとられてしまう。

空を見上げると、天気は快晴で小さな雲が青の海を漂っていた。

陽の光は丁度いい温かさで、時折吹く風は心地良い、思わずまた眠りたくなるような環境だ。

しかし、今は眠気よりも驚きのほうが勝っている。

何故、自分がこんなところにいるのか。地面の感触が消えた以降の記憶がないため、何が起こってここにいるのかわからない。

――あれからどのくらい経ったんだ？

偶然にもそのことに気が付いた刀弥は携帯の時計を見て、そして驚いた。

携帯の時間は一九時を指していたのだ。しかし、上空の空はまだ昼だと言われても違和感のない明るさ。

何がどうなっているのかわからず、刀弥は混乱する。

ともかく現在位置を探ろうと、さらに携帯を操作するが返ってきたのは圏外という絶望。

その結果に刀弥はますます焦りを募らせてしまう。

これからどうするかと思案していた、そのときだった。

「どうしたの？　大丈夫？」

背後から見知らぬ声が聞こえてきた。

その声に振り返ると――

そこには一人の少女が立っていた。

見た目からして年齢は同年代。腰まで真っ直ぐ伸びた赤銅色（しゃくどういろ）の髪が印象的で、それが風になびいて揺れていた。ぱっちりと見開かれ

た瞳には瑠璃色(るりいろ)が宿っており、顔立ちも綺麗に整っている。
間違いなく美少女と呼ばれる類の人物だった。
服装は上は白い服の上に緋色(ひいろ)を基調とした上着を羽織っており、下は赤を基調としたチェックのスカートをはいている。右腰にはウエストバッグ。
何より目につくのは、彼女が両手で持っている碧(あお)の宝石のついた金色の杖だ。
杖の長さは少女の肩ぐらいまであり、先端はU字状になっている。宝石はそのU字の間に挟まるような形で取付けられていた。
周囲に立ち並ぶ木々が、風の音と共にざわめいている。
刀弥は少女をじっと見つめる。
少女もまた刀弥をじっと見つめていた。
「えーと、意識はある？」
こちらが反応しなかったのを訝しんだのだろう。心配そうな声で少女がそう訊いてきた。
「え？　ああ……」
彼女に見惚れていた刀弥は、その一言で我に返った。
見惚れていたことが恥ずかしくて、ついついばつの悪い顔になってしまう刀弥。
しかし、彼女は気にせず言葉を続ける。
「一体、何があったの？」
その言葉に、刀弥はどう答えたものか迷ってしまった。
自分自身も何が起こったのか全くわからず、混乱しているのだ。
そう聞かれてもどう答えたらいいのかわからない。
「あ、もしかして警戒しちゃったかな？　大丈夫。怪しい人じゃないから」
そんな風に刀弥が迷っていると、少女は答えない理由をそんな風に勘違いしてしまったようだ。
「私はリア・リンスレットっていうの。よろしくね」
刀弥の返事も聞かずに彼女は自身の名前を名乗った。

――やはり、日本人じゃなかったか。
日本人離れした容姿だったのでひょっとしたらと思っていたが、案の定そうだったようだ。
とりあえず刀弥も名乗り返すことにする。
「よろしく。風野刀弥だ」
「風野刀弥……変わった名前だね」
刀弥の名前を聞いて、リアがそんな感想を返してきた。
その感想に刀弥は疑問を得る。
ここが日本ならこんな名前、嫌になるほど聞くはずだ。しかし、彼女は変わった名前だと言った。
一瞬、何となく嫌な可能性が刀弥の頭をよぎる。
「悪いんだけど、ここがどこかわかるか？　気が付いたらこんなところにいて、場所がわからないんだ」
その思考を頭を振って振り払うと、ともかく情報を集めようと刀弥は場所を訊ねることにした。疑問は後だ。場所さえわかれば、最悪海外でも帰ることはできるはずだと心の中で自分を励まして……
しかし、事態は悪い方向で刀弥の想像通りだった。
「ここはフォースレイのエセドニア王国内にある東側の森だよ」
――どこだ!?　そこは!!
全く聞き覚えのない国名、地名に刀弥は思わず心の中で叫んでしまう。
しかし、これで刀弥は確信した。
何となくそんな気はしていた。ただ気のせいだと思いたかった。
――ここは、俺の知っている世界とは違う世界だ。
その事実に刀弥は思わず膝をついてしまう。
「え？　ちょっと、どうしたの？」
予想外の反応にリアは驚き、刀弥に声を掛ける。
「ははは……」

しかし刀弥は放心状態になっており、もはやリアの声も耳に届いていないようだった。
「うわぁ、ちょっとまずいかも……」
事態を重く見た彼女は、ある決心をすると彼の背後に回り……
「えい」
両手で持っていた杖で、彼の頭を殴った。
鈍い音が響き、刀弥はそのまま前のめりに倒れる。
「ん……」
やがて、殴られた箇所を撫でながら刀弥が起き上がった。
「ごめん。痛かった？」
リアが申し訳なさそうに謝って、刀弥に近付いてくる。
「ああ……」
殴られた痛みで正気に戻った刀弥は、そう言いながら首を左右へと振る。
頭の後ろが少し痛いがそれ以外は問題ない。どうやら大丈夫のようだ。
「一体、何があったの？」
心配そうにリアが訊ねてくる。
――一人で溜め込んでも仕方ないか。
そう考えた刀弥は、自身の身に起こったことを簡潔に彼女に説明するのだった。

一章一話「無限の世界へ」（3）（後書き）

０７／０５
文章表現を修正。
０７／２４
できる限り同一表現の修正を実行。

一章一話「無限の世界へ」（4）

「渡人（わたりびと）か……」

刀弥が説明を終えると、リアは第一声にそんな言葉を呟く。

「渡人？」

「外の世界から何らかの方法でやってきた人たちのことを、私たちはそう呼んでるの」

「やっぱりここは、俺の知っている世界じゃないのか」

彼女の口からそう言われたことで、ようやく刀弥は諦めがついたようだ。若干、固かった表情が和らいでいる。

「刀弥は、ここが自分のいた世界とは違う世界だと自覚してるんだね？」

「聞いたことない国だったし、その前にフォースレイとか言ってたしな。あれは何だったんだ？」

「あれは世界の名称」

「世界の名称？　ここはそんなにいくつも世界があるのか？」

場所を述べるくらいでいちいち世界名を付けるということは、そうしないとどこにいるのかわからないということだ。少なくても二つ以上の世界があることが前提になる。

しかし、そう考えたとしても刀弥にすれば信じられないことだった。

別の世界に来たことすら彼にとっては驚くべきことなのに、その上、他にも世界があると言うのだから無理もないだろう。

「うん。ゲートって呼ばれている世界と世界を繋ぐものがあるんだけど、それを使って他の世界へ行き来することができるの」

特に自慢する様子もなく彼女は説明する。

その様子から、彼女たちにとってゲートとはあって当たり前の存在なんだということがわかる。

「そうして、ゲートで繋がった世界群のことを、私たちは無限世界（インフィニティワールド）

って名付けてるの」
「無限世界……」
小さな声で刀弥はその言葉を繰り返す。
「それでゲートの中には、ときたま出現してもすぐ閉じちゃう不安定なゲートがあるんだけど……」
「つまり、俺もそのケースの可能性が高いわけか」
彼女の言うとおりなら、公園で目の前に現れたあれが不安定なゲートなのだろう。
「うん。そうだね。それが渡人が生まれる大半の原因だから、まず間違いないと思うけど」
よくある現象というよりも、誰もが知っている基本的な知識なのだろう。
複雑そうな表情でリアがそう説明する。
「一応、聞いておきたいんだが帰る方法とかはあるのか？」
駄目元で聞いてみるが、答えは予想通りの否定だった。
「少なくても私は知らない。渡人は物語や詩とかにときたま登場するけど、大体が居つく終わりだったし……」
「……そうか」
それを聞いて、刀弥は覚悟を決める。
帰ることは事実上不可能。ならば、この世界で生きていくしかない。幸い会話ができるのでどうにかなるはずだ。
そこまで考えたとき、ふと刀弥はその奇妙な事実に気が付いた。
「というか、よくよく考えたら何で言葉が通じるんだ？」
「それはバベルの言のおかげ」
そのことに疑問を覚える彼に対して、特に不思議そうな顔もせずにリアが理由を解説する。
「言葉や文字を理解する概念といえばいいのかな？　実際のところ私は自分の国の言葉で話してるんだけど、刀弥には自分の国の言葉で聞こえてるよね？」
「ああ」

確かにその通りなので、刀弥は肯定する。
「相手の言葉を解読して自分にわかる言葉に変換するシステムって言うのかな？　それがバベルの言なの」
「言葉のほうはわかったけど、文字はどうなるんだ？　相手の書いた文字が自分のわかる文字に変換されるのか？」
その質問にリアが頷きを返す。
「ちなみに、相手の言葉や文字をそのまま聴きたいと思えばそのまま聴けるし、自分の言葉をそのまま伝えたいと思えばそれで伝わるから……」
「意味があるとは思えないが、とりあえず覚えてはおこう」
利用するとしたら相手に言葉を教えたり、教わったりするときぐらいだろうとそんな思考が刀弥の頭を巡った。
「他に質問はある？」
リアが笑みを浮かべながら顔を傾け、そう訊いてくる。
「そうだな……今は特にないな」
腕を組んで少し思案した後に、刀弥はそう返事を返した。
「そっか。それじゃあ次は私からの提案なんだけど……刀弥、一緒に旅をしない？」
「え？」
彼女からの予想外の提案に刀弥は驚いてしまう。
「だって、帰れない以上はここで暮らすしかないでしょ？　刀弥が構わないなら、一緒にいていろいろ教えてあげるよ」
そう言って彼女は微笑む。
確かにこれからどうするか、悩んでいたのは事実だ。右も左もわからない以上、リアからの提案は刀弥にすればまさに渡りに船。
しかし、彼女からすれば余計な荷物が増えるだけでメリットなどないはずだ。
故に、刀弥はその辺りのことについて聞いてみることにした。
「なんでまた、そんなことをしようと思ったんだ？　リアにメリットなんてないだろ？」

この疑問に彼女はあっさりと答える。
「あるよ。刀弥が住んでいた世界がどんなところか興味があるの。だから、ときどきでいいから刀弥の世界の話聞かせて」
なるほど、と彼は納得した。その気持ちがなんとなくわかったからだ。
「……そんなに面白くないぞ？」
「どんな世界で、どういう生活を送ってるのかっていうのが知りたいだけだから、そんなに心配しなくてもいいと思うよ」
確認するように訊ねる刀弥に、リアは笑みを返す。
「で、どうする？」
「……わかった。一緒に行こう」
迷ったところで仕方ない。
彼女がどんな人間かまだよくわからないが、これまでのやりとりから信用しても大丈夫だろうと判断する。
「それで、これからどうするんだ？」
「少し行けば町があるの。たぶん、今からなら夜までに……」
そこでリアが言葉を切る。
どうしたのだろうかと刀弥が不審に思っていると、突然、木々をかき分ける音と共に複数の男たちが二人を取り囲むような形で姿を現した。
彼らは皆、毛皮のような服を着ており、その手には剣を握り締めている。
ガラの悪い顔と汚い笑み、何よりリアの警戒度合いから刀弥は相手を敵と定めた。
「おお、この嬢ちゃん。綺麗じゃねぇか。こりゃ高く売れそうだ」
「ですね。兄貴」
「だけど、その前にしっかり楽しまないとな」
男達は下品な話を交し合っている、それを聞いて刀弥は顔をしかめる。
どうやら盗賊の類らしい。数は七人。一人で相手をするにはかな

り厳しい状況だ。
　加えて刀弥には実戦の経験がない。真剣で試合をしたことはあるが、それでも怪我をしないように配慮された試合だ。命を掛けた戦いとはとても言えるものではない。
　一方の相手は、どう見てもそんな甘さを持ち合わせてる性格には見えない。
　剣の構え方から見て素人に違いないだろうが、その辺の意識の違いが戦いにどの程度影響を及ぼすかわからない以上、自分がかなり不利だと考えるべきだ。
　だからこそ、刀弥は覚悟を決める。
　自分たちの敗北によって、リアの身を晒す訳にはいかない。
　知り合ったばかりとは言え、自分に親切に応じてくれた相手が酷い目にあうのは刀弥としても許せることではないからだ。
　故に彼女を確実に守るため、相手を殺すことへの躊躇（ちゅうちょ）を一切捨て去ろうと心に決める。
　そうしてまずはどうやって相手の剣を奪おうかと、考えていたときだった。
　突如、リアが周辺の盗賊たちに聞こえるように大きな声で警告を促したのだ。
「警告します。帰るのなら見逃します。ですけど、このまま刃を向けるのであれば抵抗させてもらいます」
　その警告を耳にした盗賊たちは、一旦互いに顔を見合わせると一斉に笑い出す。
「ぷはははは……ガキ二人で何ができるってんだ？」
「警告？　それはこっちの台詞だ！！」
「小娘。お前のほうこそ大人しくしてるんだ！！」
　口々にそんなことを叫んだ。
「……そうですか」
　彼らの反応を聞いて、リアは残念そうな顔をする。だが、それも次の瞬間には真剣な眼差しに変わっていた。

その顔で彼女は盗賊たちに叫ぶ。
「では、全力で抵抗させてもらいます」
その直後、彼女の周囲にいくつもの炎の珠が出現した。これに刀弥と盗賊たちは驚く。
「くそ！？　この女、魔術師か！！」
その叫びと共に盗賊たちは動き出し、炎の珠は彼らに向かって飛翔していった。
着弾した炎の珠は爆発。付近にいた盗賊二人が爆発の炎に飲まれる。
爆発に飲まれた彼らは、炎をまとい叫び声を上げながら倒れていく。
予想外の成り行きに刀弥は呆然としてしまっていた。だが、すぐさま気持ちを切り替えると手近な盗賊のもとへと走っていく。
刀弥の接近に気が付いた盗賊は、彼を殺そうと斬りかかる。
だが、遅い。悠々とその斬撃を左ステップで避けると、がら空きの顎にアッパーを入れる。
ややカウンター気味に入ったアッパーに相手は脳震盪を起こし、剣を落としながら崩れ落ちていった。
それを横目に見ながら刀弥は剣を拾う。日本刀よりも重い剣に多少戸惑いつつも彼はそのまま別の盗賊たちのもとへと駆け抜ける。
剣を持った刀弥が近づいてくるのを見て、盗賊たちが彼を迎え撃とうと取り囲む動きを見せた。
リアの炎の珠で二人、脳震盪で一人。残っているのは四人。
そのうち、刀弥の背後にいた盗賊が彼の背に剣を振り下ろそうとする。
しかし、振り向いた刀弥が剣で斬りつけるほうが早かった。
振り向きざまに体の回転を利用した水平斬り。
手に伝わる嫌な感触と共に、胴を斬られた相手が血飛沫をあげて倒れこんでいく。
――これで俺も人殺しか。

倒れていく相手を見つめながら、刀弥はそんなことを冷静に考えていた。

戸惑うかと思っていたが、心は予想以上に平静だ。そのことに少なからず彼は驚く。

ともかく、これでもう引き返すことはできなくなった。ならば、後は進むだけだ。

その意志と共に、彼は他の盗賊のもとへと駆けていく。

先の動きから相手が只者でないと感じたのか、明らかに盗賊たちは怯えた様子を見せていた。

刀弥の接近に、彼らは及び腰で迎え撃とうとする。

無論、そんな状態で刀弥の動きに対応できるはずもない。

案の定、地を強く蹴って急接近する刀弥に相手は反応できなかった。

風野流剣術『疾風（しっぷう）』

すれ違いざまに速度の乗った一閃が、相手の脇腹（わきばら）を裂く。

「ぐぁ！？」

声を漏らし相手は脇腹を抑えるが、溢れ出る血を止めることはできない。そのまま膝から崩れ落ちていく。

――後、二人。

崩れ落ちる相手に見向きもせず、刀弥は残り二人となった盗賊たちに視線を向ける。

既に彼らは共に動き出していた。どうやら、二人同時に攻撃するつもりらしい。

さすがに一斉に襲われては対処は難しい。

故に刀弥はそうならないように、自分の身を二人の直線上の位置に置く。

こうすれば二人同時に相手をすることはない。

後ろの相手がこちらに剣を届かせるためには一旦、味方を避けて回りこむ必要があるためだ。

その間に片方を倒すことができれば、晴れて一対一だ。

既に刀弥は相手に近づき剣を振っている。狙いは左から右の斜め気味の振り上げだ。

しかし、この剣戟を相手はなんとか剣で防ぐ。

急いで剣を引きつつも、己の身を先程と同じように、回りこんでくる相手から届かない位置に移動させる。

もう一人の仲間は、今、戦っている相手を避けるために逆時計回りに回り込んでいる。

そのため、刀弥もまた逆時計回りに移動する。

そうして今度は突きを放つが、相手はそれを左へ逸らす。

どうやら守りに入り、仲間と共に一斉に襲うつもりのようだ。

今、剣は左に逸らされている。このままでは右に回れない。一度、後ろへ下がる必要がある。

だが、それは相手に間を与えることになる。そうなれば相手は後ろに引いて仲間との位置取りを調節するはずだ。

かといって、このままではやはり、二人同時に相手をすることになる。

――どうする？

刀弥が判断を迷わせた。そのときだった。

「伏せて！！」

聞こえた叫びに反射的に刀弥は身を伏せる。

伏せた刀弥の向こう、そこには複数の風の矢群を従えたリアの姿があった。

盗賊たちがそれを認識した瞬間、風の矢群がリアの命令に従い一斉に放たれる。

風の矢群が二人の盗賊を倒さんと一斉に殺到する。

この攻撃を受けて一人は体を貫かれ、もう一人は右腕を撃ちぬかれた。

体を貫かれた盗賊は絶命し地面と倒れていく。

それを見てもう一人の盗賊が腰を抜かすと、撃ち抜かれた右腕を抱えながら脇目も振らずに逃げ帰った。

刀弥もリアも、それを追うようなことはしない。
二人の目的はこの場から助かることであって、盗賊たちを殲滅（せんめつ）することではないからだ。
そうして戦いは終わった……

その後、刀弥の攻撃で気を失っていた盗賊が目を覚ました。
彼は周囲の惨状から自分たちが負けたことを知ると、途端に一目散に逃げ出していく。
後に残ったのは刀弥とリアと五人の死体のみ。
やがて、盗賊の姿が見えなくなると、安心したとばかりに刀弥は大きく息を吐く。
その途端、彼の体が震え始めた。
慌てて刀弥が震えを止めようと体に力を入れるが、震えが止まる様子はない。
そのうち震えは手に持つ剣にも伝わり、金属の擦れる小さな音が何度も刀弥の耳に響き渡る。
そして次の瞬間、いきなり刀弥の平衡感覚が消失した。
ぐらりと崩れていく刀弥の体。
慌ててバランスをとって刀弥は倒れるのを防ぐが、気を抜けばあっという間に倒れてしまうような状態だ。
気が付けば呼吸も荒くなっている。息苦しい。まるで胸が締め付けられているかのようだ。
日中であるにも関わらず寒気も感じている。
どうしてこんな状態になっているのかわからず、刀弥は戸惑ってしまう。
「刀弥、大丈夫？」
そんな刀弥にリアが走り寄ってきた。
彼女の表情に怯えも苦しみもない。

「心配するな。ちょっと、足を滑らしただけだ」
そのことに安堵しながら、刀弥はそう言って気丈に振る舞おうとする。
「本当に？　そんな風に見えないけど……」
けれども、リアは納得しない。かなり心配そうな表情で刀弥のことを見ていた。
何故、彼女はこんなにも心配しているのだろうか？　刀弥はそのことが気になり尋ねてみる。
「一体、なんでそんなに心配しているんだ？」
すると、彼女は少し迷った後、おずおずといった様子で口を開いた。
「だって、刀弥凄い苦しそうだよ。汗もかなりかいてるし……」
そうして彼女の視線が剣のほうに向けられる。
つられてそちらのほうへと目をやると、相変わらず剣は小さな音をたてて震えていた。
「手……震えてるよ？」
「大丈夫だ。実戦は初めてだったから、少し緊張しただけだ」
誤魔化すように刀弥はそう答える。だが、それは失言だった。
「実戦は初めてって……それじゃあ……」
その言葉に刀弥は己のミスに悟るが時既に遅し、リアがさらに詰め寄ってくる。
「ねえ、それって人を殺したことに苦しんでるってことじゃないの？」
「そんなことない！！」
大きな声で刀弥は否定する。
「斬ったときには何も感じなかった。だから、それは違うはずだ」
思い返す。確かにあのとき、自分は何も何も感じなかった。
剣を通じて伝わる柔らかい肉の感触、溢れ出す血の鮮やかさ、そして、死への恐怖から怯えや苦しみを浮かべる相手の顔。それらを目にしても何も……

「……え？」
そのとき、刀弥の視界が大きく揺れる。
気が付いたときには彼は地面に膝をついていた。
急いで起き上がろうとするが、膝に力が入らない。よく見ると膝が僅かに震えている。
「どうして……」
思わず漏れてしまったそんな疑問。
そんな疑問に答える者がいた。リアだ。
「何も感じなかった訳じゃないと思うよ。ただそのときは生きることに精一杯で、そんなことを考えている余裕がなかっただけ」
そう言って彼女は刀弥の目の前に屈み込むと、彼に言い聞かせるように言葉を続ける。
「戦いが終わって余裕が戻ったことでようやく刀弥の心が、人を殺したという事実を受け止めたんだと思う。体が震えているのもそのせい」
笑みを浮かべて手を差し出してくる彼女。その手を刀弥は掴んだ。
「だから、刀弥は自分を偽らず、しっかりそのことを受け止めるべきだよ」
彼女が刀弥を引き上げ、ようやく彼は立ち上がる。
けれど、勢いがつき過ぎた。まだ平衡感覚の戻っていない刀弥は前のめりに倒れそうになる。
そんな彼をリアが受け止め支える。
そのまま彼女は刀弥の体を己の腕で優しく抱きしめた。
「リ、リア？」
予想外に出来事に刀弥は戸惑ってしまう。
「誰だって、初めて人を殺すのは怖いよ。私もそうだったもの」
しかし、リアは構わず話を続ける。
「だから、隠さなくていいよ。辛いなら辛いって言って、悲しいなら泣いて、だって……」
一呼吸の間、それだけの時間をおいて彼女は刀弥にその一言を告

げたのだった。
「私たち、これから仲間になるんだもの」
抱きしめられているため彼女の顔を見えない。だけど、間違いなく今、彼女は優しく微笑んでいるだろう。
気が付けば震えはなくなっていた。寒気もどこかに消えていた。
今、彼にあるのはどこか安らぐような暖かな気持ちだ。
「……ありがとう」
自然とそんな言葉が出てきた。それと共に彼女を助けれて本当によかった、と刀弥は心の底から本気でそう思ったのだった。
そうこうするうちに、彼女の匂いが彼の鼻をくすぐる。
それで刀弥は自分たちがかなり密着していることを思い出した。
体に感じる柔らかな感触。思わず刀弥はこのままでいたいと思ってしまうが、それをなんとか理性で振り払う。
「リ、リア！？　も、もういいぞ」
うわずった声で刀弥がそう叫び、ようやく彼は彼女から開放されたのだった。

「刀弥。顔赤いよ？」
「気にするな。もう平気だ」
こちらの顔を覗き込んでくるリアにどぎまぎしつつも、何とか刀弥は平常心を取り戻していた。
「そう？　ならいいけど」
そう言って少し離れるリア。
そのことに刀弥は心中、残念がる。と、同時に先程の感触を思い出してしまう。
慌ててそれを忘れようと必死になっている彼は気付かなかった。
リアもまた若干、頬を赤く染めていたことに……
ようやく二人が元に戻ったのは、それから少し経ってからだった。

「……そういえばさっきのあれは何だ？」
突然、なにかを思い出したのか刀弥がリアに問い掛ける。
「あれ？」
なんのことかわからずリアは首を傾げる。
「炎の珠を出したり、風の矢みたいなのを放った奴のことだ。あいつらはリアのことを魔術師とか言ってたけど」
「ああ、魔術のこと？」
納得したという顔をするリア。対し刀弥は彼女が口にしたワードに首をひねる。
「魔術？」
「うん。マナを使った現象操作を行う技術のことなの。あ、マナっていうのはあらゆる世界に存在する人や動物や植物、大地、大気、水といったものが作り出す目に見えないエネルギーのことで、無限世界じゃ、大半の世界の文明がこれを動力にしているの」
「だけど、そんなに使ってマナ不足とかにならないのか？」
自分の世界で起こっているエネルギー資源事情を思い出し、ついそんなことを聞いてしまった。
「大丈夫。サイクル以上のマナを消費し続けなければ尽きることはないし、そういうのは大規模な奴だけ。皆が使う小規模な奴は、自身の体内で生成されているマナを使うの。ちなみにそういった道具のことを私たちは魔具（まぐ）と呼んでるの」
「皆って、俺でも使えるのか？」
「使えるよ。後で魔具や魔術、試しにやってみようか？」
そう言ってリアは、服の内側から何かを取り出した。
どうやらそれはペンダントのようで、透明な紺碧色（こんぺきいろ）の宝石が首から伸びた糸にぶら下がっている。
「それは？」
「これはオーシャルっていって、周囲の静止した風景を立体的に保存して、再生もしてくれる魔具なの」
自分の世界でいうデジタルカメラの立体保存版みたいなものかと、

そんな感想を抱きながら刀弥は彼女が持つそれを眺める。
「っと、そろそろ出発しようか。盗賊のせいで時間食っちゃったし」
「そうだな。そういえば、町から先はどうするか決まってるのか？」
何気なく出てきた疑問にリアはこう答える。
「その町にゲートがあって、そこから次の世界に行こうと思ってるんだけど、その前に刀弥の分の道具とかを揃えないとね」
そう言われて刀弥は、自分が今一銭も持っていないことを思い出した。
「……金はどうする？」
「心配しないで、余裕はあるから」
安心させるように笑みを見せる彼女に、刀弥は申し訳ない気持ちで一杯になる。
「ともかく行こう。困ったことがあれば、そのとき考えよ」
「……そうだな」
そうして二人の新しい生活が始まったのだった……

一話終了

一章一話「無限の世界へ」（4）（後書き）

０７／０５
表現を少し修正。
０７／２４
できる限り同一表現を修正。
０９／１２
戦闘直後のやり取りをかなり変更。本当は無自覚の恐怖（人を殺したことへの）という感じの演出をしたかったので……

一章二話「新たな生活」（1）

「何とか着いたね」
「そうだな」
日が沈み空が黒く染まりかける頃、刀弥とリアの二人はようやく町に辿り着いた。
暗闇でよく見えないが、白く四角い形をした建物があちこちに見える。どうやらこの町ではこれが標準的な建物なようだ。
「刀弥。早く行こう」
付近を見回していたせいか、刀弥はリアが先へと進んでいることに気が付かなかった。
慌てて彼女の後を追いかける。
「目的地は？」
「もちろん宿屋。道具とかの買出しは明日にして早く部屋をとって寝よ」
早口にそう告げる様子から、早く寝たいというのは本音なのだろう。
道中、聞いた話ではこの町に来るまで二～三日ほど野宿生活だったらしい。ならば、ベッドで眠るのが恋しくなるのも無理はない。
目的の建物は、看板のお陰ですぐに見つかった。早速、中に入る二人。
「いらっしゃい」
出迎えたのはかっぷくのいいおばさんだった。優しそうな表情で二人を出迎える。
「すいません。二人なんですけど、部屋は空いてますか？」
「はいよ。ちょっと待ってね」
そう言っておばさんは宿帳をめくる。恐らく宿泊記録から、部屋が埋まってないか確認してるのだろう。
「二人部屋なら一つ空いてるけど、どうする？」

「じゃあ、それでお願いします」
「え！？」
特に悩む様子もなく、あっさりと承諾するリアに刀弥は思わずそんな間抜けな声を出してしまった。
「ど、どうしたの？」
その反応に彼女は不思議そうな表情で尋ねてくる。
「……俺の世界じゃ、男女が同じ部屋で寝るのはいろいろ言われたりするんだが、こっちの世界じゃ違うのか？」
確認するように伺う彼に、リアはいつも通りの顔でこう返す。
「それは、こっちの世界でもあるよ」
「……なら、何で一緒の部屋にしたんだ？」
「今から他の宿屋に行くのが億劫だったのと、刀弥なら大丈夫かなって思ったから」
それを聞いて、刀弥は頭を抑えて唸ってしまう。
信頼してくれるのは正直、嬉しい。しかし今回の場合、自身への危機だけでなく周辺への醜聞という問題がある。彼女はその辺りのことをどう思っているのだろうか。
ちらりと刀弥はおばさんのほうを見る。
彼女は意味深な笑みを浮かべて、刀弥たちを眺めていた。まず間違いなく自分たちの関係を誤解されたと見るべきだろう。
思わず溜息が出てしまう。
「ほら、鍵をもらって早く部屋に行こ」
そうしてリアはおばさんのほうへ向き直ると、彼女から鍵を受け取った。
どうやら本当に大丈夫だと思っているらしい。
とはいえ、宿泊代は彼女持ちだ。その彼女がここでいいと決めた以上、従うしかない。
自分にできることはといえば、彼女の信頼に応えることだけ。
もはや覚悟を決めるしかない。
「もらってきたよ。部屋は二階の一番奥だって」

鍵をもらうと二人は部屋へと向かうことにした。
その途中、ふと壁を触ってみる。
ひんやりとした石のような感触が返ってきた。継ぎ目が見当たらないので、実際に石という可能性は低いだろう。
一瞬、どんな素材なのだろうかと興味を持ったが、すぐにどうでもいいかという結論が出てしまった。
目的の部屋に到着し、リアがドアを開ける。
中に入ってみると、部屋は思いの外、綺麗だった。
白の床と壁と天井。天井には明かりが点いていた。奥に窓があり、その傍にベッドが二つ、小さな箪笥を挟んで横に並んでいる。部屋の右側にはテーブルと椅子が二つ。材質は木のようだ。テーブルの上には時計と思わしき物が置かれている。部屋の左側には扉があった。
中を覗くと脱衣所のようで、その奥の部屋には浴槽らしきものも見える。どうやら風呂場のようだ。他にはトイレもある。
「この明かりも魔具なのか？」
「そうだよ。ほら、あれを見て」
明かりを見上げながら首をひねる彼に、リアは景色を眺めつつある一点を指差す。
刀弥も彼女の隣に並んで、窓の外を眺めてみる。
暗闇と明かり、黒と黄が支配する光景。その中に青緑に光るものがあった。
目を凝らしてみると、それは巨大な岩だった。岩全体が透き通るような青緑の光を放っているのだ。それはまるで巨大な宝石のように見える。
「あれはこの村が管理しているマナの収集装置。あれがこの一帯にあるマナを集めて町中の家や施設に送っているの。前に説明したでしょ？　サイクル以上のマナを消費し続けない限りは大丈夫だって……」
「ああ、そんなことを言っていたな」

そのときのことを思い出しながら、刀弥は相槌を打つ。
「でも、使える上限が決まっている以上、どこがどのくらい使うかは決めといたほうがいいよね？　だから、国同士が相談して使えるマナの量を取り決めるの。後は国がその量内になるように村や町とかに分配する感じだね」
「そしてあの装置で決められた量だけ集める訳か。当然、あの装置以外でマナを集めようとすれば犯罪になるんだな？」
「もちろん。大体、どこの世界でも体内以外からマナを集める装置は無断で作るのも使うのも犯罪になるかな」
「しかし、分配された量だけで足りるのか？」
その辺がなんとなく刀弥は気になった。
刀弥は自分たちの世界を思い出す。自分たちの世界では時代が進むごとに電気を使う道具が増え、電気の需要が伸びていった。この世界だって時が経てば、便利な魔具が作られるだろう。そうなれば当然、多くの人たちが使いたがる。次第に、一人一人が必要とするマナの量が増えてくるはずだ。
しかし、彼の疑問にリアはこう答える。
「足りるよ。どう使うかは自由だけど、主な使用目的は明かりと温度調整と食べ物の保存とかだし」
「それだけ？　他の魔具はないのか？　例えば、通信とか洗濯とか」
彼女の返答に刀弥は驚き、新たな疑問を投げかける。
「通信や洗濯の魔具はあるよ。でも、そっちは個人のマナで十分動くタイプだから」
「ああ、そういうことか」
つまり、分配されたマナは生活にあったほうが遥かに便利だが個人のマナでは負担が掛り過ぎるような魔具などを使うときだけ使われているということだ。
他の魔具は、そんなものを使わなくても個人のマナを使うことで十分事足りるという訳だ。
「それじゃあ私、お風呂に入って寝るね」

「あ、ああ、悪いな。邪魔をしてしまったみたいで……」
お風呂というキーワードに思わず刀弥はどぎまぎしてしまうが、彼女はそれに気付かずに扉の向こうへと消えてしまう。
一人になってしまった刀弥はすることもないので、とりあえずベッドに座ることにした。
そのまま暇を持て余していた彼だが、あることを思い出し自身のポケットに手を伸ばす。
そこから出てきたのは、無限世界に渡る前に彼が買っていたライトノベルだ。買った直後にポケットに入れていたのを、今まで忘れていたのだ。ちなみに買い物の品が入ったビニール袋は、目の前が真っ白になったときに手を放してしまったので向こうの世界に落ちたままだと思われる。
せっかくなので、刀弥は彼女が上がるまでその本を読むことにした。

リアが風呂を終えたとき、刀弥はライトノベルを読んでいる最中だった。
「ん？　それ何？」
湯気を立ち昇らせつつ、さっぱりした顔の彼女は刀弥が何かを読んでいることに気が付くと、興味津々という顔で彼に近付いてくる。
リアが近付いてきたことで、石鹸の匂いがほのかに刀弥のほうへと漂ってきた。
「こ、こっちに来る前に買った本だ。暇だったから読んでたんだ」
そのことに彼は焦り、慌てて彼女の質問に答える。
「ふ～ん……ねぇ、読んでもいい？」
「ああ、俺も風呂に入ろうと……」
と、言いかけたところで刀弥のお腹から腹の虫が鳴り響いた。そこでようやく彼は、晩御飯を食べていないことに気が付く。

こっちに来たのが一九時。本来ならその時間には晩御飯を食べていたはずだ。

しかし、異世界に来たり盗賊に襲われたりでそのことに気を回す余裕がなく、結果的に刀弥はそのことを失念していた。

「……そういえば晩御飯がまだだったね」

彼の腹の音を聞いて、彼女もようやく気が付いたらしい。

眠ることに頭がいっぱいで、そこまで気が回ってなかったのだろう。

「ちょっと、おばさんに何か作ってもらえないか聞いてくるね」

そう言うと、リアは急ぎ足で部屋から出て行った。

遠ざかる足音を聞きつつ刀弥は今、自分の世界が何時ぐらいなのか少し気になった。昼過ぎから夜なのだから、結構な時間が経ったはずだ。

急いで携帯をポケットから取り出す。携帯に映った時間は1時一五分を指していた。大体、六時間程経過したことになる。

「そりゃあ、かなり腹も減るな……」

そんな感想を漏らしつつ思い出すのは、ここに来るまでに聴いた時間に関することだ。

いろんな世界がある以上、世界によって一日や一年の時間が異なるのは当然の成り行きだ。そのため、生活のリズムを作るための時間とは別に時の流れを共有するための時間を設ける必要が出てきた。

これは基準時間と呼ばれ、その時間はある世界が基準となっているらしい。その世界では一日と一年をそれぞれ三六〇に分け、一日の方はティムという単位を付けている。

テーブルの時計を見てみる。ちなみに無限世界の時計は一周で一日らしい。

時計の針は六分の五程回っていた。この世界は三〇〇ティムで一日が経過するという話だから、今は大体二五〇ティムということになる。

――後でもう一度、携帯の時間と時計の時間を確かめて計算すれば

自分の世界の時間との比率がわかるな。
そこまで思考して、ふと言葉が漏れる。
「やっぱり、俺はまだ自分の世界に未練があるんだろうな」
心残りがないといえば嘘になる。
突然、自分がいなくなったことで家族は自分のことを心配しているだろう。
特に妹はあそこで別れなければと、悔やんでいるに違いない。
それは刀弥にとっても心苦しいことだ。
どうしようもないことなら諦めたほうがいい、忘れたほうがいい、刀弥自身そう思っている。
だが、どうしても家族のことが気になってしまう。
そんな風に考えていたそのとき、扉をノックする音で刀弥は我に返った。
「ごめん、刀弥開けてくれる？」
ノックの主はリアだったらしい。
刀弥は立ち上がり、ドアを開けに行く。
ドアを開けると、リアがお盆を持って立っていた。
「おばさんに頼んだら、こんなものでいいならってスープを作ってくれたの」
彼女の言うとおりお盆には湯気の立ったスープが、皿に盛られていた。皿の傍にはスプーンもある。
刀弥は身を退けて、彼女を部屋に入れる。
部屋に入った彼女はそのまま、お盆をテーブルのところまで運んでいった。
「それじゃあ、食べようか」
「ああ」
そうして、二人は食事にありつく。
スープはお腹が空いていたこともあって、かなり美味しかった。
二人が食事を終えると、リアが食器を返しに部屋を出る。
その間に刀弥はお風呂に入ってしまった。

風呂場は井戸の水を汲み上げ浴槽に貯めた後、魔具で温めるという仕組みのようだ。

ぬるかったお湯を温め直すために、刀弥は魔具を操作して温度を調節した。

風呂から上がると、刀弥は脱いだ服を着る。本当なら別の服にしたいところだが、着替えがない以上どうしようもない。

部屋に戻ると、リアが刀弥のライトノベルを読んでいた。

刀弥が風呂から上がったのを見ると彼女はライトノベルを返し、二人は就寝につく。

二人とも疲れていたこともあって、眠りがあっという間にやってきたのは言うまでもないことだった。

一章二話「新たな生活」（1）（後書き）

07／25
できる限り同一表現を修正。

一章二話「新たな生活」（2）

晴れやかな空の下、人々がせわしなく行き交っている。
荷物を運んでいる人、買い物に出ている人、自分たちと同じように町を巡っている人、皆思い思いの目的を持って歩いている。
「人が多いな」
辺りを見渡していた刀弥が、驚嘆の声をあげた。
「まあ、ゲートが近いからね。渡る人、来る人、それ目当てに商売をする人とかが集まってここまで大きくなったんじゃないかな」
「……なるほど」
二人は今、町を歩いていた。
目的はもちろん刀弥の分の道具を買い揃えることと、町を散策することだ。
この世界にやってきて始めて人のいるところに来た刀弥としては無論、どんなところなのか気になるところではある。
朝食を済ませると、すぐに二人は出掛けることにした。
まず二人が向かったのは市場。
市場には見たことのない食べ物やものが溢れていた。
時折、刀弥が気になるものを見つけてはリアに尋ねているという構図が、何度も繰り返される。
そうしているうちに二人はある露店に辿り着いた。
そこは紫色の丸い宝石がいくつも並んでいるお店だった。
「それはスペーサー。ものを格納するための魔具。巨大なものや重いものを空間圧縮して持ち運べるようにするの。私も持ってるよ」
そう言って、リアはウエストバッグからそれを取り出すと刀弥のほうへと見せてくる。
「値段が違うけど、入れれる容量でも違うのか？」
彼の言葉通り、各スペーサーに貼られている値札はものによってそれぞれ異なっていた。一番安いものと一番高いものを比べたら、

なんと一〇倍も差がある。
「刀弥の言うとおり、圧縮できる質量に限界があるの。圧縮できる質量が高いほど値段が高くなる傾向だね。私の場合、テントや食料、食器みたいな急いで出す必要のないものをそこに入れてるかな」
「逆に武器や薬とか、何かあったときにすぐに必要なものはスペーサーに入れずに持っているわけか」
「うん、展開や格納に時間が掛かるからね。とりあえず一番安いので十分だから、それにしとこうか」
そう言ってリアは一番安いスペーサーを手に取ると店の人にお金を支払った。
「はい。なくさないでね」
刀弥は手渡されたスペーサーをしげしげと見つめ、それからそれを上着のポケットに入れる。
「後は薬とか保存食とかとそれを入れれる鞄とかか？」
「そうだね。じゃあ、行こうか」
彼女に促され、刀弥は次の場所に向け歩き始めた。

あらかた必要な道具を買い揃えた帰りだった。
武器屋の前を通り過ぎたときにそれが目に入り、刀弥は思わず歩みを止めてしまう。
「刀弥？」
刀弥が歩みを止めたことに気付いたリアが、不思議に思い彼を呼ぶ。
だが、彼は彼女の言葉に気付かず、そのまま武器屋の中へと入ってしまう。
武器屋の棚にはいろいろな武器が置かれていた。
剣や弓、銃に恐らく攻撃系の力を持った魔具。それらが綺麗に棚の上に並べられている。

刀弥の足はその中の一つに近づいていた。
それは刀だった。細身で僅かに剃りのある刀身、取手や柄こそ違うものの全体的に日本刀を彷彿とさせる形状をそれはしていた。
試しに持って軽く振ってみる。
若干、違和感はあるもの懐かしい感触を感じることができた。
今、彼が腰にさしている剣は盗賊たちと戦ったときに奪ったものだ。
だが、刀弥が元々習っていた武器は刀。
剣と刀。それほど大きな違いはないものの、これから何が起こるかわからない以上、できれば使い慣れた武器を持っておきたいというのは刀弥の本音だ。
「刀弥、どうしたの？」
刀を元の場所に戻していると、彼を追いかけ店に入ってきたリアが声を掛けてきた。
声を掛けられた刀弥は彼女の方へと振り返る。そのとき、値札がちらりと刀弥の視界に入った。
――高いな……
これまで買ったどんなものよりも、遥かに高い値段だ。
宿屋代に薬や魔具などの必要な道具は、全てリアが払ってくれている。これ以上彼女の負担を掛ける訳にはいかないし、そもそも買えるだけのお金があるかも疑問だ。
――しばらくはこれで我慢して、貯まったときにどこかで買うか。
「いや、なんでもない」
そう結論してなんでもないという風を装って出て行こうとするが、名残り惜しくその刀に視線を向けたのが失敗だった。
「……もしかして、それが欲しくてここに入ったの？」
目敏く視線に気が付いたリアが、刀弥に尋ねてくる。
ずばりと言われ、刀弥は返答に詰まってしまった。
だが、それは肯定と言っているようなものだ。
しかし、こんな値段のものを彼女に頼るのは如何なものかという

思いが、彼の中にはあった。
散々悩んだ刀弥はある結論を出し、それをリアに相談することにした。
「リア、金を稼ぐために少しここに留まってもいいか？」
「え？」
突然の頼みごとに、リアは驚きの表情を浮かべる。
「さすがにこれは他のものと違って俺個人のわがままだし、値段が値段だ。だから、自分でどうにかしたいと思うんだけど……無論、急ぎなら、今回は諦める」
そう懇願しながら、刀弥は彼女の顔を伺う。
最初、リアは目を丸くして刀弥を見ていた。だが、やがて、顔をほころばすと次のようなことを言ってくる。
「それじゃあ、何か稼げるところがないか探そうか」
そうして二人は武器屋を後にした。
「頼んだ俺が言うのも何だけと、本当によかったのか？」
武器屋を出てすぐに、刀弥はそんなことを訊ねる。こちらのわがままでリアに迷惑を掛けているのではと考えると、心が痛んだからだ。
けれど、彼のそんな問いをリアは首を横に振って否定する。
「そんなことないよ？　むしろ、丁度良かったぐらい。実を言えば残金、割と危なかったし……」
「……悪い」
そんな状況を生んだのは、間違いなく自分が原因だ。
そう思い、反射的に刀弥は謝ってしまった。
「そ、そんなに気にしないで。そ、それより、ほら何かお金が稼げるところがないか、いろいろ探してみよ？」
失言に気が付いたリアが慌ててそれを誤魔化そうとすると彼の手を掴み、そのまま引っ張っていく。
「お、おい、行くってどこかあてがあるのか？」
柔らかい彼女の手の感触に当惑しつつ、刀弥は己の疑問を口にす

る。
「そんなの総当りに決まってるじゃない。飲食店、薬屋、酒場いろいろ回ってみるの」
「うぉっと!?　わかった、わかったから引っ張るな。バランスが崩れる」
そんな叫びが通りに反響（こだま）した。

そうして二人はどこかに仕事がないか探すため、いろんな店を総当りで探すことになった。
だが、どこの店も人手が十分か、やってもらいたいことがないという残念な返事ばかりでお金の稼げそうなところは見つからない。
「次はあの酒場だね」
しかし、彼女は諦めることなく、次へ次へと店を巡る。
「あれだけ断られているのに、よく続くな」
そのことに感心する刀弥に、彼女は当たり前のようにこう答える。
「実際、どこもこんな感じだよ？　働き手を探してるなんてほとんどないに等しいかな？」
「……そんな状況で探してるのか？」
そんな話を聞いて、刀弥はますます彼女に対して後ろめたい思いを感じてしまった。
「でも、諦めずに探し続けてたら、どこかの店が善意で適当な仕事を見繕ってくれたりもするんだよ？　だから、気にしないで」
「と、言われても現実、リアに余計な負担をかけてるのは事実なんだがな……」
気にしないというほうが無理なのだ。
その返事に、リアは少し困ったような表情を浮かべてしまう。
そうこうしているうちに、二人は酒場に辿り着いた。
酒場の中もまた宿屋の部屋と同じように、天井も壁も床も白い。

席はカウンター席とテーブル席の二種類があり、テーブル席は一階と二階の二つがあった。
客は昼頃なのもあってか多く、店員たちが忙しく行き交っている。アルコール特有の匂いが部屋中に充満しており、その匂いに刀弥は思わず顔をしかめてしまう。
マスターと思わしき人物は、カウンターでコップを洗っているところだった。
リアはマスターに仕事がないかを尋ねるため、彼のいるカウンターへと歩いて行く。しかしどうしたのか、その歩みが途中で止まってしまった。
「どうしたんだ?」
足を止めたことを、不審に思った刀弥が彼女に近づいていく。
すると、彼女は己の視線の先を指差す。
そちらに視線を向けてみると、そこには絵と数字の書かれた張り紙が貼ってあった。
内容は町長からのお知らせらしい。
「何々、最近、街道でフォレストウルフの被害が増えていることを受け、町をあげて被害を抑えるための活動を開始します。つきましてはその一環としてフォレストウルフに懸賞金を掛けることにしました」
さらに張り紙にはフォレストウルフと思わしき絵と懸賞金の額、懸賞金を受け取るための条件が書かれていた。それによると懸賞金はフォレストウルフの首と交換するらしい。
首ということで刀弥は少し嫌悪感を感じてしまったが、よく考えると昔の自分の国も似たようなことをしていたことを思い出す。もっとも、そのときは同じ人間に対して行っていたが……
「どうする?」
リアのほうへ首を戻し刀弥は問い掛ける。
「もちろん、これに決定」
こうして、二人のお金稼ぎの手段が決まった。

「とりあえずは昼食を済ませて出発だな」
「じゃあ、ここで済ませちゃおう」
そうして二人はカウンター席に座り、料理を注文した。名前を聞いてもよくわからないので料理も飲み物もリアと同じものを頼んだ。
やがて、マスターが注文した料理を運んでくる。
「なあ、少し聞きたいことがあるんだが……」
少し聞きたいこともあったので、刀弥は料理が届いたのに合わせてマスターに質問をしてみることにした。
「なんだい？」
「あの張り紙に書いてあるフォレストウルフだけど、どんな奴なんだ？」
彼が聞きたかったこと。それはフォレストウルフに関する情報だった。
「お客さん。あれ、やるつもりなんだ。そうだな……強さ自体はそれほど強いわけじゃないよ。ただ、最近は群れで襲ってくるようになっているから厄介なんだ」
「最近ってことは、今まではそうじゃなかったってことか？」
「ああ、それまではせいぜい二～三匹が関の山。だから、あいつらの変化に町中が驚いているのさ」
「へぇ」
マスターの話す情報に、リアが感嘆の声を漏らす。
「おまけに連中、賢くなっているっていう話も聞くからお客さんたちも気をつけなよ」
「助かった」
「ありがと」
二人はそれぞれそう礼を言って料理を食べ始めた。
料理の味は思いの外美味しく、自然と食べることに夢中になっていく。
そして、口の中を洗い流すように一緒に届いた飲み物を口に含み
――

突然、刀弥が吹き出した。
これにはマスターも隣で食べていたリアも驚く。
「ど、どうしたの？」
咳き込む彼を見ながら、彼女は訊ねる。
「これ……もしかして酒か？」
そうとわかったのは、一度だけ飲んだことがあるからだ。
あれは源治の知り合いのところにいったときだ。
晩御飯を一緒に食べたときに、水と思って差し出されてそれを飲んだ。
最初に飲んだときは変な味の水だなと思って飲み続けていたのだが、次第に体中が熱くなって気が付いたら布団の中で寝ていた。
後で聞いた話では、知り合いのちょっとしたお茶目だったらしい。
源治が知り合いを叱ったのは当然の結末だ。
「うん。そうだけど……」
リアのその応答の様子から、元々知って頼んだらしい。
――油断した……
普通に一八歳未満はお酒は禁じられていると刀弥は考えていたので、何も言わない以上普通のジュースか何かだと思っていた。
どうしてそう考えたのかと彼は自分を叱りつけたい気分だ。
「もしかして、お酒駄目だった？」
これまでのやりとりから、そう推測したのだろう。心配そうな顔で聞いてくる。
「別に駄目という訳じゃない。ただ、俺の世界じゃこの年齢だと禁止されてるから、単純に驚いただけだ」
「そうなんだ。で、どうする？　お酒じゃないのを頼む？」
「……頼む」
新しく頼むのは彼女に悪い気がしたが、無理して飲んで酔ってしまうのも困りものだ。
ここはおとなしくリアの厚意に甘えることにした。
程なくして、お酒ではない飲み物が刀弥のもとに届けられた。

「じゃあ、これは私が飲むね」
そう言ってリアは、彼が飲んでいた飲み物に遠慮なく口をつける。
間接キスを意識してしまう刀弥だが、そんなことを気にせず飲む彼女を見ていて、ひょっとして自分が気にしすぎてるだけなんじゃないかという思いが頭の中に浮かんだ。
そんなことがありながら、二人の昼食の時間は過ぎていくのであった。

一章二話「新たな生活」（2）（後書き）

07／25
できる限り同一表現を修正。

一章二話「新たな生活」（3）

昼食が終わった二人は酒場を出ると、早速街道に向かった。
街道の左右には森が広がっており、道はその森を割るように真っ直ぐ伸びている。
二人はそんな森へと入っていく。
森の中は小鳥の囀り、気持ちのいい風が駆け抜けていた。太陽は熱を帯びているが、空気が湿ってないのでそれほど暑さを感じることはない。
二人は特に苦労することなく森の中を進んでいた。
先頭はリア、その後ろを刀弥という並びだ。
「とりあえずこんな風に、フォレストウルフと遭遇するまで動き回る方針でいいのか？」
「というか、それしかないからね。一番いいのは巣を見つけることだけど……見当もつかないし、マスターの話通りなら、見つけたとしても数できついんじゃないかな？」
その意見に刀弥は納得した。
数で押されたらこちらが二人である以上、辛いのは目に見えている。
今回の目的はお金稼ぎだが、だからと言って無理をするほどのことでもない。で、あるなら堅実にいくのがベストだろう。
「手馴れてるな」
素直にそんな感想が出てきた。
「まあね。こういう仕事も結構あったし……」
「どんな仕事をやってきたか教えてもらってもいいか？」
これからのことを考えると一応、知っておきたい話なので刀弥は訊いてみることにした。
その問いに、リアは笑顔で頷く。
「飲食店や酒場とかじゃ店員や売り子さん。皿洗いや調理の手伝い

とかもあったかな？　宿屋じゃ掃除や洗濯をしたり、薬屋だと材料の調達が多いね。薬草だったりある獣や牙や身だったり……後はたまに行商の護衛を引き受けたり、今回みたいな賞金稼ぎをしたりもするし、場合によっては腕を買われて盗賊や今回みたいなモンスター狩りを頼まれたり……」

「モンスターか。獣とは違うのか？」

「基本的にはモンスターも獣なんだけど、一般的にはその獣の中で人に害や大きな損害を与える存在をモンスターって呼んでる状態かな」

その定義で行くと自分の世界ではライオンやサメ、猪や熊などがそうだろう。そんな考えが刀弥の頭に浮かんだ。

「たぶん、刀弥もいろいろ体験することになると思うよ」

「そのときはいろいろ教えてくれ」

「了～解」

そんな楽しい会話をしながら二人は歩を進ませていた。

だが突然、リアが何かに気が付いて足を止めたかと思うと、おもむろに近辺を見渡し始める。

刀弥もまた周辺から聞こえた複数の足音に、警戒を高め右手を腰の剣に持っていく。

やがて、茂みや森の奥から緑色の狩人たちが姿を現した。

刀弥の目には、その姿が狼によく似ているように見えた。

獲物を見据える獰猛な目。その獲物を食らうための鋭い牙と爪。

そして獲物に気づかれないよう森に紛れられるその緑色の毛皮。

そんなフォレストウルフたちがざっと九匹。それが二人を取り囲んでいる。

「……囲まれるまで全く気が付かなかったな」

「確かに気を付けたほうがいいかも」

剣を抜く刀弥と杖を構えるリアが背中合わせになって周囲を見渡す。

用意周到に囲んできた彼らに、二人が気を抜くことはない。

フォレストウルフたちは静かに一歩、また一歩と二人に近づいていく。
対して二人は、それぞれ武器を構えたまま相手を見据えるだけだ。
一瞬、森を支配する冷たい静寂。けれども、それはすぐに破られた。
先に仕掛けたのはリアだった。
炎の珠をいくつも生み出し、周囲にいるフォレストウルフたちに目掛けて放つ。
『フレイムボール』
それが合図となり戦いが始まった。
フォレストウルフたちが走りだし、炎の珠を潜り抜ける。
彼らのいないところに着弾した炎の珠が爆発を起こすが、傍にある茂みや木々に爆発の炎が燃え移ることはない。どうやら魔術はそういう制御もできるようだ。
くぐり抜けたフォレストウルフたちは、それぞれ狙いを絞らせないためか、ジグザグの軌道で二人に迫る。
そのまま二人に近づいた彼らは、まずリアに襲い掛かった。
リアの左側から一匹のフォレストウルフが彼女に飛び掛ってきたのだ。
それをさせまいと刀弥が飛び出し、そのフォレストウルフを叩き斬る。
直後、彼の正面から別のフォレストウルフが突っ込んでくる。
ステップで右に避けると同時に、刀弥は身を回して背後から相手を切り裂いた。
まわる視界の中で、刀弥はリアのほうを見る。
彼女は丁度、新たな魔術を発動させているところだった。
『エアアロー』
風の矢が生み出され、周りへと放たれる。
その速度と先程よりも距離が近いこともあってか、三匹のフォレストウルフが避けることができずに貫かれた。

――残り四匹。

ところが、そう思ったのもつかの間だった。

枝を踏み鳴らす音が聴こえたかと思うと、二人の頭上から新たなフォレストウルフが姿を見せる。

「な！？」

「嘘！？」

これにはさすがの二人も意表を突かれた。

そのまま頭上のフォレストウルフは口を開き、リアにそ牙を突き立てようとする。

寸前のところで、リアは杖を使ってフォレストウルフを殴り払った。

杖で殴られたフォレストウルフは態勢を崩して地面に投げ出されるが、ダメージは浅かったのかすぐに起き上がる。

さらにそれとは別に新たなフォレストウルフが五匹、仲間たちのもとに駆けつけてきた。

「これで合計一〇匹だね」

「奇襲か……マスターの言ったとおり、獣がすることとは思えないな」

酒場のマスターの警告が頭を過ぎるが、今更思い出しても仕方がない。

今度は刀弥が先に動いた。

彼は手近な相手に近づくと、その首元目掛けて剣を振り下ろす。

その背後から別のフォレストウルフが跳びかかって来るが、身を縮めてその下を潜るように躱すと、そのがら空きの腹へ剣を突きそのまま斬り裂いた。

急ぎ立ち上がり、リアのほうへと視線向ける。

すると、六匹のフォレストウルフたちがリアへと向かって駆けていくのを刀弥の視界が捉えた。

急いで戻ろうとする刀弥の前に、残り二匹のフォレストウルフが立ち塞がる。

どうやらこちらの足を止めている間に、リアを倒す腹積もりらしい。
刀弥は舌打ちをする。二匹で足止めができると判断されたということがその要因だ。
「二匹で足止めか……やれるものならやってみろ！！」
そうして刀弥はフォレストウルフを倒すために駆け出した。

一方、リアは自分に迫る六匹のフォレストウルフたちに対して、新たな魔術で迎撃しようとしていた。
『アースランス』
突如、大地より鋭い槍状の土群が盛り上がる。
これに対してフォレストウルフたちは回避を選択。しかし、三匹のフォレストウルフが回避しきれず大地の槍に貫かれてしまった。
残りは見事に回避することができたが、今度はリアの身長よりも高さのある土の槍群が壁となってしまい進むことができない。
飛び越えることもできそうにないと判断したのか、彼らは土の槍群を避けて回り込むことにしたようだ。
けれども、その行動はリアの想定内だった。彼女は意識内に魔術式を組み、機を待つ。
そして、フォレストウルフたちがアースランスの群れから飛び出した。
この瞬間、両者の間に隔てるものは何もなくなる。
そのタイミングに合わせて彼女は魔術を起動させる。
『エアロブラスト』
瞬く間に周囲の風が彼女の前方に集まったかと思うと、それが風の砲撃となって撃ちだされた。
砲撃はあっという間にフォレストウルフたちに迫り、彼らを飲み込む。

凄まじい衝撃が彼らを襲い、フォレストウルフたちは遙か彼方へと吹き飛ばされた。恐らく絶命したいるはずだ。

「ふぅ」

六匹を退けたと判断し、リアはほっと息をつく。しかし、それは間違いだった。

いきなり、アースランスの陰から何かが飛び出してきた。

それを見てリアは驚く。飛び出たのがフォレストウルフだったからだ。

その事実に彼女は一瞬、エアロブラストを放ったほうへと視線を向ける。

砲撃の向こう、倒れているフォレストウルフの数は二匹。どうやらあれを避けてアースランスの陰に隠れていたらしい。

急ぎ迎撃しようと魔術式を組もうとするが、どう考えてもそれより先に向こうの攻撃が届くほうが早い。

ともかく杖で防ごうと腕を動かすが、それよりも先に向こうが飛び掛ってくるのが早かった。

リアに抗う術はなく、ただ相手が迫る瞬間を見つめているしかない。

だがそのとき、二つの音がリアの耳に飛び込んだ。一つは風を切る音、もう一つは何かが刺さる音。その何かを彼女は見ていた。

剣だ。見覚えのある剣が、急に飛んできてフォレストウルフの首元に突き刺さったのだ。

フォレストウルフの牙はリアに届かず剣の勢いに押され、その身が横へ流れていく。

慌てて、剣が飛んできたほうへ顔を向けると、そこには見知った顔がゆっくりとこちらに近づいてくるところだった。その後ろには、二匹のフォレストウルフの死体が転がっている。

「なんとか間に合ったな」

「刀弥！！」

急ぎ彼のもとに駆ける。

よく見ると彼の左腕部分の服が僅かに裂け、そこから血が出ている。
「心配するな。かすっただけだ。どうやらこれ以上はいないみたいだな」
心配そうな顔でやってくるリアを見て、刀弥は彼女を安心させるために涼しい顔でそう告げた。
「ちょっと、じっとしてて」
彼の傍にまでやってきた彼女は、そっと杖を彼の傷口に近づける。
『キュア』
対象の治癒力を高めて傷口を塞ぐ魔術だ。
傷があっという間に塞がっていく。
「これで良し。後は……」
そう言って彼女は新たな魔術を使う。
刀弥には、何が起こったのかわからない。
しかし、僅かに視線に近い何かを刀弥は感じとった。
「……もしかして、周辺にフォレストウルフの姿がないか探したのか？」
その感触から、刀弥は彼女が何をしたのか推測する。
すると、それを聞いてリアが瞳を大きくする。
「ひょっとして、サーチに気付いたの？」
どうやら当たりだったらしい。
推測が当たっていたことに、逆に刀弥が驚いてしまった。
「よかった。他にフォレストウルフはいないみたい。だったら、今のうちに首を集めて休憩しようか？」
「そうしよう」
激戦の後で休息がほしいのは確かだ。リアの提案を刀弥が否定する理由はない。
そうして二人はフォレストウルフたちの首を集め、スペーサーに入れると休憩に入るのだった。

二人は今、木に背を預けて座っていた。
少し疲れたのか眠気が刀弥を襲うが、こんな危険地帯で眠るわけにはいかないとばかりに首を振って眠気を振り払う。
太陽の日差しは眩しく降り注いでいるが、二人は日陰にいるため彼らのもとに日差しが届くことはない。
「さっきは助けてくれてありがとね」
「ん？　ああ、仲間を助けるなんて当たり前だろ？　礼を言われることじゃない」
リアから礼を言われ、刀弥は遠慮がちにそう答える。
「むしろ礼を言うのは俺のほうだ。傷を治してもらったり、周りを探ってもらったり魔術っていうのは本当、便利だな」
それよりも先程のことを思い出し、刀弥は感心する。
「そんなに褒めるほどのことじゃないよ」
褒められた彼女はそう言って謙遜するが、これまで彼女がしてきたことを考えると、かなりの働きをしていると言えるだろう。
「確かに魔術はいろいろできるよ。というよりそれこそが魔術の最大の特徴だからね。だけどその分、欠点だってあるの。例えば、魔術を発動するために魔術式と呼ばれるものを意識内で組まないといけないんだけど、これが結構時間が掛かっちゃうの」
「つまり、急な対応は難しいと？」
「そういうこと。まあ、この速度は練習や慣れで短くしていくことはできるけど零にはできないからね。後は魔術の性能そのものは術者の能力に比例しないことが挙がるかな」
「？　どういうことだ？」
言葉の意味がわからず、刀弥は首を傾げる。
「ある魔術式が持つ魔術の性能は術者の実力に関係なく一定なの。実際は全開まで引き出せないから相性や慣れ、コンディションによって変化があるように見えるけど、それはそう見えるだけ」

「なるほど、それで？」
相槌を打ちつつ、話の続きを促す。
「要するに、強くなるためにはその分、強力な魔術式を取得する必要が出てくる訳だけど……当然、強力な魔術式はその分、魔術式が複雑で規模も大きいから……」
「さらに発動させるために時間が掛かるということか」
彼女が説明の続きを言うよりも先に、結論の出た刀弥が口を開く。
「そういうこと」
「となると、魔術師にとって重要な能力は魔術式を組む速度と魔術式を取得する技術力、そしてマナの生成量の三つということか。無論、強力な魔術式はその分、必要なマナの量も増えるんだろ？」
早く発動させることができるようになれば、突然の動きにも対応できるようになるし、より強力な魔術式も早く発動させることができる。
また、強力な魔術式の取得にはそれ相応の難易度があり、当然そのために技術力が必要になってくるだろう。
そして強力な魔術式ほど、必要となるマナ量も多いはずだ。マナの生成量は重要な能力となるはずだ。
それ故に、これら三つは魔術師にとって大事な能力だと判断したのだ。
「……魔術式とマナの必要量については概ねそうだね。生成量が足りないと供給に時間がかかっちゃうから。でも、あれだけで、もうそこまでわかっちゃったんだね？」
彼の話を聞いてリアが驚き、尊敬の眼差しを向けてくる。
「僅かな情報から相手の特徴や欠点を探りだすのは、戦いにおいて基本的なことだと教わったからな」
これは源治から教わったことだ。
相手を知ることは勝つために重要なことだ。そうすることで相手の利点や弱点を見つけ、自分を有利に相手を不利にするための戦術を編み出す。

刀弥はそれを同年代同士の試合などで実践してきており、その重要性を十分理解している。
「まあ、確かに私もそんな話を教わったな」
「教わったって誰に？」
「先生から」
「先生？　この無限世界にも学校みたいな何かを教えるための施設があるのか？」
先生という言葉が気になった刀弥は、思い切って訊ねてみることにした。
「うん。世界によっていろいろあるんだけど……私の場合は魔術師を養成するための学院に通っていたの」
「皆通うのか？　後、いくつぐらいから通えるんだ？」
興味を持った刀弥は、矢継ぎ早に質問をとばす。
「残念だけど試験に受かった人だけ。通うのは一〇歳ぐらいからかな。あ、基準時間での話だよ？　年の周期が違うから、多少誤差はあるけど……で、約四年と少し学ぶことになるかな」
「リアの世界の時間ならどのくらいなんだ？」
「それなら丁度四年。私の世界のほうが、基準時間よりも一日の時間や一年に掛かる日数が長いからそうなっちゃうの」
「いろいろと面倒だな」
これが世界の違いということなのだろう。
刀弥は一人苦笑する。
「リアって、今いくつくらいなんだ？」
「基準時間で最近一五歳になったばかり。刀弥は……って、そういえばわからないんだったね」
「ああ。時間の比較は済んだから後は計算するだけなんだが……たぶん、リアと同じくらいのはずだ。しかし、一五歳か。卒業してすぐに旅に出たとしても、まだ一年未満ということになるのか」
「うん、そうなるね。実を言えばこれって私の学院の伝統行事でね。卒業生は皆、一人前の魔術師になるために、修行として無限世界中

を旅することになるの。大体、基準時間で一～二年くらいかな？
そうして帰った後、皆いろんな職業に就くの。中にはそのまま旅を続けたり、旅先で暮らす人もいるんだけど」
「リアはどうするつもりなんだ？」
「私はできたら旅を続けたいなとは思ってる」
「旅が好きなのか？」
「うん。知らないことや知らないものと出会えるのが、楽しいって言えばいいのかな？」
「それで俺なんかに興味を持ったのか」
最初のリアの誘いを思い出す。そういうことならあの言葉も納得だ。
「うん。まあね。刀弥の世界はどうなの？」
「そういう施設はある。目的は知識を教えることになるんだろうな。期間は小学校が六年、中学校が三年、任意で高校が三年。大半の人間はこれだけの期間は学ぶな。望めば、さらに上の学校もあるし、仕事に関係することを教える専門の学校もある。一応言っておくけど、年数は俺の世界での時間の話だからな」
「すごい。そんなに長い間、学ぶんだ」
「感心することじゃない。むしろ、当たり前すぎて皆、学ぶ意欲を亡くしているのが実態だ。始まりは大体、六歳ぐらいだな」
感心の目を向ける彼女に、刀弥は苦笑を返す。
「剣術はいつから？」
「物心つく前からかな。家が剣術を代々伝える家だったから……」
「あ、そこは私と同じなんだ」
その言葉に、リアが仲間を見つけたかのような反応を見せた。
「私も魔術師の家系で物心つく前から魔術を教わっていたの」
「そうなのか。意外な共通点があったな」
「そうだね」
自然と互いに笑いが込み上げてくる。
「さーてと、休憩終わり。続きを始めようか」

「そうだな」
あれから結構な時間が経過している。
体も心も十分休まり、続きを始めるには丁度いいタイミングだ。
「ただ、気を付けないとな」
「わかってる」
さっきのフォレストウルフたちの動きから、油断できないのは間違いない。
――気は抜けないな。
二人は立ち上がると、森の更に奥を目指して進んでいった。

一章二話「新たな生活」（3）（後書き）

０７／２５
できる限り同一表現を修正。
０９／１８
魔術あたりの説明を含めて、少々修正。納得いく説明を書くのは難しいものです。

一章二話「新たな生活」（4）

森の中を歩いているときだった。
遠くのほうから、こちらへと走ってくる足音が聞こえ、二人は足を止めて耳を澄ませる。
足音は複数。方角は全方位。足音から考えても、先程とは比べ物にもならない程の数なのは間違いない。
逃げることはできないと、判断した二人は互いに背中を預けて身構える。
やがて、フォレストウルフたちが姿を現した。
予想通り、先のときと比べて馬鹿馬鹿しいと思えるくらいの数だ。
そうした大集団の中。異彩を放っているものがあった。
他のフォレストウルフと比べて倍ほどもある巨大な体？。己が王者だと言わんばかりの傲慢なその瞳は、値踏みするかのように二人に注がれている。
こいつらのボスだ。
自然と刀弥はそう確信する。
ボスのフォレストウルフはそうしてしばらくの間、二人を見下ろしていた。が、やがて興味を失ったのか周囲の仲間たちに聞こえるように大きな声で吠え始める。
それが合図となりフォレストウルフたちが、一斉に襲いかかってきた。
その瞬間、リアの魔術が発動する。
『ウォールストーム』
突如、二人を守るかのように竜巻が生まれ、フォレストウルフたちを阻む壁となった。
それを強引に突破しようとするフォレストウルフたち。だが、竜巻の力は凄まじく近付いてきたものたちを次々と飲み込むと、遥か

彼方へと吹き飛ばしてしまう。
――どうやら突破できそうにないな。
そのことを確信した刀弥は安堵の息を吐いた。
「助かった」
そうして刀弥は自分を守ってくれた仲間に感謝の言葉を述べる。
さすがに、あの数を対処するのは厳しい。リアの魔術がなければ物量で押し負けていただろう。
「礼を言うのは助かってからにしよ」
「そうだな。で、問題はこの数を相手にどうするかだな」
あれから、相手が飛び込んでくる様子はない。切れるまで待つつもりだろう。
「この魔術。どのくらい持つんだ？」
「術者の精神力次第。私の場合、九ティムぐらいかな」
ちなみに朝方、時計と携帯の時間を確認し計算した結果、一ティムが三分四五秒という比率だとわかっている。
すなわち、約三〇分ほど持つということだ。
「なるほど。とりあえず全部を相手にするのは無理。となると、自然と狙いはあいつを倒すことになるな」
あいつ、つまりボスのフォレストウルフのほうを見て、刀弥はそう告げる。
それに対してリアも首を縦に振る。
「そうだね」
「問題はこの群れを突破して、どうやってあいつを倒すかだな」
「一撃で決めないとまずいよね？」
倒すのに時間を掛ければ、他のフォレストウルフたちに襲われてしまう。当然の判断だ。
「それ以外にありえないな」
問題はその具体的な方法だ。
ただ突っ込んだだけではフォレストウルフたちが邪魔になって、ボスのもとに到達するのに時間が掛かり過ぎてしまう。

「何かいい魔術はないのか？」
魔術に頼りすぎているような気もするが、自分の力ではどうすることもできない以上それを利用するしかない。
「エアロブラストならフォレストウルフたちを押しのけてボスに届くとは思うけど、殺傷力は低いから一撃という保証がないんだよね。フレイムブラストも同じようなことはできるけど、遅い分避けられる恐れがあるし……」
「つまり届かすことはできるけど、仕留めきれる確証はないということか」
「ごめんね」
「謝ることじゃない。それを言ったら俺のほうが役立たずだし……」
とはいえ、生き残るためには今ある手札を上手く使って切り抜けるしかない。
刀弥は思案する。
届かす方法はある。難点は仕留め切れないということだ。
仕留めることができなければ、待っているのはフォレストウルフたちの一斉攻撃。
「エアロブラストの連続発動とかっていうのは無理なのか？」
「技術があれば並行して魔術式を組むとかできるようになるけど、今の私には無理かな。一応やってみてもいいけど……」
「いや、さすがにそこまで負担を掛けられない」
本当に自分は役立たずだなと刀弥は思う。
出来る事なら自分でどうにかしたい。
しかし、フォレストウルフたちが邪魔でボスのもとに行くことすら……
そこまで考えて刀弥はふと、あることに気が付く。
「リア、エアロブラストなら他のフォレストウルフたちを押しのけて、ボスのもとまで届かすことはできるんだよな？」
「え、うん。でも、一撃で倒せる保証はないよ？」
確認の問いをする刀弥に、リアは事実を返す。

「問題ない。追撃は俺がする」
「え？」
一瞬、何を言っているのかわからず、彼女は呆けた顔をしてしまう。
「リアがエアロブラストを撃って、その直後に俺がボスのもとに突っ込むということだ」
「そんな！？」
「邪魔な連中はエアロブラストで退かせて、ボスまで一直線に向かう。足には自信があるから穴が埋まるまでにはボスのところへ辿り着けるだろうし、ボスが倒れていなくてもエアロブラストで傷ついているはずだから、勝機は十分にある」
彼女が何を言いたいのか大体わかる。
空いた穴が埋まってしまう前にボスのもとに行けるのか？　そして、ボスと一対一で勝てるのか？
だから、先にその反論を潰してしまう。
「でも……」
それでも何かを言おうとして、彼女は口ごもってしまう。
「どの道このまま何もしなくても結果は一緒だ。心配するな。やれるさ」
安心させるように刀弥は笑う。
それを見て、それまで不安そうな表情だったリアが決心した顔を見せた。
「……わかった」
「よし、タイミングは任せた」
いつでも飛び出せるように姿勢を整える刀弥。
「魔術式は準備完了。ウォールストームを解除したら、すぐに撃つね」
それに対して刀弥は頷く。
直後、竜巻の壁が消える。
風の壁が消えたことで、それまで見えづらかった壁の向こう情景（じょうけい）

がより鮮明に見えるようになった。
周囲には虚貌な顔つきを見せるフォレストウルフたち。
だが、刀弥は彼らを見ていない。
彼が見ているのは、倒すべき相手のみ。
そして遂にリアがエアロブラストを発射した。
エアロブラストは獣の壁を突き抜け、彼のための通り道を作り出していく。
それに合わせて刀弥は走り始めた。
足に自信があるのは、嘘ではない。風野流の剣術の真髄（しんずい）は足、すなわち移動速度にあるのだから。
重い剣を持った姿勢のまま、彼は短距離選手並の速度で走る。
既に道には、フォレストウルフたちが空いた空白を埋めるように押し寄せてきている。
だが、彼は気にせず、ただひたすらゴールへと向かって駆け抜ける。
恐怖がない訳ではない。
どんなに自信があっても、不安や恐怖は付き纏う。
だがしかし、それ以上に彼の内にあるのは必ず成功させるという強い意志だ。
視線の先、エアロブラストがボスのフォレストウルフと衝突する。
大気のぶつかる音と共にボスは吹き飛ばされるが、すぐに体勢を整え堪える。
やはり、リアの予想通り仕留め切れなかった。
しかし、だからこそ自分が走っている。
既にボスは、己に迫る刀弥の姿を認識している。
彼を返り討ちにするべくボスは飛び上がると、その左足の爪を彼の眼前へと迫らせる。
けれど、刀弥もまたそれを迎え撃つべく動いていた。
剣を水平に腰を使って左後ろへ回し、そして、右足が地に着いた瞬間……

彼は大地を強く蹴った。
風野流剣術『疾風(しっぷう)』
視界の流れが早くなり、ボスの左足が左へと通り過ぎていく。
僅かにかすったのか、頬に傷が生まれるが彼は止まらない。
――悪いが死ぬつもりはない。
そうして、その先にあるのは無防備なボスの胴体。

迷わず彼は、そこに己の全てを叩き込んだ。

胴体の半分以上を切断されたボスは、痛みの咆哮を上げる。
されど、かのものにできたのはそこまでだった。
後はただ力を失い、倒れていくだけ。
ボスが倒れたことで他のフォレストウルフたちは動きを止め、一斉に己の主の方へとその首を向ける。
けれども、かのものが再び起き上がることはなかった。
それを確認すると、フォレストウルフたちは一目散にその場から去っていく。
後に残ったのは、物言わぬ遺体と少年と少女の姿だけだった。
「刀弥!!」
フォレストウルフの姿がなくなったのを見計らって、声を上げて刀弥のもとに駆け寄ってくるリア。
その呼び声に刀弥は振り返る。
「大丈夫だ。怪我はない」
「……頬。怪我してるよ」
「え?」
その指摘に慌てて、左手で頬の辺りをさする刀弥。
それを見てリアは失笑する。
それから彼の傍まで歩み寄ると、魔術でその頬の傷を治した。
「悪い」
「気にしないで。それで、これも一応持って帰る?」

そう言って背後、ボスの方へと視線を向ける。
「そうだな。一応持って帰るか。できれば賞金とかも増えてくれればいいんだけど……」
「その辺は、私が交渉してあげる」
そうして二人はボスの首を回収すると、町へ戻るべくその場を後にした。

一章二話「新たな生活」（4）（後書き）

07／25
できる限り同一表現を修正。

一章二話「新たな生活」（5）

結果から言えば、二人はかなりの報酬を手にすることになった。
ボスの目撃情報は度々報告されていたようで、二人が説明するまでもなくボスの首を見た途端、町長は二人に感謝し、これで被害は大きく減るだろうと喜んでいた。
リアが交渉するまでもなく高額の懸賞金が二人の手に渡され、それを持って二人は町長の自宅を後にした。
さすがに二人もくたくたで、その日は宿屋に戻って休もうということになった。
そして翌日……

「刀弥。似合ってるよ」
「……そうか？」
剣の代わりに刀をさし、ウエストバッグを腰に着けた刀弥の姿を見て、リアが嬉しそうに褒めてくる。
それがこそばゆくて、刀弥はつい視線を逸らしてしまった。
「そうだ。記念にオーシャルで撮ろうか」
「べ、別に、そこまでしなくてもいいだろ！？」
さすがにそれは恥ずかしい。
刀弥は遠慮しようとするが、リアはそんな彼を無視して首元からオーシャルを取り出す。
「それじゃあ、撮るよ」
「だから、いいって」
「どうして？　せっかくのスタートなんだから記念に撮ろうよ」
「スタート……」
その言葉を聞いて刀弥は考え込む。

無限世界に来たのは一昨日。
だが、旅の本当の意味でのスタートとなると、まさしく彼女の告げたとおり今日と言えるのかもしれない。
それはつまり……
――ようやく俺の新しい生活が始まるということだ。
これから先、何が起こるのかわからないが、良い事も悪い事も待っているのは確かだろう。
それでも自分が選んだ以上後悔はないし、これからも後悔のない選択をしていくつもりだ。
そんな風に心の中で決心する。
「隙あり」
と、そのとき、思考に没頭していた刀弥の顔を見てリアがオーシャルを使用する。
「え？」
オーシャルが一瞬、点灯する。それが撮られた証だった。
「リア……」
「いいじゃん。記念、記念。中々いい顔してたし」
恨めし気に見る刀弥に、リアが笑顔で返す。
「それじゃあ、撮り終えたしゲートに行こっか？」
「……そうだな」
まだ、何か言い足りなさそうな刀弥だったが、結局何も言わずゲートのほうへと向かうことにするのだった。

「……」
刀弥は呆然とした面持ちでそれを見つめていた。
行き交う人、路上で物を売る行商。そして武器を持ち周辺を警戒する二種類の兵士。
それら人々の先に刀弥が見ているものがあった。

それは光の球体だった。
大きさとしては刀弥の身長の二倍ぐらいだろうか。それが一定の間隔で僅かに大きさを変えて脈動していた。
人々がその球体に触れると、その途端、人が光に分解され球体の中へ吸い込まれていく。
逆に球体から光が溢れ出たかと思うと、それが集まり人の形となる。
それは人だけに留まらず、馬車や魔具の乗り物でも同様だ。
「……あれが……ゲートか」
「うん、そう。あれで次の世界に行くの」
「……そういえば、次の世界ってどんなところなんだ？　というか、どこに行こうとしているんだ？」
ここに来てようやく刀弥はリアがどこを目指しているのか、教えてもらっていないことに気が付いた。
「次の世界はファルセンっていう極寒の雪と山がほとんどを占めている世界。そこを通ってリアフォーネに行こうとしているの」
「極寒の雪と山がほとんどって……そんなところにも人が住んでるのか？」
そんな厳しい環境に人が暮らしているという事実に、刀弥は驚く。
「元々は無人の世界だったんだけど、鉱物資源が豊富に採掘されることがわかって、それ目当てに人が集まったの。今じゃ国が出来るまでの規模になってるよ」
「そういう歴史なのか」
「寒さを凌ぐために採掘で掘った穴を広げて、そこに町を作ってるって話だよ。掘った坑道が町と町を繋ぐ道にもなってるみたいだし……」
「へぇ……」
彼女の解説を聴いて、刀弥の好奇心が刺激される。自然と、どんなところなのか見てみたいという気持ちが芽生えてきた。
「あ、ちょっと待ってて」

説明している途中で何かに気が付いたのか、リアがそう言って路上で店を開いている行商のもとへと駆けていく。
しばらくして、彼女が戻ってきた。その手には二つのフードが抱えられている。
「これ、さっきも言ったけど、この先は寒いからね。何も着ていないよりはマシでしょ？」
「ああ、悪い」
刀弥はそれを受け取り、自分の分のお金を彼女に渡す。
リアは遠慮する様子もなく、それを受け取った。
「それで、ゲートを渡るためには、まずはあそこで何かしらの検査を受ける必要があるってことか？」
彼が見つめる先、そこでは自分たちと同じくゲートを利用しようとする人たちが、兵士達から荷物検査やいくつかの質問を受けているところだった。
「そうだね。あっちの国だって入ってこられたら困る人や物もあるからね。そういうのをここで止めちゃうの」
なるほどと刀弥は納得する。
来て欲しくない物がある場合、一番いいのは入る前にそれを止めてしまうことだ。そうすれば、実質的な被害が起こる前に確実に防ぐことができる。
――空港みたいなものだな。
一人そう考えて、刀弥は頷く。
「それじゃあ、俺たちもさっさと検査を済ませるか」
そうして二人は検査を受けた。
荷物はスペーサーも含めて検査するということなので、全て兵士たちに預ける。
身体検査を終え、荷物検査を待っている間に今度は別の兵士が二人に質問をしてきた。何の目的で渡るのか。どこを目指しているのか。リアがリアフォーネに向かっている旨を伝えると、親切にもそこに向かうのに比較的安全なルートを教えてくれた。

それが終わるとタイミング良く荷物の検査も終わり、二人は荷物を受け取るとその場を後にした。
荷物を確認して、なくし物がないのを確かめると二人は奥にあるゲートに向かって歩いて行く。
間近で見るとゲートは自分よりも遥かに大きく、光の鼓動を肌で感じることができた。
無意識に刀弥の足が止まってしまう。
周りの人々は何の躊躇いもなくゲートに触れるが、何分、刀弥にとっては始めてのことだ。安全なのだろうか。事故は起こらないだろうか、何となしにそんな不安が込み上げてきてしまう。
と、そんなことを考えていると、不意に隣のほうから忍び笑いが聴こえてきた。
「……リア」
「いや、だってね。刀弥ったらゲートを見て不安そうな顔をしてるんだもん。それが可笑しくって……」
非難するような刀弥の視線に、リアは笑い声を堪えたまま言い訳をしてくる。
しかし、そんな彼女を見て刀弥の中にあった不安はどこか彼方へと吹き飛んでしまった。
おかげで決心がついた。
「……よし、いいぞ。行こう」
「うん」
そうして二人はゲートに触れる。
触れた瞬間、刀弥は目の前が真っ白になったかと思うのと同時に体に浮遊感を感じた。それは以前、この世界に来たときに体感したものと同じ感じのものだ。
――やはり、あれもゲートだったということか。
そんなことを考えながら刀弥は次の世界へと渡るのだった……

二話終了

一章二話「新たな生活」（5）（後書き）

ようやく二話が完成しましたので投稿致しました。
一話一話をこんな感じの量で書いていきたいと思ってますので時間が掛かるとは思いますが、読んでくだされば幸いです。
がんばっていきますのでどうぞお楽しみください。
０７／２５
できる限り同一表現を修正。

一章三話「命の抗い」（1）（前書き）

連絡事項：6月23日　仕事のほうが忙しくなり、今の仕様のままだといつ投稿できるのかわからないので、20ページから4～6ページ程度変えようと思ってます。
それに伴い、1話2話のほうも切り分けることに致しました。

故にこの話からが今回、新しく投稿された話です。

一章三話「命の抗い」（1）

気が付くと目の前に白と灰色の世界が広がっていた。
白い平原とゆっくりと舞い降りる雪たち。辺りを見渡すと雪の降り積もった灰色の山々が壮大に佇んでいる。
それら見回してから刀弥は正面を見る。
視界の先ではゲートから現れた人々が一直線に出口を目指し歩いていた。
途中、兵士たちが彼らを止めて検査をしているが、行きのときと比べると簡素な検査だけで済まされるようだ。
逆にこちらに向かう人たちは先程、自分たちが受けた検査と同じものを受けているのが見える。
よく見ると、並んでいる人の多くが馬車を引き連れたり、大きな荷台を運ぶ乗り物に乗ったりしている。
荷物は大半が木箱でそれがいくつも積まれて載せられている。動くときの様子から、かなり重たいものであることがわかる。
鉱物資源が豊富だという話なので、恐らく輸入目的か転売目的でそれを買った商人たちだろう。この世界はそうやって、金銭を得ている訳だ。
ふと、体が冷えてきた。
先程、リアからフードを受け取ったことを思い出した刀弥はすぐさまそれを着る。
「それじゃあ、刀弥行こうか」
フードを着ると隣から見知った声が聞こえた。
振り返ってみると、声の主はリアだった。
「ああ」
そうして、二人は出口に向かって歩いて行く。
少し進むと、一人の兵士が二人に声をかけてきた。
兵士たちの格好は鎧ではなく、代わりに毛皮と思わしき白い上着

とズボンという防寒を重視した服装だ。
「すいません。念のため簡単な検査をさせてもらいます。ご了承ください」
「わかりました」
素直にそう答えると、他の兵士たちが二人のボディチェックをしていく。
「こちらには観光で？」
「いえ、リアフォーネを目指して」
「リアフォーネ……つまり、ラーマスを目指しているのですね」
ラーマス。そこにリアフォーネに繋がるゲートがあるのだろう。
後でリアにどのくらい掛かるのか聞いてみようと、刀弥は頭の隅でそんなことを考える。
「はい。そうです」
「道はわかりますか？」
「あちら側の兵士さんから聞きましたので」
「では、大丈夫ですね。一番近い町であるファルスはあの洞窟の中です」
兵士の指差す少し先、そこにはぽっかりと大きな穴が空いていた。
「ありがとうございます。刀弥行こ」
リアに連れられ、刀弥は彼女と共にその洞窟へと向かうのだった。

洞窟に入った途端、寒さを感じなくなった。
「あれ？」
そのことに気付いた刀弥が背後を振り返る。すると、雪が途中で遮られているという光景が彼の目に入った。
「寒さと雪の侵入を遮っているのか。だとするとこれも魔具の力か？」
「刀弥。どうしたの？」

背後を振り返って呟くに刀弥にリアが歩み寄ってくる。
「ん？　ああ、寒さと雪の侵入を防いでるなと思って……」
その言葉にリアも刀弥の見つめている先を見る。
「あ、本当だ。きっと、魔具の力だね。雪と寒さの遮断と一定温度の維持、後この明かりとかも町自体が分配のマナを使ってやってるんだろうね。どれも町自体に必要なものだし」
言われ天井を見上げると、確かにほのかに明かりを灯している物がある。
「ほら、見上げてばっかりいないで、先へ進もう」
「ああ、悪い」
そうして歩いていると、やがて二人は広い場所に出てきた。
「うわぁ」
「リアの言ったとおりだな」
リアが感嘆の声を漏らし、刀弥は感心の声をあげる。

『寒さを凌ぐために採掘で掘った穴を広げて、そこに町を作ってるって話だよ』

この世界に来る前にリアが言った言葉。
その言葉のとおり、町は洞窟の中にあった。
広く掘り広げられた洞窟の中に、建物が密集して並んでいる。町の中央は広く開けており、そこにマナの収集装置が置かれていた。
天井の一番高いところにはかなり大きな明かりがあり、太陽と見間違うほどの光を町に降り注がせている。
そんな中で、人々は通常の暮らしを営んでいた。
リアが思わず駆け出していくが、途中でクルリと身を回して町を眺めたままの刀弥に声を掛ける
「ほら、刀弥も早く！！」
「わかったから。大声を出すな」
そう返して早足で彼女を追いかける。

町に入った二人は、そのまま町の中を散策することにした。
「鉱物資源が豊富とは聞いていたけど、宝石も結構採れるみたいだな」
刀弥がそう思ったのか露店の中にいくつも宝石を取り扱っているお店があったからだ。
透明なケースに入れられた色とりどりの宝石。中にはかなり高い値札の付いた宝石まである。
女性たちは皆、目を輝かせてそんな宝石を眺めていた。
男性も幾人かが興味深く覗いているが、時折、何かを考えているようなそぶりを見せていることからその動機は女性へのプレゼントだと推測できる。
そんな中、リアは彼女たちのように宝石に見とれることはなかった。
時々、宝石を前に足を止めたりはするが、それは物珍しさからであって、宝石だからという理由では決してない。
「リアは宝石とかには興味がないのか？」
それを不思議に思った刀弥が思い切って尋ねてみることにした。
「ん～、ない訳じゃないけど、あの人たちみたいにそこまで惹かれる物でもないかな」
彼の質問にリアは苦笑を浮かべる。
まあ、確かに全ての女性が宝石に色めき立つとは限らないだろう。
刀弥は一人納得して、二人は歩みを続ける。
次に二人が着いたのは、鉱石を取り扱う市場だった。
馬車や乗り物に箱詰めした鉱石を乗せる男たち。遠くのほうでは競りでもやっているのか、いくつもの大きな声が聞こえてくる。
そんな市場の中を二人は歩いていた。時折、二人の傍を馬車や乗り物が通りすぎていく。
「活気があるな」
「そうだね」
熱気のあるその雰囲気に、二人は思わず呑まれそうになる。

辺りには大きな箱がそこら中に置かれている。恐らく、中身は全て鉱石だろう。

既に買い手がついたものなのかはわからない。だが、いずれはどこかに運ばれ様々な物になって、人々に利用されることになるのだろう。

自分たちはその始まりにいる訳だ。

そう考えると感慨深いに思いにさせられる。

そうこうしているうちに、二人は市場の終わりまで辿り着いてしまった。

その先からは、酒場や飲食店の看板が立ち並ぶ飲食街のようだ。

それを見て刀弥は、お腹が減っているのを自然と自覚した。

「……そういえばそろそろ昼頃か」

「まあ、こっちじゃ夕方みたいだけど」

リアの視線の先にある時計を見ると、時計は四分の三ほど回っていた。中央に三二〇ティムという値が書いてあることから恐らく、ここの一日は三二〇ティム（二〇時間）なのだろう。そうなると、この世界の現在時間は二四〇ティム。確かに彼女の言うとおり夕方だ。

「基準時間はまだ朝方なのにな」

腕時計を眺めながら刀弥は呟く。

刀弥のしている腕時計は準備のときに買ったもので、基準時間の時間と日付が刻まれている。

日付は一六二と表示され、針は一八分の五。つまり一〇〇ティムでかなり朝早い時間帯だ。

とはいえ、朝だろうが夕方だろうが昼御飯を食べていない刀弥たちがお腹を空かせていることに変わりはない。

「何かを食うか」

「そうだね」

食事をするという選択肢が出てくるのは当然のことだった。

とりあえず目についた飲食店に入る二人。

席に座ると二人は適当なものを注文した。少しして料理が運ばれてくる。
運ばれてきたのは、茹でたイモ類と豆のシチューとパン。
それを二人は食べ始める。
「で、これからどうする？」
食事をしながら、刀弥が質問を投げかけてきた。
それはさっさと次の場所へ行くのか、という意味だ。
町は夕方だが、自分たちにとっては起きてからそれほど時間は経っていない。
眠いという感覚にはまだ程遠い。
だから、このまま一気に次の場所まで行くのかと聞いた訳だ。
しかし、リアは首を横に振る。
「ラーマスまで一四日程掛かるから、こっちの時間に合わせるつもり」
「じゃあ、宿屋で部屋をとって休むのか？」
「そのつもり」
笑顔で返すリア。
そうしているうちに食事は終わり、二人は宿屋を求めて町を彷徨うのだった。

宿屋はあっさり見つかった。というより、見渡せばどこかに必ずあるといえるような状態だった。
行商など利用者は多いのだろう。
差別化を図るためか、寝心地の良いベッドを使っているとか、最高級の料理を出す食堂があるなどのアピールがあちこちの看板に書かれている。
「どれにする？」
「……普通でいい」

せっかくベッドで寝るのであればできれば気持よく寝れるベッドがいい。しかし、高いところは金の関係で避けたい。その妥協の結果だ。

「私も同感」

どうやらリアも同じ考えだったらしい。

丁度、その条件に合致しそうな宿屋があった。

二人はそこに泊まることにした。

「いらっしゃいませ」

宿屋に入ると受付に座っていたおばさんが声を掛けてきた。

「すいません。二人ですが部屋は空いてますか？」

「一人部屋二つと二人部屋どっちも空いてますけど、どっちします？」

「一人部屋二つでお願いします」

すかさず刀弥がそう答えた。

さすがに二人部屋は前回、何事ともなかったとはいえ、できる限り避けたいところではある。

手続きを終え、差し出された鍵を受け取ると早速二人は部屋に向かうことにした。

だが、ふと視線を感じ、刀弥は足を止め背後へ振り返る。

「どうかしたの？」

そう問いながら、リアもまた彼が振り返った方向に視線を向ける。

けれども、視線の先には何もいなかった。

「いや、誰かがじっと見ていたような気がしたんだが……気のせいだったみたいだ」

「そっか。じゃあ行こう」

そうして二人は再び歩き始める。

そして部屋に辿り着くと、二人は一旦そこで別れた。

中に入ってみるとそこは温かみのある部屋だった。

紅緋色（べにひいろ）の壁紙と白の天井、床には赤橙色（あかだいだいいろ）のカーペットが敷かれている。

窓側にあるベッドに触れてみると、柔らかな感触が返ってくる。
十分満足できるレベルだった。
隣には浴室やトイレに続く脱衣所。
前回の宿屋と比べてそれほど部屋の構成に違いがないことから、この構成が標準的なようだ。
「刀弥。いる？」
と、そこにノックと共にリアの声が聞こえてくる。
「ああ」
返事をすると、彼女が中に入ってきた。
「どうした？」
「暇だったから来ただけ」
用件を訊いてみると、リアは笑みを浮かべてそう答えた。
考えてみれば、眠るまでまだ十分時間がある。かといって暇を潰せるようなものを刀弥は何も持っていない。
一緒に持ってきた本は、既に読み終えてしまった。
ならば、残るのは話をすることだけとなる。
「リアは今まで暇なとき、どうしてたんだ？」
「今まではすることもなかったら、荷物を整理し直したり魔術の勉強や修行とかしてたかな」
「それは建設的だな」
その話で刀弥はここのところ剣術の修行をしていないことを思い出した。
明日、起きたら修行をしようと彼は心に留める。
「でも、今度からは話相手もいるからね。訊きたいこととかいろいろあるし……」
「なるほど。で、何が……」
何が聞きたいんだと言おうとしたそのとき、ドアをノックする音が二人の耳に入った。
二人は顔を見合わせる。
「さっきの人かな？」

「他に心当たりないしな。何の用だろう？」
ただ、ノックの音が随分と低いところからしたのは気のせいだろうか？
とりあえずドアを開けてみることにする。
だが、ドアを開けてみると、目の前に誰の姿もなかった。
「あれ？」
慌てて左右を見回してみるが、やはり誰もいない。
イタズラかとそう思ったときだ。
「……あの……こっちです」
「え？」
声の聞こえた下へと刀弥が目を降ろしてみると、そこには小さな女の子が立っていた。
歳のは一〇歳くらいだろうか。肩まで伸びた本紫色の髪。花色の幼い双眸は見開いたまま、じっと自分のことを見上げている。
服装は寝間着のようで、その腕には何かのぬいぐるみが抱かれていた。
「えっと、何か用かな？」
予想外の訪問者に、とりあえず刀弥は用向きを聞いてみることにした。
それを聴いて彼女は少し逡巡したが、やがて、何かを決意したかと思うと次のようなことを質問してきた。
「えっと、お兄さんたちは旅の人ですか？」
「……まあ、そうだな」
嘘を言っても仕方ないので正直に答える。
すると、少女は言葉を続けようとした。
「あの……その……えっと……」
しかし、口ごもってしまい中々言い出せない
そのうち、中々終わらない来客に疑問を持ったのか、リアが二人のもとに近づいてくる。
丁度そのときだった。

少女が大きな声で頼みごとをしてきた。
「あ、あのお話聞かせてください！！」
「……はい？」
それが刀弥の感想だった。

一章三話「命の抗い」（1）（後書き）

07／26

できる限り同一表現の修正。

一章三話「命の抗い」（2）

「……えーと、名前はリューネ。さっきの受付に座っていたおばさんの娘さんで、私たちから他の世界の話とかが聞きたいんだね？」
「は、はい」
リアの確認の問いにベッドに座り込んでいた少女が頷く。
その様子から、若干緊張しているのが伺えた。
見知らぬ人にあんなことを頼むのだから物怖じしない性格かと思っていたが、どうやらそうではないらしい。
「いいよ」
「本当ですか！？」
迷うことなくリアが彼女の頼みを受け入れると、途端にリューネは嬉しそうな顔を見せた。
「うん。私たち暇だったし、実は丁度今からそこのお兄ちゃんの世界の話とかを聞くところだったんだから」
「そうなんですか？」
「まあ、そうだな」
視線を向けて尋ねてくる彼女に、刀弥は安心させるように穏やかな表情で答える。
「だから、リューネも興味があるなら一緒に聴く？」
「はい！！」
強い口調と共に、彼女は何度も首を縦に振った。
そうして、刀弥は自分の世界のことについての話を始める。
主に電気を動力とした文明であること。それを生み出すために化石燃料、自然エネルギーや原子力と呼ばれているものを利用していること。
特に一般的に使われている道具や娯楽品の話になった途端、興味を持った二人が次々と質問をしてきて、かなり時間が掛かった。
最後は自分が暮らしていた国や大まかな世界の話をして気が付く

と、かなりの時間が経過していた。
「もうこんな時間か」
時計の針は、今の時間が二八〇ティムであることを示していた。大体四〇ティム（二時間半）程も話続けていたことになる計算だ。
「さすがに、お母さんが心配するんじゃないか？」
「あうう、そうですね。そろそろ部屋に戻ります」
そう告げてリューネは、ベッドから飛び降りる。
ところがその直後、急に彼女が倒れて膝をついたかと思うと突然、苦しそうに咳き込み始めた。
激しい咳は何度も繰り返され、リューネの顔が苦しさに歪む。
「おい、リューネ。大丈夫か？」
その様相に不安を抱いた刀弥がリューネの名を呼ぶが、彼女の咳は激しさを増すばかりで止まる気配がない。
ようやく咳が止まったのは、それから少し経ってからだった。
「すみません」
彼女はそう謝ると、ヨロヨロと立ち上がろうとする。
だが、立ち上がって歩こうとしても足元がふらつき、傍から見ていても危なく感じる。よく見ると顔も赤い。
「乗れ。部屋まで送る」
見かねた刀弥がリューネのほうに背を向け、背負う姿勢を見せた。
「すみません。ありがとうございます」
礼を言って彼女は刀弥の背中に乗ると、刀弥は彼女を背負って立ち上がった。
リアがドアを開け、三人はリューネの案内に従って彼女の部屋を目指す。
「病気か？」
その途中、彼女の様子が気になった刀弥が己の疑問をぶつけてみる。
「……生まれつきの病気で、そのせいでほとんど外に出たこともないんです」

「……話を聞きたがったのはそのせいか」
緊張しながらも、あんな頼みをした理由。
病気の彼女は外に出られない。
だけど、外で遊ぶ同世代の子供たちを見て、外への強い憧れは持っていたのだろう。
故に、宿屋に泊まるお客から外の話を聞くことでその思いを埋めていたという訳だ。
「私、病気が治ったらまずはお外でいっぱい遊んで、大きくなったらいろんな人から教えてもらったところに出掛けるのが夢なんです」
「……そうか。叶うといいな」
「はい」
刀弥の返答に、リューネは満面の笑みで応えるのだった。

リューネに案内され彼女の部屋に行ってみると、タイミング良く彼女の母親と出くわした。
「リューネ!?」
刀弥が背負っている彼女の姿を見て、母親は慌てて駆け寄ってくる。
「……お母さん」
顔の赤い彼女はどこかつらいのか、鼻声だ。
「あなた……また咳がでたのね？」
彼女の様子に母親は、何があったのか見当がついたらしい。
ともかく彼女をベッドに寝かせるべく、母親は彼らを彼女の部屋へと招き入れる。
部屋に入ってみると中は部屋中、ぬいぐるみや人形であちこち溢れかえっていた。彼女が抱いていたぬいぐるみも、この中の一つなのだろう。
「仕事もあって、この子には寂しい思いをさせてるので……」

リューネをベッドに寝かせた母親が、二人の視線に気が付いて説明をする。
「わざわざ娘を運んでいただいて、ありがとうございます」
「いえ、お気遣いなく」
母親の礼に刀弥はそう返す。
「その様子ですと、娘がそちらに伺ったのではございませんか？」
「ええと……」
どう答えたらいいかわからず、刀弥は言葉を濁してしまう。
「申し訳ございません。うちの娘が失礼なことをして……」
「別に気にしていませんから、謝らないでください」
謝罪をしようとする母親を、リアが止める。
「ところで、娘さんはどういう病気なんですか？」
話を変える意味もあって、つい刀弥はそんなことを訊ねてしまった。
刀弥の落ち度に気が付いたリアが慌てて膝をついて彼を注意するが、既に時遅し。
「すみません。失礼なことを聞いてしまって」
「いえ、むしろ娘がお世話になりましたし、旅の方でしたら別の手段を知っているかもしれません。お話しします」
ミスを悟り刀弥が謝るも、彼女はそう返してリューネの病気について話し始めるのだった。
「生まれつきあの子は体の抵抗力が弱かったため、鉱石に含まれている微量の毒に抵抗できずにずっとあの病気にかかっています。激しい咳と熱を発するのが特徴ですが、やがて時間が経てば……」
その先を告げることなく母親は嗚咽する。
その様から、その先の言葉はなんとなく見当がついた。
「それだけ聞くと、違う世界に移れば治りそうな気がするんですが……」
この世界で採れる鉱石に含まれている微量な毒物が原因であの症状が出ているのであれば、そこから遠ざけるのが一番の対処はずだ。

ところが母親は残念そうに俯く。
「確かに別の世界に移り住めば毒を吸うことはなくなります。ですが、体内に溜まっている毒を取り除かなければ病気が治ることはありません。しかし、取り除く方法は難しく今は症状を抑えるのが精一杯です。そしてその知識を持つ医者はこの世界にしかいないのです」
「なるほど。あちらを立てればこちらが立たずという訳か」
そうなると一番いいのは、毒を取り除くこと。
そうすれば後は別の世界に行くなりすれば、病気が再発することもない。
難しいと言っていたので、方法がない訳ではないのだろう。
「ちなみに毒を取り除く方法というのは？」
「解毒薬を作り飲ませることです。けれども、問題はその材料でして……」
「材料？」
「はい。詳しくはわかりませんが、ロックスネークの血が必要だということです」
「難しいってことは、そのロックスネークっていうのは強いということですか？」
首を傾げてリアが、母親に尋ねる。
その質問に母親は首肯する。
「はい。ロックスネークのこの近辺では有名なモンスターで、岩のような鱗を持った大きな蛇なのです」
「蛇？　こんな寒いところに蛇がいるんですか？」
これだけ寒い環境で、蛇が活動できるとはとても思えない。
下手すれば、死ぬまで冬眠をしなければならないようなところだ。
だが、その疑問は母親が解いてくれた。
「ですから、外には出ず殆どを地中の中で過ごします。余り動くことはなく、ある程度広い穴を掘って巣を作るみたいで、ときたま坑道を掘っているとロックスネークの巣に繋がったという話を聞きま

す。最近、近くでロックスネークの巣が見つかったという話を耳にしたんですが……」

最後のほう、悔しげな声で母親は呟く。

娘を助けられるかもしれない存在が目の前にいるというのに、どうすることもできないという彼女の無念さがありありと二人に伝わってくる。

「あ、すみません。こんな話をしてしまって。もう時間も時間ですね。お話を聞いてくださってありがとうございました」

そのことが恥ずかしかったのか、決まりが悪そうな顔で彼女はそう言うと頭を下げる。

相手がそう告げる以上深入りもできない。なので、二人は立ち上がって部屋を後にすることにした。

ただし……

「明日、発つつもりですが、その前に彼女に顔を見せに来てもいいでしょうか？」

最後にこれを確認することだけは忘れない。

「それはこちらからもお願いします。あの子も喜ぶと思うので……」

母親は断ることなく、逆にこちらに頼んできた。

「はい。では、おやすみなさい」

「また明日」

「ええ、おやすみなさいませ……」

そうして刀弥は、リューネの部屋のドアを閉じるのだった。

一章三話「命の抗い」（2）（後書き）

ストック分。見直しと修正が終了しましたので新たに投稿致しました。

０７／２６

できる限り同一表現の修正。

一章三話「命の抗い」（3）

この世界では町が洞窟の中にあるため、朝日が町に射すことはない。

代わりに、洞窟の天井にある明かりが太陽の代用となる。

明かりは動くことはない。なので、その明るさで人々は一日の時間を把握していた。

その明かりが灯り始める頃、刀弥は町の中を走っていた。

走り始めたのは二〇ティム（一時間一五分）頃前からだ。

昨日、心に留めていた修行の一環だ。

刀を振れそうな場所がないため、今回はマラソンによる体力トレーニングを行っている。

ただし、ただ延々と走り続けている訳ではない。

時折、地を強く踏み込み急速に移動する動作を何度も繰り返している。

刀弥の家では『瞬歩』と呼ばれている技術で、自分の家に伝わる剣術の中では基本中の基本となる技術だ。

『我が身は野を駆ける風の如く』

これは家に伝わる言葉で、風野流剣術の有り様を述べたものだ。

高速移動とそれを利用した急加速と急停止による急接近、回避を重点に置いた戦い方。それが風野流の剣術だ。

そのため、急速な移動を行う技術である瞬歩はこの剣術に置いて、なくてはならない大切な技術となる。

その証拠に、瞬歩は疾風や一突といった技の中でも用いられている。

それだけにこれが未熟だと、風野流剣術はその力を十分発揮できなくなってしまう。

逆に言えば、瞬歩を鍛え伸ばすことは風野流剣術、すなわち刀弥自身の向上を意味するということになる。

刀弥が瞬歩を行う際に意識するのは、踏み込む足の筋肉。
ふとももも、ふくらはぎ、足首など、それらを瞬間的に強く同時に動かすよう意識する。
身を低くして体を前に倒すようにすれば、体が安定してさらに速度を出すことも可能だ。
また、速度や距離こそ落ちるが、正面だけでなく左右や後ろへも使用することができる。
最初の頃は中々大変だったが、今ではすっかり慣れて自由自在に使えるまでに上達している。
そんな風に修行をしながら刀弥は町中を走りまわっていた。
そうして一通り走りを終えると、彼は宿屋に戻ってくる。
部屋へ戻るために入り口を開けたそのとき、聞き覚えのある叫び声が彼の耳に入ってきた。
それは昨日の母親の声だ。
声はどこか焦りを帯びていた。聞こえる方向からしてリューネの部屋からのようだ。
そこまで考えたとき、刀弥の頭の中にある可能性が浮かびあがった。
まさかと思い、急ぎ部屋に向かいノックもせずにドアを開ける。
そこで彼が見たものは、激しい咳に苦しむリューネと彼女が寝るベッドに必死に呼びかける母親の姿だった。
「リューネ!!　しっかりしてリューネ!!」
母親は、何度も何度も揺すりながら娘の名前を叫ぶ。
無我夢中なのか、揺すり方が激しくそれが逆にリューネの苦しみを強めているように見える。
「落ち着け!!　そんなに強く揺すっても逆に彼女が苦しむだけだ」
見かねた刀弥が駆け寄り母親の手をとって諭す。
急いでたこともあって、つい地の口調が出てしまっていた。
彼の指摘でようやく母親はそのことに気が付いたらしい。
目を見開き、慌てて手を娘から話す。

リューネは未だに咳を続けている。その強さは昨日、見たものよりもひどい様相だ。
「これまで、こんなに強い咳をしたことはあるんですか？」
口調を改めて刀弥は母親に問い掛ける。
「いえ、始めてです」
だからこそ、彼女はあんな反応をしたのだろう。
「ともかく、医者のところへ……」
「そ、そうですね」
刀弥の提案に母親が頷くと、刀弥はベッドに近づきリューネを抱き上げる。
そして、二人は医者のもとへと急いだのだった。

「……結論から申しますと、かなり危険な状態です」
それがリューネを見た医者の言葉だった。
彼らがいるのは小さな病室。
宿屋の部屋とは違い、清潔感のある白い壁と床と天井。小さな窓には明るくなった町並みが見える。
入口側の隅には机が、窓側の隅にはベッドがあり、ベッドには小さな患者が寝ていた。
医者はその傍に立っており、それを眺める形で刀弥と母親が入り口前で並んでいる。
医者のもとに連れてきた二人は、医者に言われるままリューネをそのベッドに寝かせた。
その後、リューネが落ち着いたのを見計らって医者が診察を始め、今へと繋がっている。
現在、リューネは静かに眠っており、その寝顔は先程まで苦しんでいたとはとても思えないほど安らぎに満ちたものだった。
「これまで、彼女の病気が進行しないように薬を飲ませてそれを抑

えてきました。ですが、抑えるだけなので遅らせることはできても進行そのものを止めることはできません」

医者は淡々と事実を告げていく。

その平淡な口調に、思わず刀弥は苛立ちを感じてしまった。

「……つまりは死ぬまで時間がないということか？」

もはや口ぶりを直す気も起きない。

彼の問いに医者は首を縦に振る。

「……そ……んな……」

その途端、母親が崩れ落ちた。

無理もないだろう。大事な娘がそうしないうちに亡くなると聞いて、平静でいられるはずがない。

悲しみの声を漏らし俯く母親。

しばらくの間、刀弥はその様子を見ていた。

そんなときだ。寝ているはずのリューネの声が彼らの耳に届いた。

「……ん……お……か……あさ……ん」

「リューネ！？」

娘の声に急ぎ、彼女のもとに駆け寄る母親。

「……私……死ん……じゃう……の？」

「そ、それは……」

医者の話が聞こえたのだろうか。突然の問いに、母親は戸惑い返答に詰まってしまう。

けれでも、その態度が何よりの証拠となってしまった。

「そうなんだ……」

彼女の顔はどこか達観しており、まるで己の運命を受け入れたかのように見えた。

だが、それは違った。その証拠に彼女の目にはうっすらと涙が浮かび上がっている。

「……や」

「……リューネ？」

弱々しい口から小さな言葉が溢れる。

小さすぎた故に何を言ったのか聞き取れず、母親が聞き返す。
「……死ぬなんて嫌。私……まだ……まだ何も叶えてないんだよ……お外で遊んでもいない……お客さんたちから聞いた場所にも行っていない……まだ全然何も叶えていないのに死ぬなんて……嫌だよ……」
それは小さな子が、自分に訪れるであろう運命を拒絶する言葉だった。
母親はそれを聞いて彼女の願いを叶えられない自分に涙し、医者もまた己の無力さに歯噛みしていた。
そんな中、刀弥が口を開く。
「ところで、聞きたいことがあるんだが……」
「……なんでしょうか？」
「ロックスネークの目撃情報。どこかで巣を見たという話を耳にしたんだが誰が言っていたかわからないのか？」
その質問に医者は眉を寄せ、母親は顔を上げる。
両方共、彼が何を意図しているのか、わかったからだ。
「病の原因である毒を取り除けば、少なくても今の病気は治って死に至ることはなくなる」
「た、確かにその通りです。ですが、問題はその素材となるロックスネークがとんでもなく……」
「御託はいい。俺が今知りたいのは、ロックスネークがどこにいるかだ」
医者の言葉をピシャリと刀弥は遮る。
「……本気ですか？」
それでも医者は何とか口を開き、そう訊ねてくる。
「本気だ」
間髪入れずに刀弥がそう返す。
その言葉に迷いは不安はない。
あるのはただ、ロックスネークを倒すという強い意志だけだ。
「……」

そんな刀弥を医者と母親はじっと見つめていた。
まもなくして、医者は大きく息を吐くと机に向かいメモに何かを書き込んだ。
そうしてメモに何かを書き終えると、彼はそれを持って刀弥のもとに近付いていく。
「ここにその情報を書いておきました。恐らく、ロックスネークはまだいるはずです」
「なんだ。知ってたんじゃないか」
そのメモを受け取りながら刀弥は、皮肉げに言葉を返す。
「私は医者です。助かる可能性があるなら、私だって助けたいと思っています。この情報もそのために集めておきました」
少なくても彼は、助かってほしいと願っている。
そのために、できる限りのことはしていたのだろう。
「なら、今がそのときだな。それじゃあちょっと、素材集めに行ってくる」
そうして彼は急いでその場を後にするのだった……

刀弥は町の中を駆け抜ける。
通りを歩く人々の姿はまばらだ。
だが、それでも時折姿を見せ刀弥の障害となる。
されど、彼が止まることはない。
ステップと急加速、急停止を駆使して彼らの間を通り抜ける。
人々は驚いて通り抜けていく正体を確かめようと、過ぎ去ったほうへと目を向ける。しかし、そこに彼の姿はない。
やがて、彼の視界に宿屋が見えてきた。
一瞬、頭の隅にリアのことが思い浮かぶ。
――あいつには一応、知らせておくか。
余計なことをして時間をとらせてしまったことを悪いと思う一方、

死にそうな子を見捨てることなどできないという思いもある。
彼女ならわかってくれる。
漠然とだが、そんな信頼があった。
丁度そのとき、その彼女が宿屋から出てきた。
目線がまっすぐこちらを向いていることから恐らく、こちらに気付いて出てきたのだろう
「刀弥！！」
彼女がこちらの名前を呼んで近づいてくる。
刀弥の側までやってきたリアは、そのまま彼の隣に並んで走りだした。
「悪い。リア、実は……」
「ロックスネークの巣に行くんでしょ？」
刀弥が事情を話そうとした直前、リアがそう言って彼の言葉を止める。
「あの子が、お医者さんのところに運ばれたっていうのは聞いたし、刀弥ったら宿屋に戻るにしてはすごい勢いで走ってるんだもん。何となく何をしようとしているのかわかっちゃった。だから、私も行くよ」
「……」
想像以上の結果に刀弥は呆然としていたが、すぐにその顔が笑みとやる気に満ちたものに変わる。
「私だって、助けられるかもしれない子を見捨てることなんてできないもの」
「……そうだな」
彼女も自分と同じ抱いているという事実に、自然と嬉しさが込み上げてくる。
そうして二人はメモに書かれている場所を目指し町を出るのだった。

一章三話「命の抗い」（3）（後書き）

とりあえず、手持ちのストックは使いきりました。
後は新たに書くだけです。
時間は掛かるかもしれませんが、読んでくだされば幸いです。
皆さんが気に入ってくださるように頑張りますので、よろしくお願いします。
07／26
できる限り同一表現の修正。

一章三話「命の抗い」（4）

自分たちの足音が、壁に跳ね返って耳に入ってくる。
リアと刀弥たちは今、洞窟の中を走っていた。
元々坑道だったのを交通の便から拡張して、多くの人や乗り物が通れるようにしたものらしい。そのため、それなりに広い。
明かりは洞窟の天井を支える柱に時折、目印としてついているものだけ。それが二人を照らしている。
「メモによると、じきにロックスネークの巣に繋がる坑道が見えてくるはずだけど……」
握りしめたメモを眺めながら、刀弥が呟く。
こうしている間にも、時間は刻一刻と進んでいく。
心なしか刀弥の顔に焦りが見える。
「刀弥。落ち着いて」
そんな彼を、リアは落ち着かせようとする。
心情としてはリアも理解できる。しかし、ここは戦いのためにも冷静になってもらわなければいけない。
「岩のような鱗を持つようなのが相手なんだから、冷静にならないと」
「……そうだな」
勇んで出てきたはいいがロックスネークについて知っていることといえば、岩のような鱗を持っていることだけ。
岩のようなというのだから、かなり固い可能性がある。と、なれば刀弥の剣がまともに通じるかは怪しい。
そうなると、リアの出番ということになる。
彼女が習得している魔術の中に、そういう相手でもダメージを与えられる魔術がある。
故に、倒せないということはない。
「仮に固い相手だったとしても、私が何とかする。だからお願い。

刀弥はできるだけロックスネークの注意を引きつけて」
「わかった」
彼女の頼みにパートナーは強く頷いた。
その返事に、リアは満足な顔を見せる。
と、突然一匹のモンスターが奥の曲がり角から姿を現した。
手足はなく長く伸びた胴体の先、顔に当たる部分のほとんどが口で埋め尽くされているという生き物だ。
「……ミミズか？」
その言葉の通り、それは巨大なミミズだった。
咄嗟に足を止めて、臨戦態勢に入るリア。
ところが、刀弥は立ち止まるどころかそのまま巨大なミミズへと突っ込んでいく。
「と、刀弥！？」
この行動にリアは驚き、彼を呼び止めようとする。
けれども、その直後、巨大なミミズが口から何か液体を吐き出した。
液体は刀弥に目掛けて飛んでいく。
当たる。そう思われた攻撃。しかし、刀弥はそれを見事に躱した。
前進しながら僅かに左へと飛び、身をひねってそれを避けたのだ。
空を切った液体は、地面へと落ちる。
地面に落ちた液体は、音と煙をたてて落ちた地面を溶かし始めた。
恐らく消化液か何かだったのだろう。
避けた刀弥はそのまま身を回しながらミミズに近づくと、その勢いのままミミズを横に斬りつけた。
斬られたミミズはその部分から血を噴き出し、倒れていく。
それを確認することなく、刀弥はそのままその場を走り去った。
あっという間の攻防にリアはぼうっと見惚れてしまっていたが、刀弥が先に行ったことに気が付くと慌てて彼の後を追いかけ始めた。
その後も、時折モンスターたちが姿を現すが、刀弥は歩みを止めることなく次々とモンスターたちを倒していった。

リアは、その様子を後ろから眺めているだけだ。
歩みを止めないのは、時間が惜しいという思いからだろう。だから、走ったまま相手の攻撃を避けて一撃で倒すという手段を選んだ。
すごいのは全てが初見のモンスターであるにも関わらず、刀弥に怯えがないということだ。
初めて見るということは、どのような戦い方をするかわからない。その未知に大半の人たちは怯える。だが、刀弥にはそれがない。相手が経験した、しないに関わらず迷わず相手に突撃していく。
未知の相手に怯えるのは悪いことではない。それ故に相手を警戒し、情報を得ようと出方を伺うためだ。むしろ、本来であれば刀弥の行動の方が無謀なのだ。
にもかかわらず彼はモンスターの攻撃に反応して、見事にそれらに対処していく。ときには刀で相手の腕を斬り、ときには足と身を使って避け、ときには相手の攻撃を逸らして……
そうして対処した後、急加速して相手に一気に接近し、相手の急所と思われる部分に一撃を入れる。
高い反応速度と対処能力によって為せる技だ。
特に目を見張るのが、その対処能力だ。
刀弥から彼の世界の話を聞いた限り、彼がいた国は争いのない平和な国のようだ。
モンスターとの戦いはもちろん、実戦経験すら積んでいないはずだ。ここに来てからそれほど日も経っていない。
それなのに、彼は熟練者のような動きをみせている。
それはつまり、彼の対処能力は経験といった知識面ではなく別の面からきていることを意味する。
考えられる可能性があるとすれば……一つは感、もう一つは分析力だ。
分析力は得られる全ての情報を元に、ある答えを推測する能力だ。
これが高ければ相手の能力をより詳細に知ることができるし、場合によってはまだ知らぬ相手の切り札を予測することもできる。

これら二つによって、刀弥はどうするのが最善なのかを判断しているのだろう。

「……凄い」

思わず感嘆の声が漏れてしまう。

「ん？　どうした？」

その声を聞き取り刀弥がリアのほうへと振り向く。

「初見の相手に対して、あれだけ対処できるのは凄いなって思って……」

「そうか？」

本人は、あまりあの結果を特別なことだとは思っていないようだ。

「何が来るかわからないのに、構わずに接近するなんて普通はできないよ」

「まあ、これが普通のときだったら、俺もしなかったな」

どうやら今回が特別だったらしい。随分と無茶をするものだと、リアは内心苦笑する。

「ただ、自信はあった。何となくだけどな」

「そうなんだ」

そうこうしているうちに、別れ道が見えてきた。

一つはこれまで通りの道。もう一つは木材で塞がれた穴の道。そちらには木材の中央に立ち入り禁止を意味する張り紙が貼ってある。

――あそこかな？

刀弥のほうを見ると彼が頷きを返す。どうやら当たりのようだ。

そのまま刀弥が刀で邪魔な木材を斬って道を作ると、二人はその穴へと飛び込んでいった。

明かりが届かなくなってきたのを見計らって、リアは魔術で明かりを灯すと二人は先へと進む。

そうして、二人は広い空間に辿り着いた。

「ここがロックスネークの巣か……」
そう言って、刀弥は周囲を見渡す。
高い天井と広大な領域。
ファルスには負けるが、それでも十分広いと言える空間だ。
「こんなところにロックスネークがいるんだ」
辺りを見回しながら、リアがそんな感想を呟く。
そんなときだ。
二人の耳に、何か巨大なものが這ってくる音が聴こえてきた。
「……来たみたいだな」
音の方向へ身を構え、刀弥が告げる。
やがて、二人の視界に目的の敵が姿を見せた。
「岩のような鱗か……まさしくその通りだね」
二人の見つめる先……そこには巨大な岩々の塊がこちら向かって近づいてくる姿があった。
岩のようなでこぼこの鱗。それらが連なることで、まるで岩々の塊のように見える。目は赤く光っており、まっすぐ二人を見ていることが遠目からでもわかった。
「あれが、ロックスネークか」
見るからに強そうなその姿に、自然と二人の気が引き締まる。
自分のテリトリーに侵入されたことを怒っているのか、ロックスネークは咆哮を上げ、そのまま二人に向かって突進を繰り出してきた。
すぐさま二人は左右それぞれに飛んで突進を避けると、刀弥はロックスネークに接近しリアは魔術式を組み始める。
刀弥がまず狙うのは鱗と鱗の隙間。
ここは可動を持たせるための部分のため、鱗そのものよりかは斬りやすい部分のはずだ。
しかし、結果は甲高い音をたてて刀が弾かれるだけだった。
舌打ちをする刀弥。
一方のロックスネークはその間に向きを刀弥のほうへと変え、彼

に襲いかかろうとした。
だが丁度そのとき、リアの魔術が発動する。
『ボルトライトニング』
彼女の眼前に電撃が生まれ、それがロックスネーク目掛けて走っていく。
電撃はロックスネークにぶつかり、ロックスネークは感電を起こしてのたうつ。
「なるほど。電撃か」
確かにそれなら相手がどれだけ硬かろうが関係なく、ダメージを与えられるだろう。
電撃が収まり、むくりと起き上がったロックスネークは電撃を放った相手を鋭い視線で睨みつけた。
ロックスネークが彼女に向けて動くよりも先に、刀弥はロックスネークの正面に回りこむと今度は体の下、顎辺り目掛けて刀を振り上げる。けれども、今度もぶつかった音がしただけで刀が食い込むことはない。
だがしかし、相手の注意を引く効果はあったようだ。
ロックスネークの視線が、リアから刀弥へと変わる。
直後、ロックスネークの口が大きく開かれ彼を飲み込もうとその顔を迫らせる。
寸前のところで後ろに飛んだことで、何とか避けることができた。
すぐさま反撃のために近づき、その瞳に目掛けて渾身の突きを放つ。
風野流剣術『一突』
己が出せる最大の踏み込みと腰のバネを使った最高の一撃は、しかし、その瞳を貫くことはなかった。
「これでも駄目か」
手の痺れを感じながら急ぎ、後退する刀弥。
ダメージを受けることはなかったが、さすがに今度の攻撃にはロックスネークも怒ったようだ。

叫び声をあげ、刀弥に噛み付かんとその牙を向けてくる。
襲い来る牙を次々と躱す刀弥。
その猛攻に、反撃する暇もない。
けれど、問題はない。反撃は自分がする必要はないのだから……
その期待通り、その彼女が新たな魔術を発動させる。
現象が起こったのはロックスネークの真上。そこに巨大な雷が現れたかと思うと、それがロックスネークのいる空間へと落ちたのだ。
一瞬、凄まじい音と落雷の光が広大な領域に満たされる。
ロックスネークの空間に落ちた落雷はかなり太く、例えるなら鉄槌のようだった。
『ボルトハンマー』
大規模な電撃を生み出し、広範囲に落とす範囲殲滅向けの魔術だ。
「刀弥。大丈夫？」
「ああ、大丈夫だ」
心配そうな声で訊ねてくるリアに、刀弥は無事であることを示すために大きなな声で答える。
そんなやり取りをしている二人だが、その視線がロックスネークのいる地点から離れることはない。
視線の先にはロックスネークが倒れ伏しているが、二人ともあれで死んだとは思っていない。
そしてその予想通り、ロックスネークがゆっくりと起き上がる。
「……さっきの魔術のダメージはしっかり入っているみたいだな」
ざっと見たところ、ロックスネークに傷らしい傷はついていない。
けれども、最初と比べると僅かではあるがふらついている様子がある。そこからの判断だ。
やはり、理想は自分が注意を引き、リアがダメージを与えるという形。
しかし、相手とて一応は脳のある生き物。同じパターンがいつまで続くか……
その不安は見事に的中する。

起き上がったロックスネークは、リアのほうへとその首を向けると彼女のもとへその巨体を突っ込ませる。

ロックスネークのの注意を引こうと、刀弥が回りこんで攻撃を仕掛ける。だが、ロックスネークが刀弥のほうへと向くことはない。どうやら、ダメージを与えることのできない刀弥を無視することにしたようだ。

そのまま口を開き、リアに襲い掛かるロックスネーク。

それを右へと飛んで避けるリア。そんな彼女を、ロックスネークの口が追いかける。

なんとかそれらの攻撃をリアは避け続けてはいるが、魔術式を構築できるほどの集中をする暇がなく反撃する手立てがない。

一方の刀弥はロックスネークの注意を自分のほうへと向けるべく様々な剣戟を試みるが、全てロックスネークの固い鱗に阻まれてしまっていた。

風野流剣術『疾風』

速度と一撃を合わせたこの必殺の一撃もやはり、ロックスネークの鱗を突破するには至らなかった。

現状、ロックスネークに唯一ダメージを与えることのできるリアが封じられ攻め手を欠いている状態だ。

こちらに決定打はなく、しかし相手の攻撃はこちらをあっという間に終わらせるほどの威力。

このままでは、いずれこちらが潰されてしまう。

この状況を打破する方法があるとしたら、それは刀弥自身がロックスネークに有効打を与えれるようになることだ。

そうなればロックスネークは刀弥にも注意を割かざるを得ず、自然とリアが魔術を使えるだけの隙を晒してくれるようになるはずだ。

最もこれが簡単ではないのは、当の本人だってわかっている。

けれども、できなければリューネを助けられないばかりか自分やリアの命も危なくなる。

己の刀を見る。

何度もロックスネークの体に弾かれているが、それでも刃こぼれ一つ起こしていない。
中々に丈夫らしい。これなら多少の無茶をしても折れることはないだろう。
――やるしかないな。
静かにそう決意すると、再びロックスネークへと向かって疾走を開始する。
狙うのは最初と同じ鱗と鱗の隙間。放つのは飛び上がった己の体重を乗せた真っ直ぐな振り下ろし。
が、この一撃もやはり弾かれてしまう。
それでも構わない。すぐさま刀弥は次の攻撃に入る。
今度も同じ飛び上がって体重を乗せた振り下ろし。ただし、今度は先程と違って若干体の捻りを加えた斜め気味の斬撃。
やはり、拒絶される。
ならばと今度は、手首の動きを若干変えてみる。
そうして彼の攻撃は繰り返される。
この姿勢ならどうだ。このタイミングなら上手くいくか？　もっと速度を乗せてみよう。
いつしか刀弥は、己の攻撃の練磨（れんま）に意識を研ぎ澄ませていった。
無駄な力がある。それを取り除こう。
体の連動でもっと威力が上がるはずだ。ならば、そうしていこう。
まだ、足りない。もっと体の制御に意識を集中して引き出せ。
そうやって、繰り返し修正されていく刀弥の斬撃。
その斬撃はやがて、ロックスネークの意識を彼に向かせるまでに至った。
まだ、ロックスネークの体に傷はない。だが、彼の本能がこの人間は危険だと警告を告げていた。
故にロックスネークは本能に従い、自身の体を使って彼を押し潰そうとする。
巨大な体と固い皮膚を持つ相手ののしかかりだ。まともに喰らえ

ばあっという間に死んでしまうだろう。
しかし、刀弥はその攻撃をあっさりと避けると、ロックスネークの赤い瞳を狙うべく飛び上がる。
赤い目は、刀弥が近づくに連れて大きくなっていき……

そこに刀弥の一撃が放たれた。

これまでで最高の攻撃。それがロックスネークの瞳を切り裂いた。
瞳を斬られたロックスネークは口を開き、痛みの咆哮をあげる。
斬り裂いた刀弥はそのまま追い打ちをかけるべく、未だ咆哮をあげているロックスネークへと向かって疾走を開始する。
それに気が付いたロックスネークが、彼を迎撃するため己の尾を横からの軌道で振り抜いてきた。
刀弥は既にかなり近くまでロックスネークに迫っている。今から下がったとしても尾の範囲から逃れるのは不可能だ。
当たる――そう思われた攻撃。だが、その攻撃をリアの魔術が止めてみせた。
再び発動させたボルトハンマーで、ロックスネークを押し潰したのだ。
ボルトハンマーの威力と電撃によってロックスネークの体が一瞬、硬直。
その隙を突いて刀弥がロックスネークの側まで接近、距離を詰めたところで『疾風』を使用する。
疾風の瞬間、刀弥は踏み込む右足に己の意識を集中させる。
――もっとだ。もっと強く踏み込め。
その強い思いに応えるように、彼の右足が爆発的な脚力を生みだした。
今までの己を超えた速度。その速度を持って刀弥はロックスネークに迫る。
そしてロックスネークとの交差の瞬間、刀弥は最高の速度を乗せ

た全力の一撃をロックスネークの首元へと見舞った。
ロックスネークの首は呆気無く切り裂かれ、そこから大量の血が溢れる。
ロックスネークは最後の力で頭を天に向けると雄叫びをあげ、そのままその身を傾けていく。
巨体が倒れたことで地響きが鳴り、地面が沈む。
それらが収まると、後に残ったのはロックスネークの死体だけだった。
「刀弥。早くロックスネークの血を……」
「そうだな」
リアの促され、刀弥は急ぎロックスネークに歩み寄る。
見るからに血はかなりの量がロックスネークの体外に溢れ出していたが、幸いにも体内にまだ結構な量が残っていた。そのため、集めることに苦労することはなかった。
血を一通り集め終えると、この血を急いで届けるべく二人は走ってこの場を後にするのだった。

一章三話「命の抗い」（4）（後書き）

07／26

できる限り同一表現の修正。

一章三話「命の抗い」（5）

「……ひとまず、これで一安心です」
注射と思わしきものをリューネに射ったあと、医者はこちらを向いてそう告げてきた。
「……そう……ですか……」
その一言で安心したのか、涙声の母親が膝をつく。
少しして彼女はゆっくりと立ち上がると、刀弥たちのほうへと向き直り頭を下げてきた。
「ありがとうございます。なんとお礼を言っていいのか」
「いえ、気にしないでください」
刀弥はそう言って、彼女の面を上げさせようとする。
「いえ、娘の命を救っていただいたのです。むしろ、これだけでは足りないぐらいだと思っています」
それでも、やめない母親の姿に刀弥とリアはどうしたものかと顔を見合わせる。
「まあ、お母さんもそれくらいでいいでしょう。娘さんが寝てますし……」
その言葉に母親は顔を上げ、刀弥たちと共にベッドに眠るリューネのほうを見る。
どこか楽しそうな表情で眠る彼女。
時折、楽しそうな寝言を呟いていることから、とても楽しい夢を見ているのだと容易に想像がついた。
「そうですね」
娘の様子を眺めた母親は、あっさりと引き下がる。
「とはいえ、彼女の気持ちは私もよくわかります。私のほうからも、お礼を言わせてください。後、これを……」
そう言って、医者が差し出したのは布袋だった。それを刀弥が受け取る。

袋を開いてみると中身はお金だった。それもかなりの額の。
驚いた二人が医者のほうへと見やると、医者が口を開き説明をする。
「それは、ロックスネークの血を取りにいってくれたことへの報酬です。大体、それくらいが相場になっています。ご遠慮せずにお受け取り下さい。受け取ってくださらなければ、私がいろいろと言われてしまいますので……」
そう言われてしまうと、刀弥たちも受け取らざるえない。
とりあえず刀弥が布袋を収める。
「あの……それでこれからどうなさるつもりですか？　できればいろいろとお礼をしたいのですが……」
報酬を受け取ったのを見計らって、母親がそんなことを提案してきた。
本来であれば、二人は今日発つつもりであった。
今は昼頃なので、今から経ったとしても遅いというわけではない。
しかし……
「とりあえず、今日は泊まって、明日リューネの様子を見てそれから発とうと考えてます」
刀弥は母親にそう答えた。
自分たちの関わったことだ。
最後まで付き合うことはできないが、それでもある程度までは見届けたい。
それが二人の偽らざる本心だった。故に二人は出発を一日伸ばすことにした。
「ありがとうございます。娘も喜びます。お代に関しては結構です。もちろん、昨日の分も……これも私からのお礼です」
「……わかりました」
そこまで言われると、何も言い返せない。
大人しく彼女の厚意を受け取ることにする。
「それでは、私は仕事がありますので……」

そう言い残して、彼女は病室を後にした。
「……ここにいても仕方ないし、私たちも出ようか」
「……そうだな。それでは失礼します」
そうして二人もまた病室を後にした。
夕方、二人が宿屋に帰ってみると、リューネの母親がかなり張り切ったようで夕食はかなり豪勢だった。
食べきれるか不安だったその夕食を食べきった二人は、ロックスネークとの戦いでの疲れもあって部屋に戻るとすぐに床に就いた。

翌日の朝……
刀弥とリアは病室の前にいた。
刀弥がドアをノックする。
「はい。どうぞ」
元気そうな声が、部屋の中から返ってくる。
その声を聞いて刀弥がドアを開けると、そこにはベッドの上で体を起こした少女の姿があった。
「お見舞いに来たよ」
そう言ってリアは病室に入ると、手に持っていたお見舞いの品を彼女に見せびらかす。
「うわぁ、ありがとうございます」
お見舞いの品を見てリューネが喜ぶ。
「体はどうなんだ？」
ベッドに近づいていきながら、刀弥が容態を訊ねる。
「まるで自分の体じゃないくらい元気です」
嬉しそうに告げるリューネを見て、二人は顔をほころばせる。
「お母さんから聞きました。私がこんなに元気になったのはお兄ちゃんたちのおかげだって……」
「そんな大したことはしていない」

そう言って謙遜する刀弥。
自分がやったことといえば、手に入れるのが難しい素材を代わりに取りにいったということだけだ。
これだけなら他の誰かでもできるはずだ。
「……あの聞いてもいいですか？」
そんなことを考えていると、ふとリューネが何か聞きたそうに訊ねてきた。
「何だ？」
「どうして助けてくれたんですか？」
それが不思議でならなかったらしい。
つぶらな瞳が、じっと刀弥を見つめている。
「一つは、自分ががんばれば助けられる命だと思ったから……」
死ぬしかない命が自分の手で助けられるかもしれないのなら、助けたい。そう思ったのは本当だ。
自分の力が誰かの役に立つ。これほど嬉しいことはない。
けれども、その動機以上に自分が彼女を助けようと思った動機がある。それは……
「もう一つはリューネが、死にたくないと言ったからだな」
自身にやって来るであろう運命を彼女は拒んだ。
それは言葉だけで実際は運命を変えることなどできないもの。だけど、それは確かに彼女の選んだ選択だ。
だからこそ、彼女の代わりにその選択を叶えたいと思った。
「それが俺の動機だな」
そう言ってリューネの頭を撫でた。
撫でられたリューネは気持ち良さそうに目を細め、もっと撫でてとばかりに頭を寄せてくる。
そうしてしばらくの間、刀弥は彼女の頭を撫でていたが、やがてその手を止め彼女の頭から離す。
「それじゃあ、そろそろ行くか」
既に荷物は、二人とも持っている。

ここに来る前にリューネの母親には別れを済ませ、最後にここへ来たのだ。
彼女は既に店をたたむための準備を始めており、リューネの退院と同時に別の世界に渡って新たな生活を始めるつもりだということだ。
「もう行くんですか？」
寂しそうな顔で、彼女が問うてくる。
「ああ」
それに対して刀弥が大きく頷く。
「寂しいです」
「なら、大きくなったら俺たちを追ってくればいい」
「え？」
刀弥の返事にリューネは、少し呆然とする。
「とりあえず病気を治す目処がたったんだ。すぐに全快とはいかないだろうが、それでも外で遊ぶという夢も夢物語じゃなくなった。なら、努力次第じゃ『いろんな人から教えてもらったところに出掛ける』という夢だって叶えられるんじゃないか？　そうしたらついでに俺たちを探すことだってできるはずだ」
その言葉に彼女の瞳が大きく揺れる。
「……そうでした。私……もう家の中でじっとしていなくてもいいんですよね……」
彼女の頬に水滴が伝う。
自分が皆と同じように過ごせるようになったことをようやく理解し、嬉しさのあまり涙が出てきてしまったのだ。
「……あ！！　そうだ。せっかくだから三人でオーシャル撮ろうか？」
そんな空気を変えるためなのかはたまたただ単純に思いついただけなのか、突然リアが手を叩いてそんな提案をしてくる。
「……そうだな」
せっかくの出会いを忘れないように、何かに残そうというのだ。

反対する理由はない。
「ほら、リューネも涙拭いて。せっかく撮るのなら笑顔で撮らないと」
リアに言われ、リューネは急いで己の腕で涙を拭く。
刀弥はいつも通りの表情で佇み、リアはオーシャルを取り出し微笑む。
そして涙を拭いたリューネはにこやかな笑顔を浮かべて、オーシャルを見つめていた。
「それじゃあ、撮るよ」
その言葉の直後、オーシャルが点灯。撮影が完了したことを彼らに伝えた。
「はい。終わり」
「あの、どんな風に撮れたか見てもいいですか？　変な顔だったら恥ずかしいので……」
「うん。いいよ」
そう答えてリアはオーシャルを起動。彼女たちの目前に先程撮られた情景が、小さく立体的に映しだされる。
それはとても微笑ましい光景だった。
白い病室で少女たちが笑い、少年もどこか平然としながらも口の端が僅かに上がって笑みを見せている。綺麗とは少し違う。どちらかというと明るいという言葉がよく似合う、そんな情景だった。
「うん。いいんじゃない？」
「悪くないな」
「そうですね」
三者三様にそれぞれ感想を述べる。
「それじゃあ、これでいよいよお別れかな」
オーシャルで映しだした情景を消しながら、リアは名残惜しそうに告げる。
「はい。お元気で」
「それじゃあ、ばいばい」

「またな」
そんな別れの挨拶を口にして二人は病室を後にした……

「さて、ようやく出発だな」
医者の家を出た二人は、その足で町の出口へと向かう。
「悪いな。余計な時間をとらせてしまって……」
「気にしないの。私だって刀弥の立場だったら同じことをしていたと思うし……」
刀弥の謝罪にリアがそう励ます。
「そうか……ところで、次はラーマスまで一直線か？」
「ううん。次はテシェラって町。ここからだと大体二日ほど掛かるかな？」
そう言って彼女が地図を見せてくる。
地図を見ると、ファルスとラーマスの間に五つほどの町々がある。これらを経由してラーマスに向かうということだろう。
「二日掛かるということは、一日は洞窟で野宿か」
「刀弥。見張りの時間に寝ないでよ」
「……気を付ける」
言われ、始めての野宿だということを自覚する。
複数人で旅をする場合、片方が寝てもう片方が見張りをするのが基本だ。
何故なら、そうすることで身を守ること、疲れ癒すことの両方が叶えられるからだ。
そのため、見張りをする側の人間の責任は重大だ。自分だけでなく仲間の命も自分に働きに掛かっているのだから……
「まあ、あまり気負い過ぎると逆に疲れが溜まって眠くなっちゃうから、適度にリラックスするのがベストかな」
刀弥の反応を見たリアはそう助言を告げて、刀弥の肩の力を抜か

せようとする。
「なるほどな」
それに刀弥は苦笑で応える。
そんな会話をしながら歩いているとやがて、二人はテシェラへと続く洞窟へと辿り着いた。
「忘れ物はない？」
「ない。必要になりそうな物は？」
「お金の換金はまだ大丈夫だし、明かりは刀弥の分は既に買って、私は魔術があるから問題なし。薬はまだ持つはずだし、特別持っておいたほうが良さそうな薬草もないから……うん。全部ある」
基本的に通貨は国ごと、世界ごとで異なる。しかし、大方の国は同じ世界内の通貨やゲートの先の隣国の通貨であれば使用できるのが通例だ。
ファルセンの場合、世界そのものが一つの議会制の国という形をとっている。
定期的に町長や代理人が集まっては、ファルセン全体の行く末や法律などを決めているということらしい。
故に、二人が今持っているフォースレイのエセドニア王国の通貨はまだファルセン内では使用可能ということだ。
「なら、大丈夫だな。通貨はラーマスに着いたら換金しないとな」
「そうだね。リアフォーネまで行っちゃったら、使えなくなっちゃうもんね」
「その辺、気を付けないとな」
「だね」
そんな会話をしながら刀弥はふと、これまでのことを少し思い返す。
リアと出会い、彼女に誘われ旅をすることになった。
それに対して、どうなるかという不安は確かにあった。
けれども、たった数日だが旅を楽しんでいる自分がいる。
何よりこの世界では、自分の世界で誰からも必要とされてなかっ

た自分の剣術が誰かの役に立てる。
刀弥にとってこれほど嬉しいことはない。
思いの外、自分に向いていたようだ。
「どうしたの？　刀弥。何か考え込んでるみたいだけど？」
そんな刀弥の様子に、気が付いたのだろう。
不思議そうな顔で、リアが訊いてくる。
「いや、意外にも今の生活が自分に合ってるみたいだなって思って……」
素直に、考えていたことを話す刀弥。
「そうなんだ」
「リアはどうなんだ？」
「私？　楽しいよ。一人より誰かと一緒のほうがいろんなことを言い合えるしね」
そう言って、リアは嬉しそうな笑顔を見せた。
「ほら、こんなところで話ばかりしないで行こう」
「そうだな」
そうして二人は歩き出す。自分たちの道を……

三話終了

一章終了

一章三話「命の抗い」（5）（後書き）

これで一章は終了です。
二章はプロットなど練る必要があるため、少々時間が掛かりますが頑張りますのでどうぞよろしくお願いします。
０７／２６
できる限り同一表現の修正。

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」（1）（前書き）

二章プロットが完成しましたので、これより二章の開幕です。
どうぞお楽しみください。

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」（1）

そこは暗い洞窟の中だった。
洞窟は狭く、光が入ってくるような穴もない。唯一の明かりは、天井を支える柱に取り付けられたランプ状の灯りだけ。
そんな暗闇と僅かな光の中で、動く影があった。
影の正体は少年だ。歳は一四歳ぐらい。服装は黒の上着の下に白のシャツ、そして黒いズボン。
青い瞳は虚空何もない空間を見つめ、そこに彼、風野刀弥は刀を振る。
振り下ろし、振り上げ、水平斬り、そして突き。様々な剣戟を虚空を相手に繰り出していく。その度に空を斬る音が洞窟内に響き渡る。
そんな動きを見せていた刀弥だったが、時間の経過と共にその動きに変化が見られてくる。
それまで腕の力だけで振っていたように見えた斬撃が、次第に体全体を使った斬撃へと変わっていったのだ。
体を捻っての回転斬り。その勢いを利用した溜めから繰り出される突き。身を前へと倒しながらの振り下ろし。逆に上へと飛び上がりながら振り上げ。そういった攻撃を、存在せぬ相手に幾度となく刻んでいく。
そうして一通りの攻撃を出し終えると、彼は刀をピタリと止めた。
風が通り抜け、刀弥の頬と刀を撫でて過ぎ去っていく。
深呼吸と共に刀を鞘に収めると、刀弥は近くに置いておいた水筒を手に取り、それを口に含んだ。ひんやりとした水の冷たさが、喉を通り抜けていく。
そのまま彼は水を飲み続けていたが、やがて口を離し蓋を閉めると腕時計を確認する。
そして予定の時間が過ぎていることを確かめると、刀弥はある方向

へと振り返った。

そこには一人の少女が、壁にもたれて眠っていた。

年齢は刀弥と同じくらいだろう。鮮やかな赤銅色の腰まで伸びた髪が印象的で、その顔立ちも端正だった。

衣服は赤い上着と白い服、そして赤を基調としたチェックのスカート。

そしてもう一つ印象的なのは、彼女の両腕に抱かれた碧の宝石のついた金色の杖だ。少女の肩ぐらいの長さを持つそれは、少女の呼吸と共に上へ下へと僅かに揺れている。

そんな彼女、リア・リンスレットのもとへ刀弥は歩み寄る。理由は簡単、彼女を起こすためだ。

けれども、起こそうとして、ふと彼は彼女の顔を覗き込んでしまう。

安らかに寝ているが故に浮かべられる、無防備な寝顔。元々、綺麗な容貌だけについ引き寄せられてしまう魅力がそこにはあった。

だが、刀弥はその魅力を何とか自力で振り払った。首を左右に大きく振って誘惑を断ち切ると、リアを起こすべくその肩を強く揺するのであった。

「リア。リア」

「……ん……」

何度か呼びかけていると、程なくしてリアが目を覚ます。

まだ、完全に覚醒していないのかうつろな瞳が辺りを彷徨うが、徐々にその焦点は刀弥へと固定されていった。

「……あ、刀弥。おはよう」

「おはよう、リア。それじゃあ、朝食にするか」

そうして二人は朝の挨拶を交わすと、朝食の用意を始めるのだった。

魔具であるスペーサーから食器や調理器具を出すと、二人は調理

に取り掛かる。こちらの素材や調理法を知らない刀弥は、基本的にリアの調理を手伝う形だ。

もっとも調理と言っても実際に料理をするわけではなく、既に加工済みの食べ物を温め直したりして食べられる状態にするだけの話なのだが。刀弥の世界でいうチルド食品のようなものだ。手軽ということで、旅人たちに好まれているらしい。

そうこうしているうちに、朝食が出来上がった。

今日の朝食は、細かく刻んだ肉と穀物をスパイスで絡めたもののようだ。

口に運んでみると、スパイスの辛さと肉の柔らかさ、そして穀物の味が丁度良いバランスで味を出しており美味しい。

自然と食べることに夢中になる。

そんな中で、リアがふと呟く。

「ファルスを出て五日か」

その言葉に、食べ物を飲み込んだ刀弥が反応する。

「そうだな」

二人は現在リアフォーネという世界に向かうため、ここファルセンという世界にやってきていた。

ちょっとした予定外の事態でファルスという町で二日程過ごしてしまったが、それ以降は特にトラブルもなく概ね順調に歩みを進めている。

町も既に二つほど通過し、野宿もこれで三回目だ。

見張りは前日しっかり寝れていたこともあって、特に問題もなくこなせていた。今日は後半の見張りで、見張りがてら剣の稽古までしていたくらいだ。

「しかし、五日も経つと、さすがにこの狭くて暗い光景にも飽きてくるな」

そんなことを言いながら、刀弥は周囲を見渡す。

岩の天井と壁と地面。元は坑道だったのを拡張したものだ。

最初こそ全く違う生活様式のために物珍しかったが、さすがに日

が経つと珍しさが消えて、ただの狭苦しい道にしか見えなくなった。
「まあ、旅なんてそんなものだよ」
「だから、新しい刺激を求めてどんどんいろんなところに向かうってことか？」
それに対して、リアは苦笑を返すだけだった。
「旅に飽きちゃった？」
「それとこれとは話が別だ」
その質問に首を横に振る。
「今の光景は見飽きたけど、だからって旅に飽きたとは思ってない。まだ二つ目の世界しか見てないしな」
「そうだね」
それに同意して、リアは食事を口に運ぶ。
「リアフォーネという世界も期待していいのか？」
「うん。たぶん刀弥なら喜ぶと思うよ」
その返答は自信に満ちている。そこまで断言するとなると、期待してもいいのかもしれない。
「なら、期待して待つとするか」
「どうぞ、どうぞ。私は、刀弥が目を見開くのを楽しみにしているから」
そんな会話をしていると、自然と両者に笑みが零れ始める。
そんな笑い声の中、刀弥は今の生活をとても楽しいと感じていた。
この世界に来てある程度、日数が経ち刀弥もこちらの生活にも慣れてきた。むしろ、やっていけると自信がついているくらいだ。
ファルスを出てからの道中、ときどきモンスターたちが姿を現しては二人に襲いかかってきているが、それもリアの魔術と刀弥の剣術で見事に撃退していってる。
無論、上には上がいるだろう。ファルスでのロックスネークなどがいい例だ。そのため、気は抜けない。しかし、自分の剣術が通じないのではという不安は消えていた。
――大丈夫だ。俺の剣はこの世界でやっていける。

このとき、刀弥は心の中でそう思っていた。

その後、二人は朝食を終え、後片付けを済ませるとすぐさま出発した。

二人の行く先には、代わり映えのない洞窟の光景が続いている。

ときたま、地図などを見て自分たちの現在位置を確認しているので道に迷っているという可能性は低い。しかし、この光景を見ていると本当に終わりが来るのだろうかという不安が脳裏をよぎる。

洞窟に迷いこむ物語を読んでことがあるが、彼らもそんな気持ちだったのだろうかとそんなことを刀弥は考えてしまう。

リアのほうを見てみると、彼女はただ淡々と足を進めている。

これが慣れた者の姿なのかと、そんな感想を抱きながら刀弥は彼女の後に付いて行く。

「そういえばさ。刀弥って何人家族だったの？」

そんなとき、リアがいきなりそんな話題を振ってくる。

「何だいきなり？」

突然、話が振られたことに驚いた刀弥は、答えを返すよりも先に疑問を返してしまった。

「あ、いや、その……歩いてばかりで暇だったから」

「……なるほどな」

どうやら、ただ淡々と歩くことに飽きたらしい。ただそれは刀弥も同じだったので、丁度良かったと言える。彼女の話に付き合うことにする。

「俺のところは父さんと母さん、そして妹の四人家族だな」

「そうなんだ。妹さんはどんな人なの？」

「名前は紋乃。性格は基本的に真面目だけど、ときたまお茶目なことをやらかすところがあるな。俺と同じように風野流の剣術を学んでいたけど、技に頼る癖があったな」

そんな話をしながら刀弥は少し目を閉じ、最近のことを思い浮かべる。

剣道場での試合、素振りに熱中していたところを後ろから襲ったこと、一緒に買い物に出掛けたこと。

あのときは、まさか今生の別れになるとは刀弥も思っていなかった。今更ながら、刀弥は一日一日の大切さを痛感するのだった。

――あいつ。ちゃんと訓練しているんだろうか？

ふと、そんな心配が脳裏に浮かぶ。

父親と母親に関しては大丈夫だろう。父親は見た目通りそうそう揺らぐことはないし、母親もああ見えて結構しっかりしている。

ただ、紋乃は明るそうに見えて繊細なところがある。あそこで別れなければと、悔やんでいるとしたら尚更だ。

「……刀弥？」

話の途中で考え込んだせいだろう。物思いにふける彼を不審に思い、リアが呼びかけてくる。

「……悪い。ちょっと家族のことを考えてた」

「……家族のこと心配？」

その問いに刀弥は少しの間、悩むそぶりを見せたが、しばらくして首肯を返す。

「そうだな。いきなりこっちの世界に来たから、きっと向こうは大騒ぎだろうしな。紋乃とは直前まで一緒にいたから、自分のことを責めてないかっていう心配もある。まあ、気にしたって仕方ないんだけどな」

肩をすくめる刀弥。

それを聞いて、リアが済まなさそうな表情になる。

「……ごめん。私が家族の話なんてしたから」

「気にするな。それよりリアの家族はどうなんだ？」

暗くならないよう、できるだけ明るく努めて刀弥は尋ねる。

こちらの意図を察したのだろう。リアもまた、それに応えるように明るい声で彼の問いに答えようとする。

「私のところはお婆様にお父様、お母様、お姉さまにお兄様。それと弟と妹で八人家族だね」
「結構多いんだな」
刀弥の感覚からすれば、八人というのは大家族といえる。
「そうかな？　あ、後はメイドたちも私にとっては家族かな」
「……確かリアの家って魔術師の家系だって言ってたな？　実は結構有名な家系なのか？」
スラリとリアの口から出てきた単語に、刀弥は思わずそんな問い掛けを投げてしまう。
「え、えーと……実を言えば……御免」
「いや、別に責めてる訳じゃないんだが」
謝るリアを刀弥はそう言って励ます。
「でも、何か今まで隠していたみたいで……」
「別にリアの家が有名なところだろうが、俺は構わないさ。むしろ、俺の態度がリアに失礼にならないか心配だ」
そんな彼女に刀弥は軽口を返す。
すると、それを聞いてリアの顔がほころぶ。どうやら上手くいったようだ。
「なら、今まで通りでお願い。私もそのほうが気楽だし……」
「わかった。じゃあ、これまで通りで……」
刀弥がそう言うと、その途端、リアは安堵の表情を浮かべる。
恐らく無意識なのだろう。だが、それだけ気にしていたということでもある。
その事実を目にして、思わず刀弥は微笑してしまう。
「……ちょっとぉ、刀弥、何で笑うの？」
自分の顔を見て笑う刀弥を見て、リアがむっとする。
「いや、何でもない」
そう言って刀弥は歩みの速度を上げると、リアの前に出てしまう。
「ちょっと～、それって何かあるって言ってるようなものだよ。一体何で笑ったの？」

そんな刀弥を追いかけるように、リアもまた歩を速める。
「いや、本当に何もないから……」
「嘘つき～。目が笑ってるよ！！」
刀弥の背後で、リアの叫びが響く。
それが可笑しくて、刀弥は再び笑ってしまった。
「……楽しいな」
「え？」
一通り笑い終えた後、刀弥がそんな感想をポツリと漏らす。
「楽しいなって言ったんだ。こんな風に話したり、笑ったりしてるのが……」
「……そうだね」
「ファルスを出るとき、リアが言っていたことの意味が少しわかった」

『私？　楽しいよ。一人より誰かと一緒のほうがいろんなことを言い合えるしね』

それが彼女の告げた内容だった。
一人だけでは、思いや感想を己の内だけで完結してしまう。しかし、誰かと一緒にいるなら、互いの思いや感想を交換し共有することができる。
それは新しい発見を生み、同時に新たな喜びも与えることになる。結果、一人のとき以上の喜びや楽しさをもたらすことになるということだ。
「確かに一人じゃ、こんな風に楽しむことなんて出来ないだろうな」
「うん。だから、私も刀弥と一緒に旅ができて良かったと思ってるよ」
ニッコリと笑みを見せる彼女を見て、刀弥の頬も自然と緩む。
「ほら、行こ」
先を急かして追い抜くリア。刀弥は、それを早歩きで追いかける

のであった。

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」（1）（後書き）

０８／１７
文章表現修正。

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」（2）

しばらく二人で洞窟の中を進んでいるときだった。

「音？」

刀弥の言葉通り、二人の向かう先から音が聞こえてきたのだ。

何かが撃たれる音、ぶつかる音、咆哮、爆発、それの音が混じり合い二人のところまで響いてくる。まず間違いなく戦闘音だ。

そのことを確信した二人は互いに顔を見合わせると頷きあい、急ぎ音のほうへと駆けていくのであった。

そして、二人はその現場へと辿り着く。

そこは二人が通ってきた洞窟よりも、少しだけ広い空間だった。

天井は岩ではなく金属製の人工物、そしてその天井を支える柱もまた同じく金属製の人工物だった。おかげで落石の心配がない。

恐らくここは、崩落の際の緊急避難所も兼ねた休憩用の空間だったのだろう。

その証拠に、休憩用の椅子と思わしき瓦礫がいくつも転がっていた。

何故、瓦礫なのか。その答えは簡単だ。モンスターたちが破壊したからだ。

今、刀弥たちの目の前には大勢のモンスターたちの姿がある。彼らは刀弥たちを見ていない。今、彼らが見ているのは二人組の旅人だった。モンスターたちは二人組の旅人を取り囲んで襲っている最中だったのだ。

旅人たちの年齢は、刀弥たちよりも少し上だろうか。一人は桜色のポニーテールの髪をした少女、もう一人は褐色の髪をした少年だ。

二人は多数のモンスターたちを相手に戦っていた。

使っている武器は銃だろうか。少女は左右の両手に銀色を基調とした、少年は両手で赤を基調とした拳銃を握っていた。

少女はそれを踊るように振り回し、近づいてくるモンスターたち

に銃弾の雨を浴びせていく。
放たれるのは透明色の弾丸。大気が揺らぎ、塵が僅かに避けていく。恐らく、風を圧縮して弾として放つ力を持った魔具なのだろう。
透明色の弾丸は、主によって定められた相手に向かって飛翔し彼らの体を貫いていく。
それによって致命傷を受けた相手は、滑るように倒れ動かなくなってしまう。そうやって彼女はモンスターたちを次々と倒していく。
稀に少女の目前まで迫るモンスターもいるが、それらも拳銃の銃身を使った打撃や零距離射撃によって瞬く間に撃退されていく。
よく見ると、背後からの襲撃にもしっかり反応しており、前後左右に死角がないように見えてしまう。
かなりの手練だ。彼女のその動き亜kら刀弥はそう判断する。
一方、少年のほうは両手でしっかりと拳銃を構え、確実に相手を狙い撃っていた。
銃口から飛び出すのは赤く揺らめく弾丸。真っ直ぐ目標に向かって飛んでいくそれは、着弾と同時に爆発。こちらは炎を圧縮した弾丸のようだ。着弾すれば爆発する点はリアのフレームボールに近い。
彼の動きは少女ほど華麗ではないが、それでもしっかりとした動作で確実にモンスターたちを倒していく。
どうやら、状況的には彼女たちが追い詰められているという訳でもないらしい。鮮やかな手並みで戦っていることから、恐らくかなりの場数を踏んできているのが伺える。
とはいえ、刀弥たちもこのまま黙って眺め続けるつもりもない。相手はかなりの数だ。万が一の可能性もありうるだろう。
リアのほうを見ると、彼女も同じ結論だったようだ。
アイコンタクトでそのことを確認すると、迷わず二人はその身を目前の戦場に飛び込ませるのであった。
突然の助けに少年は驚くが、構わず刀弥は戦場を駆け抜ける。
鞘から刀を抜き放ち、近くのモンスターに斬りかかる。

斬られたモンスターは、雄叫びを上げて倒れ伏す。
その鳴き声を聴いて、他のモンスターたちが一斉に鳴き声のほうへと鋭い目を向ける。そうして新たな獲物の存在に気が付くと、彼らは我先にと競うように群がっていくのだった。
刀弥は巧みな位置取りで一斉に襲われるのを避けると、一番手近にいたモンスターに向けて刀を振り下ろす。
体をまるごと斬られ、モンスターが前のめりに倒れる。それを避けて新たなモンスターが刀弥の視界いっぱいに迫ってくる。
対し刀弥は横へと体を少しずらしてモンスターの線上から逃れると、逆に刀の刃だけをその線上に残す。
結果、襲いかかってきたモンスターは自身の速度によって刀に裂かれ、そのまま崩れ落ちていく。
それを確認することなく今度は別のモンスターを水平斬りで仕留める刀弥。そのとき、彼の背後からさらに別のモンスターが現れる。
新たなモンスターは触手を繰り出し、刀弥を捕らえようとしてくる。
身を低くすることで刀弥はそれを躱すと、触手を斬り裂きその勢いのまま一回転。回転の勢いを使って捕らえようとしてきたそのモンスターを斬り倒した。
そこへ、他のところから回りこんできたモンスターたちが一斉に刀弥へと押し寄せてくる。
さすがに、これだけの数を同時に相手をするのは難しい。
故に、そう判断した刀弥は後ろへと飛んで彼らから離れようとする。
そんな彼の後を、モンスターたちが追いかけようとした、そのとき。
刀弥を追いかけようとしたその集団を、炎の砲撃が飲み込んだ。
業火がうねり、灼熱の炎が飲み込んだモンスターたちを跡形もなく焼き尽くしていく。
モンスターたちは鳴き声を上げることすら叶わず、その炎の中へ

と消え去った。
やがて、砲撃が収まると一帯に少しの間、静寂が訪れた。砲撃の撃ちこまれた場所は未だに業火が姿を残しているが、最初の頃と比べるといくらかその規模は弱くなっている。そんな中、砲撃の主が姿を見せた。
炎の砲撃の主はリアだった。使ったのは『フレイムブラスト』という魔術。
刀弥が下がったのは、彼女の砲撃に自身が巻き込まれないようにするためのものだったのだ。
撃ち終えた彼女はすぐさま新たな魔術式を組んでおり、それを丁度今、発動させる。
『アースランス』
地面より大地の槍が多数生み出され、モンスターたちを足元より貫いていく。
何とかアースランスを避けたり、範囲から逃れたモンスターたちはリアへの危険度を高め、彼女へと殺到していく。
けれども、彼らの進行を刀弥が妨害した。
彼は、リアへと向かうモンスターたちの死角から接近しその急所へ次々と刃を入れていったのだ。
リアに気を取られていた彼らは迎え撃つこともできず、そのまま彼の刃に倒されていく。
さらに刀弥によって倒されたモンスターたちの死体が、他のモンスターの進行を遮る障害物となり、モンスターたちは思うように先へと進めなくなっていく。
加えて刀弥自身も死体の障害物を、死角や壁として積極的に利用しているので、状況はますます不利になっていく。
そうして彼らに時間を与えてしまったモンスターたちは、リアの新たな魔術を受けることになってしまった。
『フレイムボール』
生み出されたいくつもの炎の球が、あちこちへと飛んでいく。

大半の火球が何かしらのモンスターにヒット。爆発を起こし彼らを倒していく。

そんな中を刀弥が駆け巡る。

彼は爆発で生まれた死角を利用し、モンスターに近づいていくと首や腹に一閃を見舞っていく。

だがその最中、刀弥の第六感が危険信号を告げてきた。

急ぎ危険を感じるほうへと顔を向けると、そこにはトカゲの姿をしたモンスターが大きく息を吸い込む様子が見えた。その視線はまっすぐ刀弥を見ている。

――まさか、遠距離攻撃か！？

直後、予想通りの攻撃が飛んできた。

トカゲのモンスターが口から火球を吐き出したのだ。

予感に従い体を動かし、火球から逃れる刀弥。

だが、トカゲの攻撃はそれで終わらない。

当たらなかったとみるや、トカゲのモンスターは次々と火球を放ってきたのだ。

刀弥の周りの大地が、火球を受けて爆ぜる。そんな中を刀弥は生きるために避け続ける。

以前、ミミズの姿をしたモンスターが消化液を飛ばしてきたことがある。けれども、あのときの攻撃はそれほど飛距離を持っていなかった。しかし、今回はかなり離れた距離から放たれている。ここまで距離が空いてしまっていては瞬歩でも一気に距離を詰めるのは難しい。

けれども、相手の放つ火球が止む気配はなく、中々近づけるだけの隙を見つけられない。

幸いなのは他のモンスターたちが火球に巻き込まれることを恐れてか、刀弥に近づこうとしない点だ。

そのため、刀弥は火球の対処にだけ集中することができていた。

かといって、このままではジリ貧になるのは確実だ。

――どうする？

そんなことを、思案していたせいだろう。突然、足をとられる。
「!?」
慌てて足元に目をやる。すると、そこにはモンスターの肉片を踏んで滑った自分の足があった。
「しまっ……」
目をトカゲのモンスターのほうに戻してみると、丁度トカゲのモンスターは刀弥に向けて火球を吐き出そうとしているところだった。
足を滑らせた刀弥に、この攻撃を逃れる術はない。
反射的に彼は刀を前に出す。もちろん、この程度の防御でダメージを軽減できるはずもない。だが、それでも僅かでも生き残れる可能性があるならやるべきだと、そんな思考が頭の中にはあった。それが、生きることを諦めなかった者の答えだった。
そしてトカゲのモンスターの火球が吐き出されようとした、その直前。一発の透明色の弾丸が、トカゲのモンスターの頭部を貫いた。
貫かれたトカゲのモンスターは火球を吐き出すことなく倒れ、刀弥は無事難を逃れた。
攻撃が飛んできた方向へと見ると、そこには桜色の髪をした少女の姿があった。
彼女の視線は刀弥のほうを見ていたが、すぐさま近寄ってくる別のモンスターへと視線を変えてしまう。
その戦いを刀弥は少しの間、眺めていたが、自分を喰らおうしているモンスターの姿に気が付いて迷わず彼女から視線を外す。
口を開き飛び掛ってくるそれを後ろへと飛んで逃れると、即座に前へと飛び出しその顔面を縦に斬り裂いた。
他のモンスターに気を配りながら、刀弥はそのついでに少女のほうへ視界を動かす。
少女は、相変わらず踊るような身のこなしでモンスターたちを倒していた。
その動きにつられて、桜色のポニーテールが右へ左へと揺れる。
遠くから攻撃しようとしてくるモンスターたちにもしっかり対応

しており、発見しだいすぐさま撃ち抜いている。
遠距離の攻撃手段を持たない刀弥には、不可能な対応だ。
そんな感想を頭の隅に思いながら彼は身を仰け反る。仰け反った直後、モンスターの爪が刀弥の目の前を通り過ぎたのを確かめると、すかさず襲ってきたモンスターの首を斬り飛ばす。
改めて彼女へと、視線を戻すと彼女は自分の回りだけでなく、もう一人の少年の方もしっかり見ているのがわかる。
少年が対応しきれない状況に陥りかけると、すぐさま援護の射撃を放って度々彼を助けてるのがその証拠だ。
広い視野と巧みな動き、そして攻撃範囲に優れる銃という武器。
それが彼女の強みなのだろう。
「刀弥」
そんな考えにふけって戦っていると丁度そこへ、リアがやってくる。
「ごめん。援護が間に合わなくて」
「気にするな」
さっきの、足をとられたときのことを言っているのだろう。
あれは仕方がない。突発的なことだったのだから。
魔術式を構築する必要のある魔術では、すぐさま助けに入るというのは中々難しいことのはずだ。
「でも……」
「なら、次の町のご飯はリアの奢ってもらうってことで手を打とう」
リアのせいではないと言ったところで、彼女は自分を責めるだろう。
戦いの最中に気持ちを沈めては、状況的にマイナスにしかならない。
ならば、あえて形だけの罰を与えることで彼女の罪悪感を取り払うのが正解のはずだ。
事実、彼女はそれを聞いて少しだけ表情を晴れやかにする。
「うん。刀弥がそれでいいなら」

「ああ」
そうして二人は辺りを見渡した。
いつの間になら、モンスターたちが二人を取り囲んでいる。
「一気に行くぞ。俺が壁になる」
「わかった」
その了承と同時に、リアが魔術式の構築に入る。今度のはかなり長い。
嫌な予感を感じたのか、モンスターたちがリアに襲いかかろうと一斉に群がってくる。
そんな彼らの前に、刀弥が立ち塞がるのであった。

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」（2）（後書き）

０８／０２
頭上を頭部へと修正。
一部表現の修正。
０８／１７
文章表現の修正

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」（3）

「ようやく終わったな」
「全く……数多すぎだろ。何でこんなにいるんだ」
刀弥の呟きに応答するように褐色の髪をした少年が、そんな愚痴をこぼす。
戦闘が終わったこともあってよく見てみると、彼は黒いシャツと深緑色の上着とズボンという服装をしていた。
「まあ、確かにかなりの数だったな」
周辺を見渡して、刀弥は彼の言葉に同調する。そこにはいくつものモンスターの死体が転がっていた。全て彼らが倒したモンスターたちだ。
「……ってそうだ。ありがとう。本当、助かった」
そこで刀弥たちが助けてくれたことに思い至ったのか、少年が実色の瞳を刀弥たちに向けお礼を述べてきた。
「割と余裕そうな気はしたんだけどな」
その言葉と共に刀弥は、もう一人の少女のほうへと顔を向ける。
「ああ、シェナは別格だから……」
少女はシェナと言うらしい。彼女は新橋色のミニスカートと白の半袖シャツと青色の薄地の上着という動きやすそうな服装をしていた。拳銃は左右の腰にあるホルスターに収まっている。
シェナと呼ばれた少女は戦いが終わってすぐに少年の傍まで歩み寄ると、そこから先はずっと黙ったままだった。
撫子色の瞳は刀弥たちに向けられているが、視線を感じることはない。まるでここではない別のどこかを見ているかのようだ。
「俺は風野刀弥」
「私はリア・リンスレット。よろしくお願いします」
「アレン・ギリアス。彼女はシェナ・リンブルト。まあ、ちょっと変わってるけど悪い奴じゃないんで気を悪くしないでくれ」

刀弥とリアが名乗ると、少年アレンがそう名乗り返してくる。しかし、シェナという少女は自分の名前を告げるどころか今だ一言も発するそぶりも見せない。

「えっと……とりあえずさっきの戦闘では助かった。おかげで命拾いをした」

ともかく、先程助けてくれたことへのお礼を言ってみるが、やはり反応なし。

さすがにどうしたものかと、彼女を熟知しているはずの人物に助けを求める。

「……シェナ」

「何？」

刀弥の視線を受けて、アレンが溜息と共に彼女の名前を呼ぶとそれまで黙っていた彼女がすぐさま反応を返した。

「前にも言っただろ？　呼ばれたなら知らない人でも反応ぐらいはしろって」

「アレン、前と違うことを言ってる」

「あれは、怪しい勧誘だっただろう！？　ああいうのは無視していいけど今回のは駄目なんだよ！！」

「……わがまま」

その一言に、アレンは『あー』という呟きと共に天井を仰ぐ。それを見て、刀弥は思わず同情の念が湧いてしまった。今のやり取りで彼女がどのような人間か大体見当がついたのだ。

「……大変だな」

「……全くだよ」

もはや否定する気もないらしい。がっくりとうな垂れるアレン。

「シェナ。挨拶しろ」

「シェナ。よろしく」

アレンに言われ、シェナは抑揚のない声で挨拶をしてくる。

刀弥たち存在なんてどうでもいいという態度に思わず内心苦笑しつつも、ともかく刀弥たちも返事をする。

「よろしく」
「よろしくね」
「悪い。本当に……」
申し訳なさそうな顔で、アレンが謝罪してくる。恐らく、何度も繰り返されてるのだろう。どこか手慣れている感がある。
「私たちは気にしてないから。ね、刀弥」
「ああ」
むしろ、刀弥はアレンに対して哀れみの気持ちすら湧いていた。
「アレン。がんばって」
そんなアレンを、その原因が肩に手を置いて励ます。
――原因が言っても、励ましにならないだろうに……
そんな刀弥の思いをアレンも持っていたようだ。手が置かれた肩が徐々に大きく震えだしていく。
「……お・ま・え・が・い・う・な！！」
どうやら怒りが頂点に達したようだ。刀弥たちがいるにも関わらず、アレンの怒気を含んだ大声が洞窟中に反響した。

「そういえば、アレンさんたちの目的地はどこなんですか？」
アレンの怒りのボルテージが下がったのを見計らって、すかさずリアがそんなことを訊ねる。
「イメース。氷の像の祭りがあるって聞いて……」
けれど、それに答えたのは意外にもシェナだった。どうやら目的地は、彼女の希望っだったらしい。
「リア、イメースってどこにあるんだ？」
「確か……ラーマスの先だったかな」
思い出す仕草をしながら、リアが応じる。
前に地図を見せてもらったとき、確かファルスからラーマスまでの道は一本しかなかったと記憶している。シェナたちの目的地がラ

ーマスの先ということは、ラーマスまでは同じ道を行くことになる。
「ラーマスが目的地？　てことはリアフォーネに行くんだ」
「はい。そうだ。折角ですし、良かったらラーマスまでご一緒しませんか？」
リアの提案に、アレンはシェナのほうへと顔を向ける。
「どうする？　シェナ」
「アレンに任せる」
どうでも良さそうな声で、シェナが返事をする。ただ、その表情は若干膨れているように刀弥には見えた。
「それじゃあ、せっかくだから一緒に行こうか。よろしく」
「はい。よろしくお願いします」
「よろしく」
「……よろしく」
そうして四人は挨拶を交わす。シェナの声がやや不機嫌なのは、刀弥の気のせいだろうか。
「とりあえず、先へ進むか。いつまでもこんな所に居たいとも思わないしな」
「……それは言えてる」
周囲のモンスターの死体を見て、アレンが頷く。普通に考えて、こんな場所に長い間居たいと思う人などまずいないだろう。
「まあね」
リアも同意し、ともかくこの場所から離れようということになり四人はその場を急いで去っていくのであった。

「ところで、どうしてあれだけのモンスターの数と戦うことになったんだ？」
先へと歩みを進めている途中、刀弥はふと気になっていたことを訊いてみることにした。

あれだけの数のモンスターと戦うことなんて、滅多なことではないはずだ。実際、これまで刀弥たちもモンスターと何度か戦ってるが、一度にあれだけの数のモンスターと戦ったという記憶はない。

もしも原因がわかってるのなら、一応、回避方法を知りたいと思ったのだ。

「さっきのところで休んでたら、壁が崩落してね。そこからぞろぞろと……どうやらモンスターが掘ってた道と繋がったみたいで……」

「ああ、なるほど」

それなら避けようがない。

けれども、アレンのその発言からふと気になることを思い出す。

「だけど、それならその穴。塞いだほうがよかったんじゃないのか？」

少なくても、先程の戦闘で穴を埋めた記憶はない。ならば、穴は空いたままのはずだ。放っておけば、またそこから別のモンスターが出てくるかもしれない。そうなれば、ここを通る人たちや町の人たちに被害が及ぶ可能性もある

しかし、刀弥の懸念に何かを思い出したのか、アレンが疲れた顔を浮かべてこう返してきた

「……それなら二人が来る前に爆破して塞いだ。あのままだったらどんどん来るんじゃないかと思って……」

「……大変だったみたいだな」

アレンの表情から、事情を察した刀弥がそう声を掛ける。

「ああ、あのモンスターの群れを突破して、その繋がった通路に爆破用の魔具を仕掛けないといけなかったからな。通路からモンスターが現れないか冷々したよ」

「そんな物。いつも持ち歩いているのか？」

彼が言っているのは爆破用の魔具だ。普通に考えたら、そうそう必要になる状況などなく持ち歩く必要などのない代物のはずだ。

しかし、その理由はすぐに判明した。

「まあ、研究用に自分で作ってる物をな……」

特に自慢する様子でもなく、アレンは淡々とそう告げる。
けれど、彼のその告白に刀弥とリアは目を丸くする。
「魔具を作れるのか？」
「すごいじゃない」
そう言って、二人とも感心の目でアレンを見つめる。
その視線に対して、アレンは両手を上げて謙遜の言葉を返す。
「そんな凄いわけじゃない。個人の趣味レベルだし、とても自慢できるほど……」
「私たちが使ってる銃もアレンが作ったの。他にもいろいろあるわ。例えば……」
ところが、そんな彼の言葉に被せるようにシェナが代わりにアレンの作った物を説明しようと口を開く。
これにはアレンも驚き、慌てて彼女に駆け寄ってその口を塞ごうとする。
「シェナ。お願いだから余計なこと喋らないでくれ」
「何で？　二人ともアレンのことを褒めてる。私は事実を言ってるだけ。何を困ることがあるの？」
不思議そうな顔でシェナは首を傾げる。
「それは……」
返答に窮するアレン。
そこにリアが助け舟を出す。もっとも、それが助け舟と呼べるのかは刀弥にしてみれば怪しいところであったが……
「アレンさんは、シェナさんに自慢されるのが恥ずかしいって言ってるんだと思いますよ」
「……そうなの？」
視線をリアからアレンに戻し、シェナが訊く。
何とも言えない顔で、アレンはシェナから目を逸らす。その反応が、リアの言う通りだということを証明していた。
「リア」
「えっと……ごめんなさい。アレンさん」

刀弥が相棒の名前を呼ぶと、さすがに知り合ったばかりの相手にやり過ぎたと自覚していたようですぐにリアがアレンに謝った。
「その……やりすぎちゃったみたいで……」
「えっと、まぁ……」
アレンも返す言葉が思いつかず、曖昧に答えるだけだ。
「まあ、それにしても個人レベルとはいえ、魔具を作れるのは凄いと思うけど……」
アレンを助ける意味もあって、刀弥は先程の話題をもう一度掘り起こす。
「そんなことないない。俺の世界じゃ割と皆やってるしな……なぁ、シェナ」
「そうね。でも、私が満足できる銃を作ってくれたのは……」
「……わかったから、それ以上はいい」
うんざりした様子でシェナを止めるアレン。
どうもシェナはアレンのことになると、彼を持ち上げようとするところがあるようだ。
「私のところは魔術の発祥の世界ってこともあって、魔術の勉強とかする子が多かったな」
アレンの話を聞いて触発されたのか、リアが自分の世界の様子を思い出すように話し始める。
「魔術の発祥……ってことはマグルカ？」
「やっぱり、わかっちゃいますか」
「そりゃあ、有名だし……」
どうやらリアの世界は、かなり有名な世界な様だ。
その後もアレンとリアは、随分と楽しそうに話をしていた。それぞれの世界の特徴や歴史で二人は盛り上がっている。
その辺のことを知らない刀弥は、ただその様子を眺めることしかできない。
とはいえ、つまらないということはない。知らないことを知るのは好きだし、今回は世界の話ということで興味を惹かれる話題でも

ある。特に世界の特徴や大まかな歴史は思いの外おもしろかった。
そんな話に耳を傾けながら何気なくシェナのほうを覗いてみると、彼女はどこか面白くなさそうな面持ちでアレンとリアの会話を見つめていた。
やがて、我慢の限界に達したのかシェナはアレンに近づくと、彼の袖を引いて彼の気を自分に向けようとする。
「どうしたんだ？」
袖を引かれたアレンは、話を中断してシェナのほうへと振り向く。
「……別に何もないわ」
ご機嫌斜めであることを隠そうとせず、ツンケンな態度で彼女はそう言う。しかし、その返事にアレンは少しイラッとしたようだ。
「だったら、何で呼んだんだ？」
「なんとなく、そうしたかったから……」
顔をしかめたアレンの詰問に、彼女はそう返答する。そのせいで、ますますアレンが苛立っていく。
「お前なぁ……」
「まあ、落ち着け」
「そうそう」
声を荒げるアレンを止めるために、刀弥とリアが二人の間に割って出る。
「私は気にしてませんから……」
「だけどなぁ……」
横目でシェナを睨むアレン。睨まれたシェナは眉を吊り上げながら知らん顔をする。
そのやり取りに、リアは苦笑するしかなかった。

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」（3）（後書き）

08／17
文章表現の修正

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」（4）

「……そろそろ野営の準備をするか」

と、ここで歩みを進めながら腕時計を見ていた刀弥が、そんな提案をする。

四人がいるのは洞窟内のため、町のように天井の光量で時間の流れを把握することができない。そのため、腕時計で時間を確認しなければならない。

ただ、刀弥の腕時計は基準時間の時間だ。そのため、その時間経過から今が夜なのかを判断する必要があるのが難点だった。

ちなみにリアの腕時計は、基準時間と設定した時間の両方がわかるタイプだ。ただし、刀弥のと違って日付までは知ることはできない。

「刀弥の時計は、基準時間しかわからないのか」

刀弥の腕時計を見て、アレンがそんな感想を漏らした。

「ああ、小さな町で買った奴だったしな。何せいきなりこっちの世界に来たから……」

それほど日が経っていないはずなのに、リアと出会ったのが随分昔のことように感じられる。

それほど、濃密な日々を過ごしているのだろうなと刀弥は感慨に浸るのだった。

「こっちの世界？」

彼の漏らした言葉に、アレンが反応する。

「……ああ、言ってなかったな。俺は渡人なんだ」

そうして刀弥は、自分の身の上を二人に話した。その説明にアレンもシェナも驚愕の顔を浮かべる。

「なんて言えばいいのか……」

話を聞いたアレンは、困惑した表情を浮かべて言葉を濁す。

「まあ、来てしまった以上はいろいろ楽しみながら生きるさ。とり

あえず今は野営の準備だ」
そう刀弥が言ったことで皆、野営の支度を始めていく。
まずは夕食の準備のために食器や調理器具、食べ物。加えて、暖と明かりのための魔具も取り出し、起動させる。
食べ物を調理して、食べられる状態にすると四人はそれを食べ始めた。
その夕食の最中、意外にもシェナが刀弥に話しかけてくる。
「ねぇ」
「何だ？」
「刀弥の世界ってどんなところ？」
どうやら刀弥が渡人だと知って彼の世界に興味を持ったようだ。
気のせいか彼女の瞳が一際輝いているように見える。
やはり未知の場所というのは皆、興味をもつものらしい。その気持ちは、刀弥もわかるだけに特に何も言わない。
ともかく彼女に請われるまま、刀弥は自分の世界について話し始めるのだった。
内容は前回、宿屋で話した内容と変わりはない。
けれども、話す相手が違うと興味を持つところが違うということもあって、詳細に話す部分は大きく異なってくる。
シェナの場合、特に食らいついたのは銃火器に関する話だった。
本人が使っていることもあって興味を持っているのだろうかとそんなことを頭の片隅で考えながら、刀弥は自分の知っている範囲で話していく。
ときたま、個人的な推測や感想も混ぜてみたが、意外と彼女に好評だったことに刀弥はほっとする。
「……と、まあ以上だ」
「ありがとう。面白かったわ」
説明を終えると、シェナがそうお礼の言葉を口にする。
この頃には既に四人とも食事を終えており、彼らの回りには食べ終えた食器だけが残っていた。

「満足してくれたなら、こっちとしても話した甲斐がある」
「悪いな。元の世界の話なんかさせて」
その礼に対して刀弥はそう応答を返すと、アレンがそんな風に謝ってきた。
帰れない元の世界を思い出させるようなことをさせてしまって、すまないと思っているのだろう。
「気にするな」
自分の世界への思いを思い出さないと言えば嘘になるが、それを彼らに言う必要はない。
とりあえず刀弥はその思いを払拭する意味もあって、新たな話題として先程から気になっていることについてアレンに聞いてみることにした。
「……ところでそれは何なんだ？」
訝しむ視線の先、そこではアレンが何かの作業をしている最中だった。彼の前には今、ある物が置かれている。
持つためのグリップと銃身があることから銃に類する物であることは一目でわかった。だが、かなり大きい。
銃身は上下二つに割れており、さながらレールのように見える。グリップは上部に取り付けられているようで、仮に持つとしたら逆手でそれ自体を引き上げる感じで持つことになる。
だが、グリップの大きさから考えてもこれは片手持ち。片手でこれだけの大きさの物を持ち上げられるのか。それが刀弥には疑問だった。
「今、製作中の魔具の銃。高出力の雷と風を放出する力を持たせようと思ってるんだけど……」
どうやら、新しい魔具を作っているらしい。
始めて見るその作業に、自然と刀弥の視線が固定される。
銃の近辺には、別の魔具らしき物がいくつか置かれている。どうやら計測器のような役割を持っているようで、彼の傍の何もない空間に様々な情報が浮かび上がって表示されている。

それらに目を通しながら、アレンは銃の内部を弄ったり部品を交換したりなどして制作の作業を続けていた。

魔具はマナを動力として使った装置ではあるが、その構造は多岐に渡っている。

大半は、術式回路と呼ばれる魔術式を回路のように事前に組んだものを組み込むのだが、中にはそれに科学文明の技術を混合させたものもある。

結果、多少の出力調整ができたり、複数の効果の並列化、プロセス化を自動制御にすることで扱いやすさの向上させるなど魔具の利便性を向上させることに繋がっている。

アレンが製作している銃がどういう構造のものかは魔具に関する知識を全く持たない刀弥にはわからない。だが、かなり高度な知識と技術が必要なのは間違いないだろう。

けれど、一つだけ気になることがある。

「だけど、それ。持てるのか？」

大きさから考えても、片手で持つには結構重たいような気がする。こんな物を本当に持てるのか、それが気になったのだ。

だが、刀弥の問いにアレンはこう答える。

「ある程度軽くしているとはいえ、俺じゃあ無理だな」

「じゃあ、それを使うのは……」

自然と刀弥の目がシェナへと向かう。

彼に見つめられたシェナは、何事かとばかりに首を斜めにする。

「そういうこと。こう見えても俺より力はあるからな」

気のせいか、その口調に嘆きの色が混じっているように刀弥には感じられた。

だが、次の言葉にはその色はもう混じっていない。

「まあ、おかげで多少の無茶な魔具でも作れるからな。その辺は感謝しないとな」

「じゃあ、明日は私の大好物の……」

「調子に乗るな」

シェナの頭を軽く殴る。痛くなどないはずだが、それでも彼女は痛がる表情をみせる。
そんな様子を刀弥とリアを笑って見ていた。

そうして四人は就寝の準備に入る。
見張りは四人ということで、二人ずつの交代。最初は刀弥とリアが、後をシェナとアレンが担当することになった。
魔具が照らす明かりの中、刀弥とリアが並んで座っている。明かりの向こう側では、シェナとアレンが寄り添いあうように――シェナから一方的にだが――眠りについていた。
「楽しかったね」
「そうだな」
今日の出来事の感想をリアが呟き、それに刀弥が同意する。
「アレンもシェナもどっちも凄かったな」
「そうだね。アレンさんが魔具作れるってのも凄かったけど、シェナさんも凄かったね。クルクル回りながら撃って相手をほとんど寄せ付けてなかったし」
そのときの様子を目に浮かべたのか、リアの顔はうっとりとしている。
「私たちも、がんばらないとね～」
「……そうだな」
刀弥の返事が微妙に遅かったが、そのことにリアは気が付かないまま話を続ける。
「私の場合、まずは新しい魔術の取得かな？　刀弥は？」
「俺の場合、遠距離の対応だろうな。今日のようなことにならないようにしないとな」
遠距離攻撃を持たない刀弥の場合、考えられる手段といえば相手の攻撃を避けながら近づくということになる。

しかしながら圧倒的な弾幕を相手にした場合、進むどころか回避することすら至難の業だ。

堅実なのは障害物に隠れながら少しずつ進むことだが、ならば障害物がない場所でその状況に陥ったとき、どうするのかと言われると思いつかない。

そもそも刀弥の世界では既に銃が優秀な武器として認知されており、今や剣や刀は基本的に美術品としてしか価値のないのが実情だ。

――それは……剣では銃に勝てないということの証明ではないのか？

一瞬よぎる、そんな思考。思わずそんなことはないと否定しようとするが、それを否定しきれない自分がいることに刀弥は気付く。

「刀弥？　どうしたの？」

様子がおかしい事に気が付いたのだろう。リアが刀弥の顔を覗き込もうと近寄ってくる。

「何でもない。ちょっと、どうやって対抗しようか考えてただけだ」

弱腰な考えを悟られたくなかった刀弥は、とっさにそんな嘘をついてしまった。

「そっか」

どうやら刀弥の嘘をリアは信じたようで、そう言って彼女は元の場所へと戻っていく。

それを見送った後、刀弥は明かりへと目を移し、それからその向こう側へと注視する。

あどけない顔で眠る銃使いの少女を……

一話終了

二章一話「銃使いの少女と付添の少年」（4）（後書き）

これで二章一話が終了です。
次は二話です。
どうぞお楽しみに……
０８／１７
　文章表現の修正

二章二話「不安と信じる答え」（1）

「刀弥！！　後ろ！！」

その叫び声に、刀弥は我に返り慌てて後ろを振り返る。

振り返った視線の先、サソリのようなモンスターが尾を振り下ろしている。回避は間に合わない。

尾はそのまま刀弥の左腕に刺さる、かと思われたその直後、一際大きな音と共に尾が宙を舞う。

助かったことに安堵するよりも先に、刀弥はそのモンスターに接近。その頭部に刃を突き立てる。

モンスターの体が大きく跳ね上がるが、刀弥はそれを力尽くで抑えこむ。

そしてモンスターが動かなくなったのを確認すると、刀弥は刀を引き抜くと同時に背後から迫っていた新たなモンスターに向かって水平切りを放つ。

後ろへと倒れていくモンスターを尻目に、今度は右から襲いかかってきたモンスターの爪の攻撃を刀の刃で弾く。

それから振り上げで相手の胴体を切断すると、膝を曲げて身を低くする。

そうして彼の頭上を大きな猫のようなモンスターが後ろから通り過ぎるのに合わせて、背後に飛んで手近なモンスターを斬りつける。

押し寄せる敵たちを躱しては斬り、弾いては突いてを繰り返す刀弥の姿は、見事としか言いようがない。

そんな最中、刀弥は他がどうなっているかと思い視線を巡らす。

リアは丁度、『アースランス』を発動させ周囲にいたモンスターを一掃しているところだった。

大地の槍群がリアを護るかのように周りに現れ、彼女に仇なすものたちを貫いていく。

大地の槍は矛という役割だけでなく、彼女への進行を阻む盾とし

ての役割も全うしていた。
おかげで、モンスターたちは彼女に近づけない。
一刻、確保した安全。それを利用して、リアは新たな魔術式を構築する。
『ボルトハンマー』
彼女の敵に、雷の鉄槌が振り下ろされた。
膨大な雷のエネルギーによって、範囲内にいたモンスターたちはあっという間に感電死を迎える。
どうやら、リアのほうは大丈夫なようだ。
そのことに安心しつつ、次にアレンのほうを見てみる。
彼は魔具の拳銃を使って、着実にモンスターたちを倒していた。
周りに気を配りつつ、敵としっかり距離をとって銃を撃つ。無茶はをしない堅実な対応だ。
そんな彼のもとに、一体のモンスターが突進してくる。
それに気が付いた彼は素早く拳銃をそのモンスターへと向け、引き金を何度も引く。
いくつもの赤き銃弾が銃口をより飛び出しモンスターに接触した瞬間、爆発を起こしていく。
何十発とダメージを与えたところで、彼に向かって突進しようとしていたモンスターの足が止まり、グラリと横に倒れた。そこにはもはや生気はない。
そんな彼に三体のモンスターが襲い掛かる。さすがに、これは彼では対処しきれない。
それに対してアレンは懐からある物を取り出すと、それを襲ってくるモンスターたちに投げつけた。
その途端、それは大爆発を起こし、襲いかかろうとしていたモンスターたちは爆発の炎に焼かれ焼死する。
アレンが投げつけたのは、彼自身の手によって作られた爆破効果を持った使い捨ての魔具だ。
彼はそれをもう一つ、今度は背後の集団に目掛けて投げる。

大きな音と巨大な炎が、その集団を飲み込むのが刀弥の位置からでも見ることができた。

最後にシェナを見やる。

彼女は相も変わらず、踊るような動きでモンスターたちを倒していた。

雨のように次々と放つ透明な銃弾は、彼女を囲むモンスターたちを次々と撃ち抜いていく。

その猛攻に為す術もなくモンスターたちは倒されていく。あるモンスターを除いて……

そのモンスターは固い皮膚を持っていた。故に彼女の弾丸はそのモンスターを貫くことなく弾かれる。

地響きをたてながらシェナに迫るモンスター。

シェナはただ銃を撃つだけだ。一発、二発、三発、四発……

すると、八発ほど撃ったところでモンスターに変化があった。いきなり膝をついて倒れたのだ。走っていた勢いが残っていたせいで、モンスターは砂煙を巻き上げながら体を滑らせる。

理由はわかる。モンスターの右前足に銃傷がある。それが原因でモンスターはバランスを崩したのだ。

シェナはただ闇雲に撃っていた訳ではない。ひたすらモンスターの右前足を狙い、撃ち続けていたのだ。それも僅かな誤差もなく。

それがどれほどの難しいことなのかは、銃を扱ったことのない刀弥でもわかる。

倒れたモンスターは、動けないまでもまだ生きている。何とか起き上がろうと、もがき続けている様子だ。

そんなモンスターにシェナが近づき、その銃口をその頭部に合わせる。そして、彼女は躊躇うことなくその引き金を三度引いた。

響く音は一発。けれども、それは余りにも早すぎて一発にしか聴こえなかったせいだ。

なんと、彼女は三発の銃弾を一瞬にして連射したのだ。

至近距離で三発も同じ箇所に撃たれれば、さすがに固い皮膚も防

ぎきれなかったようで、頭に弾を撃ちこまれたモンスターはゆっくりと頭を降ろし動かなくなってしまった。

――相変わらず、凄い技量だな。

銃という武器だけでは、こうはいかないだろう。そこに彼女の技量が加わって始めてあれだけの戦果を生み出しているのだ。それはこれまでの戦いを見ていれば、嫌でもわかる。

そんなシェナの戦いを、刀弥は複雑な表情で見ていた。自分の周囲の警戒を怠るほどに……

「刀弥！！」

誰が叫んだのか、わからない。

だが、そんなことを考えている暇は刀弥にはなかった。今、彼の頭は体中に伝わる激痛を堪えるので精一杯だからだ。

突然の痛みと共に、刀弥の身が地面から離れる。一瞬にして視界が移り変わっていく。

次に感じたのは、地面に身をこすったことで生まれる体中の痛み。

やがて、痛みが収まり、己の身が止まっていることに気が付く。

痛む体を叱咤しながら、刀弥はゆっくりと立ち上がった。

刀弥を飛ばしたのは、トカゲの姿をしたモンスターだった。けれど、その姿は以前火球を放っていた奴とは少し違う容姿だ。

一番の差異はその尻尾の大きさだ。全長の半分くらいがその大きな尻尾で占められているのだ。大方、あの尻尾に打たれたのだろうと刀弥は予測をつける。

体を一つ一つ確認していく。右腕が大きく痛むが、それ以外は大したことはない。

大丈夫だと結論を下して、相手に視線を戻す。

相手は尻尾をしならせながら、刀弥に向けて近づいてくる。

刀弥は、それを迎え撃つ形で身構える。

そして両者の距離が体二つ分ほどになったとき、双方が動いた。

トカゲのモンスターは己の体ごと大きく回し、刀弥に向けて尻尾を叩きつけるように振り回してきた。尻尾が長いこともあって、そ

のリーチは刀弥よりも長い。
一方の刀弥は『瞬歩』を使い、一気に己の間合いまで急接近する。
迫りくるモンスターの尻尾。けれど、それが届くよりも刀弥が間合いに入るほうが早かった。
胴を狙った振り下ろし。抵抗する術のない相手はそのまま、胴を断たれる。
切り口から血が漏れ、断たれた体と共に地面へと落ちていく。
新たな敵を探すために、刀弥は辺りを見回す。
けれども、もはやモンスターの姿はどこにもなかった。どうやら、刀弥が倒したのが最後らしい。
「ああー！！　終わった！！」
アレンの歓喜の声が刀弥の耳に届く。
それを聞きながら、刀弥は刀を鞘へと収めていくのであった。
「刀弥！？　大丈夫？」
そんな刀弥のもとへ、リアが心配そうな表情で駆けつける。息を切らせているあたり、かなり急いで来たようだ。
「右腕が痛むが、問題ない。大丈夫だ」
左手で右腕を触りながら、刀弥はそう答えた。
実際、彼の衣服に血が浮き出ているところはない。その事実にリアは安堵する。
だが、すぐさまその顔が疑問に変わる。
「でも、どうしたの？　二回も危ないところがあったし、そもそも今日は動きもあんまり良くなかったよね？」
その途端、刀弥は苦虫を噛み潰したような顔つきになった。
その指摘はは刀弥も十分自覚していた。二度にも渡る余所見と考え事による周囲への不注意。それが危険を招いた原因だ。
「私も同じことを思った。なんて言うか、元気がない」
そこに、シェナがやってくる。その顔は無表情だが、若干心配の声が混ざっているように聞こえるのは気のせいではないだろう。
「まあ、そういうときもあるさ。それよりもさっきはすまない。助

かった」
　何でもないという風に装いながら、話を変えようと先程助けてくれたことへの礼を述べる。
　最初の窮地のことだ。あのとき、シェナが一瞬で複数の銃弾を撃ってサソリのモンスターの尾を切り離したのだ。
「気にしないで。それじゃあ」
　シェナはそれだけ言うと、アレンのほうへと歩いていった。
「凄いよね。シェナさん」
　離れていく彼女の背中を眺めながら、リアがポツリと漏らす。
「そうだな。三発の弾丸をほぼ同時に撃ったり同じ箇所にほとんど誤差もなしに狙い撃つなんて、俺の世界じゃ物語上ぐらいでしかありえないな」
　それだけ、彼女がやったことは人間離れしているということだ。
　刀弥としては、まさに夢かと疑いたくなるほどの技量だ。
「私たちも、彼女くらい強くならないとね」
「何だ。リアは人外を目指してるのか？」
　意外という顔つきを浮かべて、刀弥が冗談を返す。
　その一言に、リアはふくれっ面になる。
「もう、刀弥の意地悪」
「ははは……悪い」
　軽い笑い声を出しながら、刀弥は謝った。
　丁度そのとき、アレンたちが二人のところへ近づいてきた。
「それじゃあ、さっさと行こう。いつまでもここでじっとしているわけにもいかないしな」
「……そうだな」
　また、モンスターの集団と戦うのは刀弥も御免被る。
　そのため、四人は急いでその場から離れていくのであった。

「アレン。私、それよりもこっちが食べたい」
「だ・か・ら！！　駄目だって言ってるだろ！！　これ高いんだぞ！？」
その日の夕食。アレンの怒号が洞窟内に反響する。
そんなやり取りを横目に、刀弥とリアは自分たちの夕食の準備に取り掛かっていた。
アレンの怒号の理由は、シェナの我侭だ。どうやらシェナの大好物はかなり高価なものらしい。
そのせいか、アレンは中々それを使おうとしない。シェナにはそれが不満なようだ。
毎日、懲りもせず『食べたい』とせがんでいるのだ。
「今日はどうなるかな？」
「一昨日はアレンが根負け。昨日はシェナが諦めた。微妙なところだな」
刀弥が言っているのは、これまでの戦績だ。
アレンたちと出会ってから三日が経過していた。それだけあれば大体、彼らがどんな人間なのかわかってくる。
シェナは戦いこそ凄まじいが、それ以外はからっきし駄目だった。むしろ、戦い以外に興味がないと言い換えてもいいかもしれない。それほど酷かった。
アレンが皿を並べろと言えば、何故か鍋を並べる。彼女曰く、皿も鍋も食べ物を入れるものだと言うことだ。
他にはアレンから聴いた話だが、この歳で一人で着替えることもできないらしい。
しかし、そうなるとアレンが着替えさせることになるわけで……それを聞いたとき、リアが非難するような視線を向け、慌ててアレンが弁解するという珍しい事態になった。
その点以外にも、基本的に彼女は何でもかんでもアレンに頼る癖があるようだ。それを彼への甘えと見るか、堕落と見るか、は人次第だろう。

そんなことをしているうちに、夕食が出来上がった。アレンたちのほうを見てみると、どうやら今日はアレンの勝利で決着がついたようだ。アレンが調理した夕食を盛っている傍ら、シェナがどこか不満そうにそれを見ている。

そして準備が整うと、四人は夕食を食べ始めた。

刀弥とリアは豆と芋のスープだった。

スプーンですくって、それを口に運ぶ。

スープの甘さが口に広がり、まるでスープの暖かさが体中に伝わってくるようだった。一口で食べられる芋と豆の大きさも丁度良く、食べやすい。

一方、アレンたちの夕食は、小魚の盛り合わせとパンだった。

黙々とそれを食べるアレンと、未だに不満顔のシェナが随分と対照的だ。

「シェナはまだ怒ってるのか？」

「気にするな。いつものことだ」

刀弥の問いに、アレンは即答する。もはや、彼女を相手にするつもりもないようだ。

ある意味、それが正しい対処かもしれないなと刀弥は思う。

全部の我侭に付き合ってたら、彼も身がもたないだろう。きっと、旅の最中もこんな感じのことを何度も繰り返してきたのだろう。

やがて、食事が終わると刀弥とリアは就寝に入る。今日の見張りはシェナとアレンが前半で刀弥とリアが後半になっている。

明日は予定通りなら、町に辿り着く予定だ。食料の買い足しに散策、やることは一杯ある。ならば、早く休んで明日のための体力を確保するべきだろう。

「じゃあ、見張り頼む」

「ああ」

「おやすみ。刀弥、リア」

アレンとシェナの返事を聞きながら刀弥は瞼を閉じると、すぐに眠りの中へと落ちていくのであった。

二章二話「不安と信じる答え」（1）（後書き）

ようやく二章二話の開始です。
主人公の悩みとその答えを上手く表現出来ればなと思っています。
では、また次回で……

０８／１８
文章表現の修正

二章二話「不安と信じる答え」（2）

翌日の朝……

いつものように、刀弥は剣術の修行をしていた。

傍には、一緒に見張りの番をしているリアが座り込んで彼の修行風景を見学している。

本日は素振り。風を斬る音が、何度も洞窟内に響き渡る。

反響するその音を耳にしながら、刀弥はただ一心不乱に刀を振り続けていた。まるで己の内にある不安を振り払うかのように……

己の剣術が銃に敵わないのではないか。

そんな不安が、刀弥の中で日々大きくなっていた。

先日の戦闘で、動きが鈍ったり注意が散漫になっていたのもそれが原因だ。

刀弥の世界では銃の誕生と発展と共に剣はその存在意義を失い、徐々にその姿を消していった。

それ故に、彼の中には剣が銃に劣っているのではという考えが密かにあった。

何度も否定しようとしたが、否定しても時間が経てばまた浮かび上がってくる。まるで切ればまた生えてくる植物のように……

そして、シェナたちと出会ったことでその不安が一気に膨れ現在の状態になったのだ。

特に高い技術を持つシェナは、刀弥にとっては決して超えられない壁のように見えていた。

そんな精神状態では、彼の意識が体を動かすことに集中することなどできるはずもない。当然のように体の動きは悪くなる。それは今の素振りも同様だ。

体が重く感じる、息がすぐに上がる、何より集中を維持できない。

いつも通りに振っているだけのはずなのに、進歩どころか後退しているように感じてしまう。

その事実に内心焦りどうにかしようと力を入れるが、それがさらに動きを悪くするという悪循環に刀弥は陥ってしまっている。

「刀弥。大丈夫？」

彼の顔色が悪いことに気が付いたリアが、立ち上がり近寄ってくる。その声に刀弥は我に返った。

「あ、ああ……」

そう返事をしながら、刀弥は汗を拭う。心なしか、いつもより汗の量が多い。

「……心に不安がある」

そこに突然、刀弥でもリアでもない声が響いた。

声のほうへと振り返ると、そこには寝ているはずのシェナが目を開けて体を起こしているところだった。

「起きていたのか」

「さっき、起きた」

そう告げながら、彼女は起き上がる。

「刀弥に不安があるって言っていたけど……」

「不安が彼の心を縛っている。だから、体も心の影響を受けて動きが悪くなっている。私にはそんな風に見えるわ」

その指摘に刀弥は一瞬、シェナに自分の不安を知られてしまっているのではないかと勘ぐってしまう。

実際そんなはずはない。恐らく、彼女の指摘はこれまでの経験や感からくる推測だろう。彼の心の中のことまで、彼女が知っているはずがない。だが、それでも刀弥は何とも言えない冷たい感覚を全身で感じていた。

「……刀弥」

彼女の言葉を聞いて、リアが刀弥のほうへと顔を向ける。その視線に思わず刀弥は目を逸らしてしまう。

「……それじゃあもうすぐ時間だし、アレンさんを起こして朝食の

準備をしよっか」
彼の態度を見てリアは溜息を一つ吐くと、アレンを起こすために立ち上がろうとした。
「それは私がやる」
しかし、シェナがそう言ってリアよりも先にアレンを起こしに行ってしまう。
「それじゃあ、シェナさんお願いします」
そんな彼女にリアは苦笑しつつ、アレンを任せる。
そんな様子を、刀弥は申し訳なさそうに眺めているだけだった。

アレンを起こし朝食を食べ終わると、四人は先へと進むことにした。
「だけど、何て言うか……こう洞窟の中ばかりだと外の光景を眺めたくなるな」
歩いている最中、アレンがそんなことを言ってくる。
確かに彼の言うとおり、洞窟の壁や天井ばかりを見続けていると、外つまり雪や山々の光景を無性に見たくなってくる。
「次の町までの我慢だ。それも、もう時期だ」
「それは、わかってるんだけどな……」
そう答えながら、アレンは洞窟の先を見据える。
「アレン。町に着いたら……」
「わかった、わかった。何でも好きなもの食べればいい」
町というワードに反応してシェナが何か言おうとするが、内容を察したアレンが先に返事を返してしまう。おかげでシェナは最後まで言えずじまいだ。
それがおかしくて、刀弥もリアもつい笑ってしまった。
「そういえば二人は同郷とは聞いたけど、具体的にはどんな関係なんだ？」

「え？　ああ、幼馴染だ」
刀弥の問いに、アレンがそう返す。
「ってことは……随分と苦労したんだな……」
その様がありありと目に浮かび、つい刀弥はアレンに同情の目を向けてしまう。
「それを、否定できないのが残念だ」
彼の意見に、アレンはうなだれる。
「よしよし」
そんな彼の頭をシェナが撫でるが、どう考えても逆効果にしかならないだろうと刀弥は思った。
「……一緒に旅をしてどれくらい経つんだ？」
「かれこれ、基準時間で二年近くは経つだろうな。二人は？」
「俺は基準時間なら一二日だな」
「私は半年と少しです」
アレンの質問に、刀弥とリアがそれぞれそう返答する。
「そうなんだ。それで？」
「旅をしている間、どんなことがあったのかと思って……」
続いての刀弥の質問に、アレンはしばし考えるそぶりを見せる。
「いろいろあったな……大半は彼女が勝手に首を突っ込んだのが原因で巻き込まれたものばかりだけど……」
目を細めたアレンがシェナのほうを見るが、彼女は視線を合わせようとせず、あさっての方向へ目を向けている。
「まあ、何となくそんな感じの旅になるんじゃないかという予感は、一緒に行くと決めたときからあったからいいんだけどな」
どうやら、とっくの昔にその辺のことは覚悟して――あるいは諦めて――いたらしい。
「なるほど……やっぱり昔からそんな感じだったのか」
最早、刀弥としては苦笑するしかなかった。
「ああ、何て言うか……鋭いのか鈍いのか、俺でもときどきわからなくなることがある」

頭を掻きつつ、アレンが吐息を漏らす。
「シェナは、自分のことをどう思ってるんだ？」
試しに訊いてみることにする。
刀弥の質問にシェナは、少し考えこむ仕草をする。
「……考えたことない」
しかし、結局返ってきた返事はそれだった。
「お前なぁ……一体、さっきの考え込んだ仕草は何だったんだ？考えてたんじゃないのか？」
その返事に、アレンが呆れ返ってしまう。
彼の問いに対して、シェナはこう答える。
「思い出そうとしただけ」
「思い出そうとしても無意味だということは、俺が保証してやる。もしお前が自己評価をしているなら、こんな状態にはなっていないはずだからな」
そのアレンの言い分に、思わず刀弥もリアも納得してしまう。
「……確かに」
「……あはは」
「……アレン。酷い」
シェナはアレンの言い分にいじけてしまうが、さすがにそこは慣れた者。アレンは怯む様子を見せない。
「酷いのはお前だ！！　毎回、毎回……お前は勝手に首を突っ込んではトラブルを起こして……お前の尻拭いをいっつも俺がしてるんだぞ！！」
悲痛な叫びが、洞窟内に広がっていく。
その叫びに、シェナも目を丸くして驚いてしまう。
「……ごめん」
さすがに少し反省したのか、彼女は目を伏せて謝ってくる。
それでアレンも少しは溜飲を下げたようだ。
「まあ、それでいいか。それで許してやる。ほら、行くぞ」
大きく息を吐いてシェナを許すことにした。

その途端、それまで目を伏せていたシェナはパッと顔を明るくすると、跳び込むようにアレンに抱きついた。
「アレン。大好き！！」
「お、おま！？　な、何を突然、い、言ってるんだ。ほ、他の人がい、いるんだぞ！？　ってか、離れろ！！」
突然のシェナの告白にアレンは仰天し、顔を赤くしながらも何とか彼女を振りほどこうともがくが、彼女のほうが腕力が強いので振りほどくことができない。
そんな二人を刀弥とリアは、後ろから眺めて互いに笑みを交わし合っていた。
そんなことがあったりしたが彼らは何事もなく歩を進め、町に辿り着いたのは昼を過ぎたあたりだった。

二章二話「不安と信じる答え」（2）（後書き）

08／18

文章表現の修正

二章二話「不安と信じる答え」（3）

この町も基本的の他の町と同様だった。洞窟の中に建てられた街並みに、人口の太陽。ただ少し他の町と違うのはこの町では石炭を利用しているという点だ。

刀弥がそのことに気が付いたのは、トロッコ一杯に積まれたそれを発見したからだ。

「あれは何だ？」

ラーマスで見た鉱石とは違うものだと気が付いた刀弥が、疑問の声をあげる。

その声に、他の三人も刀弥と同じところへ目を向ける。

「ああ、石炭のことか」

「石炭？　こっちにもあるとは聞いてたけど……」

それはシェナに、自分の世界のことを話していたときのことだ。

刀弥の世界のエネルギー事情の説明をしていたときに、その話が出てきた。

それによると、石炭や石油を始め刀弥の世界で採れるいくつかの資源は無限世界でも採れるらしい。

事前に聞いていたこととはいえ、実際に自分の知っているものが目の前にあるというのは何というか感慨深い気分にさせられる。

辺りを見回してみると、それによって動いているであろう乗り物や機械がいくつか視界に入った。大半は蒸気機関で動いているようだ。

刀弥の世界では既に過ぎ去った文明ということもあって、やはり興味が出てくる。

再び歩き出した後も、そういう機械や乗り物の傍を通る度に刀弥の目はついついそちらへと目移りしてしまっていた

そんな風に町を巡っていると、突然シェナがアレンの袖を引っ張ってきた。

「アレン」
「なんだ？」
顔を彼女の方へ向けるアレン。
「あれがほしい」
シェナが指さす先、そこには縫いぐるみを取り扱う露店がたっていた。店には可愛らしいデザインの縫いぐるみが綺麗に並び立てられている。シェナの指はそのうちの一つに向けられていた。
「シェナ？　ふ・ざ・け・る・な！！」
「ふざけてないわ」
笑みのまま、小さな声でアレンが怒鳴るが、シェナはケロリとしたまま彼に応じる。
「俺たちには、いらないものだろうが！！」
「私が、ほしいからいるものよ」
ああ言えばこう言う。そんな二人のやり取りは次第にヒートアップ――主にアレンだけが熱くなって、シェナは平静だが――していき、その騒ぎを聞きつけ人が集まってくる。
さすがにこれ以上目立つのはまずいだろうと思い、刀弥は二人の間に割って入ることにした。
「アレン。人が集まってるから、そろそろ落ち着いたほうがいいぞ」
刀弥の一言にアレンは我に返り、慌てて周りを見る。
「いっそのこと、ジャンケンで決めるってのどうだ？」
「……わかった」
「それでいいわ」
これ以上、説得に手間取っても周囲と刀弥たちに迷惑だろう。
そう判断したのか、刀弥の提案にアレンが素直に頷く。それを見てシェナも同じく了承する。
そうして始まった縫いぐるみを巡る戦いは、思いもつかぬ展開となった。
四十回連続引き分け。その激しい戦いに、周囲の人々さえ固唾を飲んで見守っていたほどだ。

そして四一回目。遂にその戦いにピリオドが打たれた。その結果、シェナが縫いぐるみを手にすることになった。

観客たちは――お店の人も含めて――祝福の拍手を送り、負けたアレンはうなだれる。そんな彼の肩に刀弥はそっと手を置くのであった。

縫いぐるみを抱いてご機嫌なシェナが、先頭を歩いている。時たま、縫いぐるみを顔の傍まで持ち上げては頬ずりしているのか、ポニーテールの後ろ髪が左右に揺れる。どうやらかなり気に入ったようだ。

一方、アレンは諦めがついたのか、溜息を吐きつつも上機嫌な彼女を喜ばしそうに見つめている。

「シェナの奴、縫いぐるみが好きなのか？」

「可愛い物に目がないのほうが正しいな。小さいときもそういう生き物を見つけたら捕まえようとよく追いかけてたし……」

刀弥の問いに、アレンは肩をすくめる。

その姿がありありと想像できたので、刀弥は苦笑するしかない。

と、そこへ。

「あ、御免。ちょっと先行ってて」

今度はリアが、近くにあった露店へと駆け出していった。

何だろうと刀弥が追いかけてみると、そこは絵を売っている露店だった。リアの目はその中のある絵に集中している。

それは黄色い花が一杯に咲き乱れている絵だった。空は青々と澄んでおり、雲一つない。遠くの方には灰色の尖った山々がそびえ立っている。

刀弥から見ても、それは見惚れる光景だった。

「これください」

リアは迷わずその絵を購入。受け取ったそれをスペーサーの中に

収めていった。
「絵が好きなのか？」
「むしろ風景が好きって言ったほうがいいかな。絵以外にもオーシャルの中身を写した写真とかでも気に入ったのがあれば買っちゃうし」
アレンたちのところへ戻りつつ、二人はそんな会話をする。
「ってことは、さっきの奴以外にもいろいろ持ってるのか」
視線を、彼女のスペーサーが入っているウエストバッグへと向ける。
「うん。機会があったら見る？」
「ああ」
他の世界に、どんな光景があるのかというのは刀弥としても興味がある。それが綺麗な風景なら尚更だ。迷わず刀弥は首を縦に振る。
そうして二人が、アレンたちに追いついたときだった。
ふと、横のほうへと視線を動かすと、そこには小さな店があった。身長の倍ほどもある大きな棚。その中には埋め尽くされるまで詰め込まれた本がずらりと並んでいた。棚の傍には、上の本をとるための梯子もある。
「本屋か」
その呟きと共に、刀弥はその店のほうへ歩いていく。
「刀弥？」
「悪い。すぐ戻る」
そう断りを入れて中に入ると、彼は手近な本を手にとった。読んでみると内容は誰かの手記のようだ。基準時間と共に手記の主の体験したことが書かれている。
それを閉じて本棚に戻すと、今度はその隣の本を取り出して開いてみる。今度のは冒険記だった。両親を亡くし祖父のもとで剣の修業に明け暮れた少年が、旅をしていろいろなトラブルを解決するという内容のものだ。読んでみると戦闘するシーンも多く刀弥好みの内容だ。

それを刀弥は、購入することにした。
お金を払い店を出ると、店前で三人が待っていた。
「待たせた」
「ううん。そんなに時間経ってないし……」
「俺たちも、いろいろ買ってたしな」
「うん……」
リアは首を横に振り、アレンとシェナは互いに顔を見合わせてそんなことを言ってくる。
「刀弥は本が好きなの？」
「ああ。物語とかは好きだな」
そうやって刀弥は本の表紙を見せびらかすとその後、その本をスペーサーの中にしまい込む。
「それじゃあ、今度こそ宿屋に行こうか。まだ寄る所がある人はいないよね？」
その問い掛けに、誰も頷く者はいない。そうして彼らは、宿家探しを再開するのだった。

「すいません。部屋空いてますか？」
宿屋に入ってすぐにリアが、元気な声でカウンターに向かって訊ねる。
「二人部屋なら、二つ空いてますよ」
「あ、じゃあ、それで」
そうして鍵を受け取ったリアが戻ってくると四人はそのまま、部屋へと向かう。
部屋に辿り着くと刀弥とアレン、リアとシェナに別れて部屋に入っていく――筈だった。
「……アレン」
その瞬間、シェナが相棒の名前を呼ぶ。その途端、アレンの体が

ピクリと大きく震えた。
一体どうしたのだろうと刀弥とリアが、二人の様子を見守っていると……
「私、アレンと一緒の部屋がいい」
唐突にシェナが、そんな衝撃的な発言をしてきた。
刀弥とリアは目を見開き、アレンのほうへ問いの視線を投げかける。
「え、え～っと、これはだな……」
アレンはどうにか刀弥たちに説明しようと口を開くのだが、上手い言葉が見つからないのかしどろもどろになっている。
仕方なく、騒動の原因を作った本人にリアが理由を訊ねることにした。
「シェナさんは、どうしてアレンさんと一緒の部屋がいいんですか？」
するとシェナはこう答える。
「アレンのほうが安心するから……」
なんてことない。ただ、単純に安心できる人の傍で眠りたかっただけらしい。
しかし、だからといってアレンとシェナを一緒の部屋になるのを刀弥は許す訳にはいかない。それは同時に刀弥とリアが、一緒の部屋に泊まることを意味しているからだ。
「だけどな――！？」
そうして口を開く刀弥。だが、その口をいきなりリアに塞がれてしまう。
突然のことに刀弥は驚くが、リアの意図に気が付くと急いでそれから逃れようともがき始める。
もがく刀弥を抑えながら、リアは彼の予想した通りの言葉を二人に向けて発した。
「そういうことなら、アレンさんとシェナさんで一緒の部屋に止まってください。久々に二人っきりで話したいこともあるでしょうし

……」
「え、いや、でも……」
「リア、ありがとう」
「いえいえ」
迷うアレンを置いていき、女性二人の間で新たな部屋割りが取り決められる。こうなると元の部屋割りに戻すのは難しい。
結局、男性二人は共に溜息を吐いて、彼女たちの決定を受け入れるしかなかったのであった。

「全くお前は……」
男女一組ずつに別れた後、自分たちの部屋に入ったアレンはぶつぶつと文句を漏らしている。
シェナはそれを耳に入れるだけ、反応は返さない。どうせじきに収まることはこれまでの付き合いで既にわかっていることだからだ。
「あれ、絶対誤解されてるぞ」
その意味について、シェナは少し考える。そうして出てきた結論は別に構わないというものだった。
「別に構わない」
「いや、お前なぁ」
シェナが、好意を抱いていることはアレンもわかっている。ただ、それがどちらの意味なのかまでは測りかねているが……
「ああ！！　もういい」
そう叫んで彼は、部屋の床に座り込む。そんなことを悩むよりも彼にはすることがあるからだ。
そうして彼はスペーサーから以前、制作していた魔具を取り出す。製作の続きをするためだ。
「どうなの？」
見下ろす形で、シェナはアレンの作業を覗き込む。

どうなのとは、その魔具の製作の進捗状況のことである。
「もう少しで形にはなるな。ただ、そこから先はテストと調整の繰り返しだ」
大抵、ほとんどの道具は設計、製作、テストと調整をえて完成する。現在はその製作を終えようとしている段階だということだ。
「明日までは完成させたいところなんだが……徹夜になりそうだな」
今の時間を見て、彼がそんなこと呟く。その表情はどこか楽しそうだ。
「……アレン。頑張って」
無茶をしないでとはシェナは言わない。彼は、彼ができる範囲で一生懸命やっているのだ。だから、シェナにできるのはそんな彼を応援することだけだ。
「ああ、できたらテストは頼むな。使ってみた感想も」
「わかってる」
彼が作り、自分が使う。自分が彼を守り、彼が自分を支える。それが二人の関係だ。今までも、そしてこれからもずっと変わることのない自分たちの関係。
シェナはそう考えている。
「……アレン」
「何だ？」
名前を呼ばれ、アレンがシェナのほうへ首だけ振り返る。
「これからもずっと一緒……」
そう言って、彼女はアレンに抱きついた。
「何を言ってんだ？　当たり前だろ」
彼女の行為に特に驚くことなく、アレンはそう返す。
それを聞いて彼女は体を離すと、部屋から出ていこうとする。
「どこへ行くんだ？」
「刀弥たちに、アレンは篭もるって伝えてくる。ついでに夕食何か持ってきてもらえるものがないか見てくる」
「ああ、悪い頼む」

アレンの言葉にシェナは頷きをもって返すと、彼女はドアを閉めた。その後、刀弥たちの部屋へと歩く彼女の足音がアレンの耳に届く。

「全くあいつが、そんなことをしようとするなんて……今夜は雪でも降るかな。ってここは常に雪が降ってるんだったな」

そんなことを呟きながら、アレンは作業を始める。

作業に熱中しながらアレンはふと、過去を思い返す。それは、二人が旅立つ少し前のことだ。

そのときはまだ自分がいろんな世界を回るなんて夢にも思わず、ただ普通の生活をしていくものとばかり思っていた。

そんなある日、シェナが自分に話があると言ってきた。

常日頃から高い実力を持てど、何を考えているかわからない幼馴染が話があるという事態にアレンが驚いたのは言うまでもない。

興味本位もあって、アレンは彼女の話を聞いてみることにした。

まさか、その話が自分の人生に大きな影響を与えるとは思いもしないで……

そうして彼女が話してきたのは、いろんな世界を巡る旅をしようと思っていること、その旅にアレンも一緒に行かないかという内容だった。

当然、アレンは当惑した。彼女が旅に出ようという話にもビックリしたが、何よりその旅に自分も誘われたということに彼は意表をつかれたのだ。

何故、自分を誘うのかとアレンはシェナに尋ねた。彼女の実力なら、いろんな世界を旅することは不可能ではないだろう。だが、自分がいては足手まといを増やすことになり、リスクだけが増える。彼女だってそれはわかっているはずだ。

その疑問の答えはシンプルだった。アレンがいないと、何もできないからだそうだ。これにはアレンも脱力した。けれども、考えてみれば当たり前だ。

戦闘能力こそ高いが、それ以外下手すれば一般常識すら疎い彼女

を散々アレンがフォローしてきた。彼女が一人で行ったところで、その部分で問題が生じる可能性は十分あり得るだろう。

そのことに呆れると共に、彼女が自分を必要してくれるという事実にアレンはつい喜びを感じてしまう。

時間を貰い、いろいろ悩んで出した返事はイエスだった。その返事にシェナは嬉し泣きまでして喜んだ。

そうして今……

いろいろあったが、楽しい日々を過ごしている。あれでシェナがしっかりしていたらと思うことは多々あるが、もうここまで来ると諦めるしかない。

アレンは手を止めて、自分が制作している魔具を見つめる。

シェナに誘われ悩み抜いたあのとき、一つ誓ったことがある。余りに恥ずかしい内容だが、それでもそれを一瞬たりとも忘れたことはない。

――そういえば、シェナの銃の定期チェック。もうじきだな……

その誓いと一緒にそのことも記憶から呼び起こす。

シェナの銃は、彼女の使い方に対応できるようチューンナップされている。だが、それでも部品が磨耗する頻度は高く、部品交換する回数は多い。

もし戦闘中に部品が壊れたら、それだけでかなり不利になってしまうだろう。

そうならないように定期的にチェックしているのだが、その定期日が迫ってきているのだ。

最近、かなりの数のモンスターと戦っているので、かなり磨耗しているはずだ。

「やることが多いな」

一旦、体を伸ばす。次に体を捻ってみると、関節の鳴る音が部屋中に響いた。

「さあてと、続きを始めるか」

そうして彼は製作の続きを始める。

それから少ししして、シェナが夕食を運んできた。どうやら自分の分も持ってきたようで夕食は久しぶりに二人っきりで食べることになった。

その後、シェナは風呂に入って眠りについたが、アレンはそのまま作業を続けていた。

明かりはついたままの上、作業の音も抑えているが多少漏れている。だが、シェナは気にせず眠れるので問題はない。さすがに他の人では、こんなことはできない。

結局、アレンの作業は、朝方まで続くのであった。

二章二話「不安と信じる答え」（3）（後書き）

本来ならもうちょっと短くなるはずが、少し話を加えたらかなりのボリュームになりました……
おかげで、シーンを一つずらすことになりました。
０８／１８
文章表現の修正

二章二話「不安と信じる答え」（4）

薄暗い明かりの下、宿屋の周囲を刀弥は走っていた。

今日は『瞬歩』の修行。ただ今回は以前とは少し違う。瞬歩の移動距離がかなり短い上にその距離は長かったり短かったりと不規則、おまけに瞬歩終了直後に方向転換やステップなどを挟み再び瞬歩を行うといった動作を何度も繰り返している。そのため、彼の動きは長さが違うジグザグの軌道を描いている。

これは銃弾などの遠距離からの攻撃をくぐり抜けるために、刀弥が考えた移動手法だ。

最短距離を瞬歩で一気に詰めているだけでは、移動先や軌道を読まれ狙われる可能性が高い。そのため、それを避けるために短距離の瞬歩を方向転換しながら繰り返すことで相手の狙いをつけづらくして、相手との距離を詰めていこうと考えたのだ。

瞬歩の移動距離に変化をつけたり、瞬歩終了直後に時折ステップを混ざるのも同様の理由だ。刀弥にとって相手が狙いづらいほうがいいに決まっているのだから、出来る限りのことは全てしておくべきだろう。

しかし、刀弥の不安は消えない。

相手が狙いづらい状況を作ることはできたが、それも完璧ではない。相手の実力によってはそれでも狙いをつけて撃ってくることも考えられるし、狙うことを諦めて数任せに攻撃を放ってくる可能性も十分あり得る。

そうなったときの対策が不十分なのだ。

この間のトカゲの火球のように遅い弾なら反応して避けられるだろうが、シェナの銃のような速い弾の場合、今の刀弥では反応して避けることなど到底できるはずもない。そういう意味では現状、当たる軌道で弾が放たれた時点で刀弥は詰むのだ。

――やはり、無理なのか……

そんな思いが口から出そうになる。何とか噛み締めて声が出るのは防いだが、それでその思いが消えるわけではない。

天を仰ぐ刀弥。と、そこで彼は宿屋のある部屋から灯りが漏れていることに気が付いた。

――確かあの部屋は……

アレンとシェナが、泊まっている部屋だということを記憶から掘り起こす。

それと共に昨日、魔具の製作作業に専念するためにアレンが部屋に篭もるという話をシェナがしていたことも彼は思い出した。

夕食もシェナが、部屋に持っていって二人で食べてたようだ。運ぶシェナの姿を、行きと帰りの両方を見ているので間違いない。そのおかげで、刀弥たちのほうも久々に二人っきりの時間を過ごすことになった。

その部屋の明かりが、今も点いているということは十中八九徹夜をしていたのだろう。どうやら製作にかなり熱中しているようだ。

――今日は出発する日だって言うのに……

一晩休んだあとの今日は、食料などの補給を終えればすぐに出発する予定だ。

寝ずに作業していたとなると、かなり疲れも眠気も残っているだろう。

溜息を一つ吐くと、刀弥は修行を終了して宿屋の中へと戻っていくのだった。

「刀弥だ」

ノックと共に、自分の名前を告げる刀弥。やがて、ドアが少し開き、そこからアレンが顔を出す。

「なんだ？」

背後を気にしながら尋ねるアレン。その仕草からシェナはまだ寝

ていることがわかった。
「これだ」
刀弥が差し出したのは湯気の出たカップだった。
「コーヒーだ。昨日の夕食のときに知ったんだが、丁度店の人も起きてたから頼んできた。眠気覚ましに丁度いいだろう」
両手に持っていたカップの内、左手に持っていたほうを刀弥はアレンに差し出す。
「入ってくれ」
両手の塞がった刀弥の代わりに、アレンがドアをゆっくりと開け刀弥を招き入れる。
それに促され刀弥は部屋へと入る。
部屋に足を踏み入れて最初に刀弥が目にしたのは、ベッドの上で安らかに眠るシェナの寝顔だった。
頬が緩み、まぶたも綺麗なカーブになっている。どうやらいい夢を見ているらしい。ときたま、寝言でアレンの名前を呼んでいるのは気のせいだということにしておく。
部屋を見渡してみると、部屋の大部分を製作作業用の魔具で埋め尽くしているという状況だった。
「よくこんな状況で、シェナは寝れたな」
感心した顔を浮かべて、刀弥は寝ている彼女を見つめる。
「それは俺も不思議に思うんだが、どうやら気にせず眠れるらしい」
欠伸を一つしながらアレンが答える。
そんな彼に、刀弥は左手のカップを手渡す。
受け取ったアレンは、早速それに口をつけた。
「……苦い」
「それがコーヒーだしな」
コーヒーを飲みながら、刀弥が苦笑いを浮かべる。
「まあ、確かにこの苦さなら目も覚ますだろうな」
そうしてコーヒーを飲み終えた二人はカップを置くと、刀弥が床に転がっている魔具へと視線を向ける。

「で、どうなんだ？」
「とりあえず製作は完了。後はテストと調整を繰り返すだけだ」
体全体を伸ばしながら、アレンは徹夜の成果を語る。その顔には、一段落ついたことへの満足感がある。
「ってことは、次の戦闘からはこれを使うのか？」
「まあ、相手によるな。ぎりぎりの戦いでどう転ぶかわからない武器なんて刀弥たちだって御免だろ？」
「確かに……」
素直に同意する刀弥。アレンの言うとおり、そんな戦いで未知数の武器を使われるのは刀弥としてもたまったものではない。できれば使わないでくれというのが、彼の本音だ。
「だから、楽そうな相手かテストができそうなスペースを見つけない限りは使うつもりはないから、安心してくれ」
「そうか」
とりあえず、そのことに刀弥は安堵する。
そうして二人が話しているうちに窓の外も明るくなっていき、やがてシェナが目を覚ました。
「シェナ。起きたか」
「おはよう。シェナ」
彼女の起床に気が付いたアレンと刀弥が、そう挨拶をする。
「おはよう。アレン、刀弥……刀弥？」
挨拶を返してから数秒後、ようやくシェナは何故、刀弥が部屋の中にいるのかという疑問を得たようだ。虚ろな瞳のまま首を傾ける。
「ああ、悪い。邪魔してる」
彼女の疑問の声に刀弥がそう返事をする。が、シェナは聴いていないのか彼女は左右を見回し、やがてアレンが作業していた魔具へとその視線を止める。
「終わったの？」
「ああ、終わった」
その言葉を聞いて途端にシェナが微笑む。そして、フラフラと立

ち上がりアレンの傍まで近寄ると彼女はアレンに抱きついて慰労の言葉をかけた。
「お疲れ様。アレン」
「あ、ああ……」
戸惑ったアレンは、チラリと刀弥のいる場所へと目を動かす。
一部始終を見ていた刀弥は呆然とそれを見ていたが、アレンの視線と合うと、彼はあーと発しながら視線を外す。そして……
「それじゃあ、俺はそろそろ戻る。リアの様子を見に行ったほうがいいだろうしな」
そう言って彼は、アレンとシェナを置いて自分の部屋へと戻っていくのだった。

部屋に戻ってみると、丁度リアが目を覚ましたところだったようだ。
「おはよう。刀弥」
「おはよう。リア」
ベッドから出る途中で刀弥が部屋に戻ってきたことに気が付き、リアが朝の挨拶をしてくる。
「シェナやアレンも起きているから、急いで荷物をまとめないとな」
「ひょっとしてアレンさんたちのほう、見に行ってたの？」
既に二人の起床を知っている刀弥に、リアは目を丸くする。
「外で修行をしていたら、部屋の明かりが点いていたからな」
「え！？　そんな状況で部屋に行ったの！？」
刀弥のその言葉に突然、隣の部屋に聞こえるのではないかというぐらい大きな声で、リアが驚愕する。
「な、なんだ？　一体どうしたんだ？」
そこまで驚く理由がわからない刀弥は、彼女の驚愕に戸惑ってしまう。

「だ、だって――」
「何をそんなに慌ててるのかわからないが、俺は徹夜で製作作業をしていたアレンにコーヒーを持っていっただけだ」
慌てて何か言おうとするリアを落ち着ける意味もあって、刀弥が先に自分の訪れた理由を告げる。するとそれを聞いて、それまで慌てていたリアがピタリと止まった。
「制作作業？　徹夜？」
「昨日、シェナが言ってただろ？　アレンがこの間、作業していたあの魔具。あれの続きをするために篭もるって」
刀弥の言ったキーワードに首を捻るリアに、刀弥が昨日の出来事を思い出させるために補足する。
「……あー、そういえば言ってたね。あはは……」
「全く、一体何と――」
勘違いしたんだと言うとした刀弥はふと、ある可能性を思いつき固まってしまう。次の瞬間、彼は顔を赤くしてリアのほうを見た。
「……気付いちゃった？」
彼の反応にリアもつられたようで、若干頬が赤く染まっている。
「……ああ」
リアを直視できず、刀弥は目を伏せてしまう。それはリアも同じだったようで彼女もまた視線を逸らしていた。
気まずい沈黙が、二人を包み込む。
何とかこの状況を脱さなければと刀弥は考えるが、焦っているせいか妙案が思いつかない。
その間に時間が進んでいく……
――時間？
何かを忘れているような気がして、刀弥はそのことに思考を巡らす。そうして彼は、ここに来たときにリアに告げた言葉を思い出した。
「……っとそうだ！！　アレンたちはもうとっくに起きてるんだった。早く行かないと」

「そ、そうだった。急がなきゃ」
思い出した刀弥がそのことを口にするとリアもそれに相槌を打ち、二人は大慌てで出発の準備をする。
おかげで先ほどのやり取りについて、二人は綺麗さっぱり忘れることができたのであった。

二人が待ち合わせの場所に行ってみると、そこには刀弥の予想通りアレンとシェナが待っていた。
二人と合流すると、四人は宿屋から出ていく。朝食を周辺の食堂で済ませると、彼らは食料などの買い出しを始めた。
そうして必要な物を揃えて準備が整うと、四人は町から出ていくのであった。
道中は特にモンスターに襲われることもなく、出会ったものといえば途中で行商人とすれ違ったくらいだ。昼食後もそれは変わることはなく、時間と距離だけが刻々と進んでいくのだった……
やがて、夕食の時間が近づいてくると、四人は野営の準備を始める。
本日の刀弥とリアの夕食は、焼き魚と茹でた芋を細く切って特製ソースに漬けたもの。アレンとシェナは、何かよくわからない食材がまぶされたパスタだった。
「その料理は何て言うだ？」
「これ？　アジェスのパスタだ？」
「アジェス？」
「ん～。野に咲く花の実なんだが……とりあえず、味がすっぱいことで有名なんだ」
自分の世界に梅干しのパスタがあったという記憶があるが、味はそれに近いのだろうか。
ともかく、なるほどと刀弥は頷くと、彼らの食べている様子を見

ながら自分も食事を続ける。
そんな食事を続けているときだった。
「あ、シェナ。拳銃、少し預けてくれないか？」
ふと、アレンがシェナに向かってそんなことを言い出した。
「どうかしたのか？」
「いや、シェナの拳銃の定期点検をしようと思って」
刀弥の疑問に、アレンがその理由を述べる。
それを聞いて刀弥は納得する。と、同時に自分の刀は、全く何もしていないことに気が付いた。しかし、手入れをしようにも道具がない以上、どうしようもない。結局、次の町で買い足そうという結論に落ち着くのだった。
「……わかった」
一方のシェナは、アレンの理由を聞いて首を縦に振ると腰から二丁の拳銃を引き抜き、それをアレンに差し出す。
「確かに。じゃあ、見張りついでにやっておくから今日は先に寝ておいてくれ」
「じゃあ、今日は前半を俺とアレンが、後半はリアとシェナに別れるか」
「それがいいかな」
「わかった」
こうして見張りの順番が決まり、夕食が終わったところで四人は就床に入るのだった。

二章二話「不安と信じる答え」（４）（後書き）

思いの長くなり急遽、これで出すことに……

０８／１８

文章表現の修正

二章二話「不安と信じる答え」（5）

暖の温もりを感じながら、刀弥は町で買った本を読んでいた。アレンは向かい側でシェナの拳銃を分解している最中だ。

分解された拳銃をざっと見た感じ、かなり細かなパーツがいくつも組み合わさってできているようだ。その数は、一目見ただけで刀弥が数えるのを諦めたほどだ。

「魔具の銃って結構、細かなパーツで構成されてるんだな」

本からアレンの作業に視線を移した刀弥が、そんな感想を口に出す。

「その辺は魔具によって違うだろうけど、俺たちの世界じゃこれぐらいは普通だな」

「なるほどな……」

一つ一つパーツを摘んで目の前まで持ってきては、目を細めてパーツを様々な角度からチェックするアレン。それが終わると、見ていたパーツを右か左の陣地に分けて置いていく。恐らく、交換する必要があるかどうかで分けているのだろう。

「いつもシェナの拳銃のチェックは、アレンがやってるのか？」

「ああ、あいつはあんなんだしな……」

そう言ってアレンはチラッと一瞬、寝ているシェナを見る。

確かにシェナにこんな細々な作業が、できるとは刀弥も思わない。ただ口にするのは、はばかられたので刀弥は答えの代わりに苦笑を浮かべるに留めた。

「全く……普段はこんな感じなのに、戦いになると凄いとしか言えないくらい強いんだからな……」

溜息混じりに愚痴を零すアレン。だが、その顔には羨望の感情が見える。

ふと、初めてあったとき、彼の口調に嘆きの色があったときの言葉が刀弥の頭の中に甦る。

『そういうこと。こう見えても俺より力はあるからな』

もしかしたら……という考えが刀弥の頭をよぎる。それを確かめるために、彼はその疑問を口にする。

それは本来、訊ねるべきではない疑問。けれども、それは今の刀弥にはどうしても聞いておきたいことだった。

「……なあ、アレン……アレンはシェナの実力に嫉妬しているのか？」

その途端、アレンの手が止まる。周囲が静まり返り、洞窟を通り抜ける風の音が二人の傍を通り抜けていく。

「……ないと言えば嘘になるな」

数十秒の沈黙の後、作業を再開したアレンが閉じていた口を開いた。まるで今まで溜め込んでいたものを吐き出すかのように、彼は己の思いを次々と言葉へと変えていく。

「あいつが銃に興味を持ったのは、俺が作った凄い簡単な魔具の銃をプレゼントしたときだった。あいつ、凄く喜んで毎日、練習場で撃ってたのを今でも覚えてる……」

懐かしむような声で、彼は話を続ける。

「ずっと飽きもせず練習を続けて、気が付いたときにはあんなに強くなってた。男としては複雑だったな。もっとも、きっかけが俺のプレゼントだから嫌かと聞かれたら嬉しくはあるんだけどな……」

そう言って、彼は乾いた笑いを見せた。

「正確に言えば、嫉妬というよりも羨ましさだな。俺もあんなに強かったらなって思うことはある。そうしたら俺もあいつと肩を並べられるのにってな……だけど、まあ最近はそれとは別に、こうも思っているんだ」

そこでアレンは、大きく息を吸い込んで間を作る。刀弥は、彼が告げるであろう新たな言葉をただじっと待つだけだ。そうして、アレンはその言葉を刀弥に語る。

「今まで俺は、あいつの得意なことに羨ましいって思ってた。でも、あいつにだってできないことはある。そう考えたら、さっきの悩みなんて馬鹿らしくなってな」

それが彼の出した答えだった。あまりにも当たり前で、だけどだからこそ見落としがちな答え。

「確かにあいつの銃は凄い。だけど、代わりにあいつはそれ以外のことが全くと言っていいほど駄目だ。下手したら、それが理由で酷い目にあうかもしれないくらい」

力強く公言するアレン。刀弥はただ黙って聞いているだけだ。

「だから、俺はその部分であいつを助けるさ。生活や魔具の製作や調整。少なくてもその部分で、俺はあいつの支えになれてるのは確かだからな」

「だが、それは他の誰もができることだ。お前じゃなくても……」

あまり言っていいことではないと思ったが、それでも刀弥はそのことを指摘せずにはいられなかった。

彼が言った部分は、別にアレンでなくてもいいはずだ。確かにシェナは戦い以外の部分は駄目だが、そのフォローはアレンだけができることではない。

その指摘は、アレンにとって予想通りの反応だったらしい。彼は怒る様子は見せず、逆に微笑んでいた。

「まあ、確かにな。だけどそれでもいいんじゃないか？　誰もが皆、特別なわけじゃないんだから。第一、あいつならこう言うんじゃないか？　『アレンのほうがいい』って……」

シェナを真似たアレンのその言葉に、刀弥は思わず吹き出してしまう。確かに彼女なら、そう言いそうな気がしたからだ。

「それなら、確かにアレンだからこそ、できることになるのかもしれないな」

他の誰でもできること。だけど、それを受ける人物が受け入れているのはたった一人。ならば、その者しか彼女を支えることはできない。そういうことだ。

「俺は、そこまで特別に拘ろうとは思わないけどな。ただ、あいつの力になれれば……俺としてはそれで満足だし」
最後のほう、恥ずかしそうにアレンはそう口にする。それがおかしくてつい刀弥は笑ってしまう。
「笑うな。本当に恥ずかしいのはこれからなんだから……」
「……悪い。それで、本当に恥ずかしいことってのは？」
ようやく笑うのをやめて、刀弥は続きを促す。
「旅にはあいつに誘われて行くことにしたんだが、そのときに密かに誓ったことがあるんだ」
「誓ったこと？　なんだ？」
「諦めずに魔具の技術を磨いていって……いつかあいつにとって最高の武器を作ってみせるって」
それがあの日、自分を必要としてくれた彼女に対してアレンが誓ったことだった。彼女と一緒にいるためには、それくらいのことをしないといけないような思いが当時、彼の中にはあったのだ。
いろいろと悟った現在、その誓いに当時ほどの強い思い入れはない。けれども、その誓いは己の目標として、今なお彼の心に残り続けている。
現在、作っている魔具もその一環だ。まだ最高にはほど遠いが、それでも確実に一歩ずつ進歩しているとアレンはそう思っている。
「こんな答えでいいか？」
「むしろ、十分すぎだ。悪いな、変なことを聞いて。おかげで助かった」
いろいろな話が聞けて、刀弥としては十分満足のいく話だった。不躾な質問をしたことを刀弥が謝り、アレンが両手で制する。
そうして二人の話は、終わりを告げたのだった。

翌日の朝、皆と少し離れたところで刀弥は素振りをしていた。

今の時間帯の見張りはリアとシェナ。刀弥はまだ寝ていてもいい時間帯だが、剣術の修行もあるのでいつもこの時間で起きてしまっている。

虚空相手に剣を振りながら刀弥が思案するのは、昨日のアレンとの会話だ。

シェナの実力に羨望を感じながらも、自分のできることを見つけそれをやっていこうとしているアレン。

――あいつの力になれれば……か……

それこそが彼の原動力なのだろう。それがあるからこそ、彼は頑張り続けられる。

――なんだかんだと言って、互いが互いを必要としているんだな。

シェナはその辺を自覚しているのだろう。素直な性格なので、それがあの態度になっている訳だ。

なんとなく微笑ましく思い、ついつい刀弥の顔がほころぶ。

「刀弥？　どうしたの？」

そのとき、意外な人物の声が刀弥の耳に入った。

素振りをやめて、振り返る。

そこには、やはりというかシェナが立っていた。

「いや、なんでもない。そういうシェナこそ、どうしてここに来たんだ？」

自らアレンの傍から離れて自分のところにやってきたという事態に、刀弥は不思議に思い首を傾げる。

「刀弥に訊きたいことがあったから……」

「俺に？　何だ？」

シェナが質問とは珍しいと思いながら、刀弥はその内容について訊ねてみる。

「刀弥は、どうして剣の腕を磨いているの？」

その問い掛けに刀弥は、少し考え込む。

「どうして……か」

幼少より剣術を教わっていた刀弥にとって、剣術は身近なものだ

った。竹刀を振り足を鍛え、他の人たちと手合わせをする。そんな日々を彼は楽しんでいた。

「……そうだな。楽しいからだな」

負けないために剣術を磨き、勝っては喜ぶ。リベンジを叫ばれてはそれを受けることで負けたくない思いを強くし、その思いがより一層の努力となる。

そうやって自身の成長を実感すると嬉しくなって、もっと上を目指そうと修行に熱中していく。そんな繰り返しだ。

「楽しい……」

刀弥の返答を聞いて、リアは小さな声でその言葉を口にする。

この問いが、シェナにとってどういう意味があるのか刀弥にはわからない。けれども、彼女にとっては何か意味があるのだろう。

「そう言うシェナこそ、どうして銃を磨こうと思ったんだ？」

この問いの答え自体はアレンとのやり取りで大方、想像がついている。それでも尋ねたのは、本人の口から直接確かめたいと思ったからだ。

シェナの返事は彼の予想通りのものだった。

「アレンが、銃をプレゼントしてくれたから。それが嬉しくて、だから上手く使えるようになりたかった……」

「それで、あの成果か」

彼女に聞こえないように、刀弥はポツリと漏らす。愛は偉大だという感想が頭に浮かぶ。

「まあ、何にしてもシェナは凄いな。あれだけの動き、広い視野がないととてもできるものじゃない」

「そう言う刀弥だって、かなり速い。私じゃあんな風に動き回ることなんてできない」

シェナから賞賛の言葉に思わず刀弥は、失笑してしまう。

「褒めてくれるのは嬉しいけど、銃相手だと勝つことすら難しいのが現実だ」

あまり場が重くならないように、軽口で刀弥が返す。けれど、彼

の言葉にシェナが首を斜めにする。
「何故、勝てないと思うの？」
「……間合いから仕掛けられたら、反撃できないから防戦一方。近づこうにも、数任せに撃たれたらそれも難しい。そもそもシェナの銃弾並みの速度の場合、当たる軌道で撃たれた時点で反応できないからそれで詰むんだ」
両手を上げて考えられる問題点を、次々と挙げていく。
正直言えばシェナにそういうことを話すのは、刀弥にとって口惜しい思いがある。何せ当の銃使いに自分の弱点を晒しているのだから。
しかし、刀弥の挙げた点に対してシェナは答えは簡潔だった。
「それは、それは刀弥の努力が足りないだけ」
その簡潔な返答に、刀弥は愕然とする。
「努力が足りないって……ふざけるな！！」
これまでの自分の必死の模索が否定されたみたいに聞こえ、思わず刀弥は激昂してしまう。
「これでも、どうにかできないかといろいろと手段を考えてみた。だが、これ以上どうしようも……」
その勢いのままシェナに掴みかかる刀弥。けれども、シェナが表情を変えることはない。ただ、淡々と己の意見を刀弥へとぶつけていく。
「本当に全部？　銃口、相手の視線や能力からの弾の軌道の予測。殺気や気配、動作から発射のタイミングを読むこと。そういうのも？」
「え、いや、それは……」
それはさすがに思いつかなかった。その指摘に逆に刀弥が面食らってしまう。
「反応できないなら、反応できるように鍛えればいい」
「無茶を言うな。銃弾に反応できる奴なんている訳ないだろう」
途方も無い話だとばかりに刀弥は呆れ返ってしまう。けれども、

彼女の言葉は続く。
「それはあなたが、限界をそこに設定しているから。確かに刀弥の世界じゃそうだったかもしれない。だけど、ここはあなたの世界じゃない。私は、そういうことをやってのける人を何度か見てきた。中には斬撃を飛ばす人さえいたわ」
「なんだと？」
その一言に、刀弥は絶句せざるおえない。
「どうして？　どうして自分の力を信じられないの？」
「それは……」
その問いに刀弥は言いよどんでしまう。
「自分の力を信じられるのなら、どんなことがあっても諦めることなんてない。ただひたすら磨くだけ。私がそうだった。弾を弾くくらい硬い敵なら、僅かなズレもなく同じ所に狙い続ける術を。接近してくる相手に対抗するために銃を使った格闘術を。そうやって私は今までやってきた」
そうしていくうちに彼女は今の高みに辿り着いたのだろう。
「……」
刀弥は何も言わない。いや、言えなかった。確かに彼女の言うとおり、自分自身が、己の剣術を信じきれていない部分があったのは事実だからだ。
「刀弥なら自分の力を信じれば、きっともっと上へと昇れる」
「アレンは違うのか？」
今までのやられていたせいか、ついそんな意地悪を返してしまった。
「アレンと刀弥じゃ行く先が違うから。刀弥は私と同じ方向」
「なるほど」
アレンの目指す先は技術分野だ。そちら方面に詳しくないシェナでは、アレンの可能性はわからないと言いたい訳だ。
「……それじゃあ、そろそろアレンを起こす時間だから」
「ああ、いろいろ意見をくれて助かった」

「それは私も同じ」
そうして彼女はアレンのもとへと戻っていく。そんな彼女の後ろ姿を刀弥はただ黙って見送るのだった。

二章二話「不安と信じる答え」（5）（後書き）

08／18
文章表現の修正

二章二話「不安と信じる答え」（6）

「……それで、刀弥は最近様子がおかしかったんだ」
その日の練り歩いた後の夜、見張りの時間帯。刀弥は、リアに自分の心情を打ち明けていた。
シェナとアレンは後半の見張りのため既に眠りについている。そのタイミングを見計らって、刀弥はリアに打ち明けたのだ。
銃に対して劣っているのではないかという不安、アレンの誓い、シェナの意志。思ったこと聞いたことを全て彼女に話した。
「悪いな。黙ってて」
そうして刀弥は謝る。今まで彼女に何の相談もしなかったことに、申し訳ない思いがあったためだ。
「まあ、他の人に悩みを打ち明けるなんて中々勇気がいるもんね」
そんな彼に対して、リアは下から覗き込むようにして顔を近づけてくる。
「でも、話してくれてありがとう」
そして嬉しそうな顔を刀弥に見せた。距離が近かったこともあって、その顔は刀弥の視界いっぱいに広がっている。
顔が赤くなるのを自覚しながら、刀弥は気付かれない程度にリアから少し離れる。
「で、刀弥の悩みだけど、私はもっと自信を持ってもいいと思うよ。確かに今の刀弥は銃とかに対応できてないのかもしれないけど、それを言ったら私だって最初のほうは似たようなものだったし……」
「そうなのか？」
意外という顔を刀弥が浮かべる。刀弥の予想ではその辺りの弱点とかは、リアが学院に通っている間に改善していると思っていたからだ。
「そりゃそうだよ。最初から完璧な人なんていないよ。自分で気付いたり戦いの途中で気が付いたり……もちろん、運が悪ければそれ

が理由で死んじゃうことだってあるよ。そういう意味じゃ、私は運が良かったのかもしれないけど」

そのときのことを思い出しているのか、一瞬目を瞑るリア。

「確かにそういう部分は、早く修正しないといけないとは思う。でも、すぐに結果がでないからって焦らなくてもいいと思うよ」

諭すような口調で、リアが刀弥に語りかける。

それは頭ではわかっている。しかし、刀弥には悠長に待っていられない理由があった。

これが自分一人の問題であれば、刀弥ももう少し楽観的に考えられただろう。だが、今刀弥は一人ではない。リアという共に旅をするパートナーがいるのだ。

もしそんな事態に陥れば、被害を受けるのは自分ではなく彼女かもしれない。彼は、そのことを恐れているのだ。

そのため、意を決した刀弥はそのことを彼女に告げようとする。

「だが――」

「第一、そういった欠点をフォローしあうのが仲間でしょ？」

だがしかし、リアの放ったその言葉に、刀弥は開いた口を閉じざるを得なかった。

「改善に時間が掛かるならその間、その部分を私が埋めてあげる。私は魔術師、刀弥は剣士。私たち相性いいんだよ？」

そんなことを言いながら、リアはウインクしてくる。

「私たちは二人なんだから、一人だけで頑張る必要なんてないんだよ。必要なら頼ってもいいんだから……」

「……そうだな」

僅かな沈黙の後、呟くような小さな声で刀弥はそう漏らす。

彼女の言うとおりだ。自分はなんて愚かなんだろう。

彼女が言おうとしていること。それは刀弥が言おうとしていたこととは逆の意味を持つものだった。

仲間故に、刀弥は彼女の迷惑を掛けないようにと考えていた。だけど本当の仲間なら互いに頼り、信頼しあってもいいはずだとリア

は言っているのだ。
「悪い。リアの言うとおりだな。何かリアに迷惑を掛けてしまうじゃないかと思っていろいろ焦ってた」
「そうそう、遠慮しなくていいんだから」
表情を緩める刀弥にリアは満足気に頷く。
「まあ、今はシェナさんやアレンさんもいるし、思い切ってシェナの力を借りるのもいいんじゃないかな？」
そのアイデアに、刀弥は少し考え込む様子を見せる。
「……駄目もとで頼んでみるか」
「うん、そうそう。その調子」
そうやって、彼女は刀弥を励ますのだった。

「シェナ、頼みがある」
見張りの交代の時間になりアレンとシェナを起こしたところで、刀弥がシェナにそう言って頭を下げた。
アレンは突然のことにびっくりし、シェナはただ無表情にそれを眺めている。
「……何？」
「遠距離に対抗するための修行に、手を貸してくれないか？　シェナの見地からの意見が欲しいんだ」
頭を上げた刀弥は、頼みごとの内容を説明する。その表情は真剣そのものだ。
確かに遠距離攻撃の専門家とも言える銃使いから意見を聞くことができれば、遠距離戦に対抗するための術が見つけやすくなるかもしれない。そうでなくても戦い方や思考パターンを知ることができれば、その経験は別の形で役に立つこともあるだろう。
「……いいわ」
「本当か！？」

彼女の返事に、刀弥は喜びと驚きの混じった声をあげる。
「ええ」
「やったね。刀弥」
上手くシェナの協力を得ることができたことを、リアは自分のことのように喜んでくれた。
これで大丈夫とは言えないが、それでも多少は前進したと言ってもいいだろう。
「まあ、とりあえず良かったな。刀弥。それはともかく見張り交代の時間だ。その修行のためにも、今はしっかり休んだほうがいいんじゃないか？」
「そうだな。それじゃあ、アレン、シェナ。おやすみ」
「おやすみなさい」
「ああ、おやすみ」
「二人共おやすみ」
就寝の挨拶を述べた刀弥とリアは、横になる。それから瞳を閉じると、うつらうつらと眠りの底へと落ちていくのだった。

「発射のタイミングを掴むのが遅い。もっと相手の全体をよく観察して」
その直後、透明の弾丸が刀弥の頭にヒットした。その威力に刀弥はバランスを崩し仰向けに倒れてしまう。
「っ！？」
頭部の痛みに刀弥は声を出しそうになるが、なんとか彼は堪える。
「……もう一度だ」
やがて、痛みが引くと彼はそれだけを告げて立ち上がった。既に、シェナはいつでも始められる状態だ。
時間は朝、刀弥とシェナは昨晩の話の通り、遠距離に対抗するための修行をやっていた。

基本的にシェナは止まったまま、銃を撃ち刀弥がそれを避けながらシェナに近づくという構図だ。

そんな二人の様子を、リアとアレンはその傍で見学していた。

「アレンさんはどう思います？」

「そもそも、あれだけ動き回れる刀弥が俺には凄いんだがな……」

彼の視線の先、刀弥は前へと進みながら左へと走っている。アレンの目から見たら、その速度は十分速いと言えるだろう。

しかも、彼はただ出鱈目に走っているのではない。彼の青い瞳は、真っ直ぐシェナの動きを捉えていた。

彼女の両手の拳銃。それが刀弥を追うべく左へと動いている。刀弥はその銃口の射線上にのらないように動いているのだ。

射線にのらない以上、撃ったところで当たらないのはシェナも承知の上だ。けれども、その上で彼女は引き金を引き続ける。

理由はこの狭い洞窟だ。例え射線から逃げ続けたとしても、いずれは壁に追い込まれてしまう。つまり、相手を追い詰めることが出来るのだ。

また、当たるタイミングでしか撃たないのと違って、攻撃が近づいてくるのを相手は視認できるので精神的に追い詰める効果も期待ができる。

では、この状況から脱するにはどうすればいいのか？　答えは決まっている。

相手の連射の間を通り抜けるしかない。しかし、弾と弾との間隔が狭い上に、弾の速度が速いため飛び込めば当たってしまう。と、なると弾をどうにかして対処する必要がでてくる。

そこで刀弥は刀で弾く術を選んだ。けれども、今の刀弥では弾が撃たれてから反応するのは不可能。そうなると、弾が撃たれるタイミングを予測して事前に体を動かすしかない。

刀弥の両目は、シェナの引き金に集中している。銃弾が放たれるリズムから、刀を振るタイミングを測っているのだ。

そして刀弥は動き出す、と同時に刀を振り始める。

だが、刀弥が読んだタイミングよりも早いタイミングで引き金が引かれ、銃弾が放たれる。銃弾は刀弥の刀が触れるよりも先に刀弥の右肩に着弾。刀弥の身が後ろへと吹き飛ばされる。

「相手の攻撃のリズムに頼りすぎると、今みたいにずらされる可能性もあるわ。気を付けて」

「ぐっ……」

シェナの指摘に対して、刀弥は言葉を返す余裕もない。ただ黙って立ち上がるだけだ。

「やっぱり痛そうですね」

「まあ、非殺傷用の性質へ弾を変えたとはいえ、ダメージは確実にあるからな」

そう、シェナの銃弾が刀弥の身を貫かないのはアレンがシェナの拳銃にそういう設定をしたためだ。

どうやら昨日の見張りの時間の内に、設定を変更したらしい。アレン曰く、術式回路を交換するだけだから分解する必要はないとのことだ。

とはいえ、あれだけの速度で飛んでくる銃弾をその身に受ければ、かなりの痛みとダメージを食らうことになるはずだ。

刀弥が弾を受けたのは、これで三三回目。修行を開始してから、かなりの時間が経過している。おかげで彼の体のあちこちに、擦り傷や怪我ができている。

「そろそろ時間だし、さすがに止めたほうがいいな」

「そうですね」

アレンの意見にリアは頷くと、彼女は立ち上がり本日の修行を終了を伝えにいく。

シェナは素直に、刀弥は不承不承に修行の終了を了承すると、刀弥はリアに言われるまま腰を降ろして一休みに入り、他の三人は朝食の準備を始めるのだった。

「はい。刀弥。あ～ん」
刀弥の分の朝食をスプーンですくい、リアが刀弥の前に差し出す。
「いや、リア。別にそこまでしてくれなくても……」
嘆息混じりの声で、刀弥はそれを遠慮しようとする。
体を動かそうとすれば、痛みは走る。けれど、動けないというほどではない。そのため、リアがこんなことをする必要は全くと言っていいほどない。
だが、リアはやめる気はないようだ。先ほどの刀弥の声など聞こえていなかったかのように、スプーンを差し出したまま笑みを向けてくる。
仕方なしに口を開いてそれを受け入れる。
今日の朝食は、豆と何かの卵を焼いて切り刻んだものを混ぜたご飯のようなものだった。豆の苦味と卵の甘みが口の中に広がってくる。
飲み込んだのを見計らって、リアが新たな分を差し出してくる。
それも刀弥は食べる。
二人の様子をアレンは笑みを浮かべて、シェナはどこか羨ましそうに見つめていた。
彼らは何も言ってこない。そのことが尚更、刀弥には気恥ずかしかった。
「何も言わないんだな」
「何だ？　何か言って欲しかったのか？」
ポツリと漏らした刀弥の言葉をアレンが拾う。
「い、いや、そういう訳じゃないが……」
慌てた様子で刀弥はアレンから視線を逸らす。ちなみに、この間もリアの手による食事は続いている。刀弥は会話の隙間にそれを口にしているのだ。
「まあ、俺も記憶にあるからな……同情のほうが強いんだ……」
溜息をするアレン。それを聴いて、刀弥の視線は自然とシェナの

ほうへと向かう。
「……何？」
刀弥の視線に気が付いたシェナが、首を傾けてくる。
「いや、気にするな。それにしても今日は全然駄目だったな」
早朝の修行の内容を思い返しながら、刀弥は気落ちする。
結論から言えば、一度足りとも己の間合いまでシェナに近づくことはできなかった。銃弾の雨をくぐり抜けることができず、銃弾を受けて倒れるというパターンを繰り返していたのだ。
「まあ、最初だから仕方ないんじゃないか？」
「そうだね」
すかさずアレンとシェナがフォローする。
「少なくても、銃口からの弾の軌道の予測は完璧だった」
シェナの口からは、そんな評価が語れる。
「だけど、相手の攻撃の軌道が真っ直ぐとは限らない」
シェナの忠告に刀弥も同意する。
攻撃の軌道は魔具、魔術によっては直進軌道とは限らない。その場合、銃口や攻撃の向きから軌道を読むことはできなくなる。そうなると後は、相手の視線などから相手の狙いを推測する必要がでてくる訳だが……
「だけど、その辺りはもはや経験の領域じゃないか？」
「そうかもしれない」
アレンの意見にシェナは同意を示す。
確かに彼の言うとおり、その辺の判断をしようとしたらそれを識別するための情報が必要になってくる。単純な知識だけでは見抜くのが難しい以上、残るのは経験だ。
「結局、最後にものを言うのは積み重ねってことだな」
「だね」
「そうね」
「全くだな」
刀弥のその一言に一同は迷いなく賛同した。

「なら、毎日しっかり頑張らないとね」
「そうだな」
リアの激励に、刀弥はそんな応答を返す。
やがて、朝食が終わり後片付けとなる。
さすがにこの段階まで来ると、刀弥も十分動けるぐらいまで回復しており後片付けを手伝う。
そうして出発の準備が整うと、四人は次の目的地へ早く辿り着くべく、急ぎ出立するのであった。

二話終了

二章二話「不安と信じる答え」（６）（後書き）

ようやく二章二話が終了しました。
書きたかった内容は上手く表現できたか不安ではありますが、それでも出せる力は出したと思ってます。
次の三話の簡潔なプロットをさっさと書いて三話の物語をできるだけ早く書き始めたいと思っています。
ただ、いくつか文章が気になってたりするのでその前に二章系は文章の見直しや修正も少し検討してます。
どうかご了承ください。
０８／１８
文章表現の修正

二章三話「襲撃」（1）

「あ～。ようやく昼ご飯か」
テーブルに上半身を倒した刀弥が、情けない声をあげる。
彼の隣にはリア、向かいの席にはシェナとアレンが座っている。
四人がいるのは町の食堂だ。昼の少し前に四人は町に到着した。
その足で宿屋の部屋をとり、それから適当な食堂に入って今に至る。
彼らの他にもたくさんの人々が食堂を利用していた。よく見ると、その多くは同じような服装をしている。
白い布地の生地を羽織るように着て腰から下、左右の布を重ねることで足元を隠している。その腰には細長い布地が巻かれており、布地が左右に開くことを防いでいた。
刀弥から見れば、温泉とかにある浴衣のような格好だ。その格好は食堂の中だけでなく外でも見ることができる。
四人がいる町『セオン』は、近くの山が火山ということもあって温泉が沸くようで、そのため、町は温泉街となっている。
結果、この町はこれまでの町と違い観光客がかなり多い。この町に来たとき、四人はあまりの人の多さについ口を空けて呆然としてしまったほどだ。恐らくラーマスからの客もかなりいるのだろう。
「今日の修行もご苦労様」
倒れる刀弥に、リアが労いの言葉をかけてきた。
「全く、シェナとの修行は疲れるな」
身を起こしながら刀弥はそんな感想を漏らす。
「でも、俺が見た限り、この短期間でかなり進歩している気がするけど……」
アレンの台詞に同調するように、シェナが首を縦に振る。
「今日はほとんど、刀の間合いまで入られた。弾道の読みも確実に良くなってる」
「だけど、そこから先は駄目だっただろ？」

記憶を巡らす。確かに二人の言うとおり、刀の間合いまで近づくことはできた。しかし、そこから先、接近戦ですらシェナに刃を届かすことができなかった。

こちらの攻撃は避けられたり拳銃で受け止められ、逆に相手の反撃に対処できずに倒されてしまった。そんな感じだ。

「なら、次はそこを頑張ればいいんじゃん」

「次って言っても、後一日ぐらいだぞ」

励ますリアに刀弥はそう返す。その一言でリアはようやくそのことに気がついたようだ。

対遠距離用の修行を開始してから、三日が過ぎている。

その間に町を一つ通り過ぎ、ここが最後の町だ。ここで一晩休み翌日、出発すれば昼過ぎにはラーマスに到着するだろう。

そうなれば、目的地が違うシェナやアレンとは別れることになる。

「そっか……そういえばもうすぐなんだよね」

寂しそうな顔を浮かべるリア。

「お別れ、残念」

「何て言うか。寂しくなるな」

それを聞いて、アレンもシェナも同じような顔を浮かべる。

「そうだな。だからこそ、シェナ。明日は悔いのないように全力でやらせてもらうぞ」

けれども、刀弥だけはそんな宣告をシェナに突き付けて口の端を弛める。

そんな彼の態度に、アレンが押し殺した笑い声を漏らしてしまう。

「だとさ、シェナ」

「それは私も一緒」

彼のパートナーは、強気な声色でそう言い返してくる。

どうやら最後の修行はかなり楽しいものになりそうだ、と明日のことなのに今から刀弥は待ち遠しくなってくる。

「まあ、お互い動き回っている身だ、何かの拍子に会うって可能性もあるだろう」

「それは言えてるな」
刀弥の意見にアレンが同意する。
丁度そのとき、四人の注文した料理が届いた。
刀弥にはご飯と味噌汁に似たものに加えて焼き魚が、リアにはステーキとスープ、シェナとアレンにはスパゲッティのようなものが目の前に置かれる。
そうして運んできた人が去ったのに合わせて、四人は昼食を食べ始める。
「そういえば、刀弥が言っていたことだけど……実は案外よくある話なんだよな」
「そうなの？」
それを聞いたのはシェナ。途端、アレンの表情が険しくなる。
「何でお前が聞くんだ？」
「それは私が知らないから。当たり前じゃない」
何を馬鹿なことを聞いているのかという眼つきで、シェナが答える。
「何で一緒にいるお前が知らないんだよ！！」
「知らないからに決まってるわ」
これ以上続けると、間違いなくヒートアップする。
そう判断した刀弥は事態を収集させるため、すぐさま二人の会話に割り込むことにした。
「まあ、二人とも落ち着け。さすがに騒がしいと言ってもこれ以上は目立つぞ」
「……そうだな」
刀弥の静止に我に返ったアレンは、周囲の喧騒を聞きながら席に座り直す。
「それで、アレンは何が言いたかったんだ？」
「え？　ああ」
刀弥に促されアレンは先程、自分が言おうとしたことを思い出そうと一瞬目を上に向ける。

「刀弥が『何かの拍子に会う』って言ってたけど、確かに俺たちも経験があるなって、それも結構な頻度で」
「そうなんですか？」
これにはリアが、目をみはる。
「ああ、大体十度ぐらい記憶にあるな」
それに答えて、アレンはスパゲッティを口に運ぶ。
「思考が似てるのか、はたまた偶然なのか。旅先でばったりって感じで」
「なるほど～」
食事を続けながら、刀弥とリアはアレンの話に耳を傾けている。シェナは食事を終え、スペーサーから取り出した縫いぐるみで遊んでいた。アレンの話を聞く気はないようだ。
「そうなると、互いにそれまで何をしているのかとか、どこにいったのか、後は……」
そこまで言いかけてアレンが口を閉じてしまう。
刀弥とリアがどうしたのだろうと首を傾げて見つめていると、みるみるうちにアレンの顔が赤くなっていく。
「ま、まあそういう話をして同じ方向ならまた一緒に行ったり、違うならそこで別れたりって感じだな」
慌てたアレンは、何かを誤魔化すかのように少し早口で説明していく。
そこに不信感を感じるが、とりあえず二人はそこは尋ねないことにした。人間、誰しも聞いて欲しくないことがあるものだ。
「それで、これからどうするの？」
話が終わったのを見計らって、シェナが今後の予定を問い掛けてくる。
「折角だからいろいろ回ってみよ？」
「そうね。さっきも美味しそうなお店も見つけたし」
「シェナ。まだ食う気なのか……」
呆れてアレンが突っ込んでくるが、シェナは無視。

ともかく、昼食が終わった四人は町を回ることにした。

町は人々で賑わっていた。

町のあちこちで湯気が立ち上り、天井の岩が白で霞んでしまっている。

動き回っていると、ところどころに川のようなものがあった。そこから湯気がでていることから温泉なのだろう。

温泉の川とは面白いと思いながら、刀弥は小さな橋を渡る。橋の向こうでは、人々が靴を脱ぎ川辺から温泉の川に足を浸けているのが見えた。

「あ、私もやってみよ♪」

「じゃあ、私も」

女性陣二人が、その光景を見て橋の向こうへと走りだす。刀弥とアレンは二人を視界に収めつつ、ゆっくりとした足取りで彼女たちの後を追いかける。

川辺にやってきたリアとシェナはすぐさま靴と靴下を脱ぐと川辺に座り、その足を湯気が揺らめく川へと沈めた。

「はぁ～、暖か～い」

「ポカポカ」

それぞれそんな感想を述べるのを聞いて苦笑しつつ、刀弥たちは二人の背後に近づく。

「うっかり、川に落ちるなよ」

「そんな間抜けなことしないよ」

刀弥の忠告にリアが振り返って答える。

「刀弥も浸かってみたら？　気持ちいいよ」

「じゃあ、そうするか」

リアの隣に座り彼女たちと同じように靴と靴下を脱ぐ。そうして刀弥は、己の素足を川の中に浸ける。

「あ～、これは確かに気持ちいいな」
「でしょ？」
湯の温度は熱すぎず丁度いい。自然と力が抜けて、足がダラリと下がってしまう。
リアの向こう側を見てみると、アレンも同じようにシェナの横で足を浸けていた。
「ねえ、刀弥。温泉に浸かると疲れがとれるなんて話を聞くけど、どう？」
「足を浸けただけじゃ、わからないだろ」
彼女の問いに刀弥は苦笑で応える。
「それじゃあ、今晩が温泉に浸かった後、感想を聞かせてよ」
「そういえば、俺たちが泊まる宿屋にもあるんだっけ？」
宿屋の看板に書いてあった内容を思い出す。夜が楽しみだ。
「……うわぁ。刀弥、目が嬉しそう。そんなに温泉が楽しみなの？」
けれども、彼の顔を見てリアが非難するような視線を向けてくる。
「リア、何で怒ってるんだ？　温泉に入るだけだろ？」
訳がわからず、とりあえず刀弥はその理由を聞いてみることにする。
「え？　……もしかして刀弥、看板ちゃんと見てないの？」
彼の問い掛けにリアが目を丸くする。
どういうことだと、その疑問を口にしようとしたとき。
「刀弥、リア。そろそろ行こうか」
アレンの声に二人がそちらを見ると、アレンもシェナも既に上がって靴を履いた状態だった。
「「わかった」」
声を揃えて応えると、二人は川から足を抜いて靴下、靴と履いていく。
そして二人がそれらを終えると、シェナの先導のもと四人は歩き始める。
次に足を止めたのはある屋台の前だった。

木と思わしき素材でできた屋台の向こう、店の人が丸の穴の空いた鉄板の上で何かを焼いている。
一瞬、たこ焼きを連想した刀弥だが、看板にはこう書かれていた。
『肉焼き』と……
「何の肉だ？」
最初に浮かんだ感想がそれだった。
「あそこにいる牛です」
店の人が指さす向こう、確かに牛がいる。こちらの視線に気がついたのか、牛は顔を上げて刀弥を見返してくる。
「あれが中身なのか」
そう呟きながら、今も焼かれている球体の食べ物を刀弥は見下ろしていた。
「いかがいたしますか？」
営業スマイルで訊ねてくる店員。
折角なので刀弥は食べてみることにした。
「じゃあ、六つで」
「私も同じ」
刀弥とシェナがそれぞれ注文する。
「かしこまりました。少々お待ち下さい」
そうして少し待った後、肉焼きはできた。見た目はたこ焼きのような球体で、その上にソースとゴマのようなもののトッピングが施されている。
それらが六つ入ったパックのようなものを受け取り、四人は再び歩き始める。
「ほら」
「ありがとう」
六つのうちの一つをリアに差し出すと、リアは礼を言って受け取る。
そうして二人は肉焼きを口の中に入れる。
辛めのソースとトッピングが口の中を刺激し、噛み砕いた肉から

漏れる油がそれらと混ざる。その味は甘辛いと表現すべきだろう。
「ん～」
隣では、リアが目を瞑ってそんなリアクションを見せている。かなり美味しかったようだ。
「もう一個♪」
食べ終えた瞬間、そんなことを言って刀弥が持っているパックから、さらに一個摘んで口へと運ぶ。元々、三個、三個で分けるつもりだったので刀弥は何も言わない。
「一個上げたからもう駄目」
「別にいいだろ。もう一個ぐらい」
前のほうでは、シェナとアレンが言い争っている。買ったのがシェナである以上、彼女がルールだ。干渉する気はない。
次に彼らが目をつけたのは、ある遊具施設だった。
施設はスライド式のドアのようで、それが全開で開け放たれている。そのため、多少離れていても施設の中の様子を伺うことができた。
中には九つのテーブルがあった。縦に三つ横に三つと並べられたテーブルの両端にはそれぞれ人が立っている。
彼らの左右それぞれの手には扇のようなラケットが握られており、彼らの間を卓球ボールくらいの大きさのボールが三つ両者の間を行き交っていた。気のせいかボールが左右からテーブルの外に出ようとすると、まるで壁にでもぶつかったように跳ね返りテーブル内に戻っている。両者はそのボールを左右のラケットを使って打ち返していた。
「おもしろそう……」
「私たちもやってみようか」
白熱するそれらを眺めて、シェナとリアは興味を持ったようだ。
彼女たちにせがまれて四人は中に入ると、丁度空いたところを使うことにしたのだった。

ルールは三つのボールのうち、一つでも相手の後ろにある線を通過させれば一点。テーブルの左右には壁が設定されており、ぶつかればボールは跳ね返る。ボールは左右に持っているラケットで打ち返すというシンプルなルールだった。

テーブルは中央に線が引かれているだけの簡単なもの。全体の色はグリーン。

最初に始めたのは、やる気満々のリアとシェナ。ただ展開はシェナの一方的なものだった。

基本的に三つのボールをそれぞれ別の軌道で放つことで、結果、リアが全てに対応しきれず一つを返し漏らすというくり返し。結局、リアは一点も取れずに敗北した。

次にやったのは刀弥とアレン。これは純粋に身体能力差が出て刀弥の圧勝。

そして、その勢いのまま刀弥とシェナの対戦。

この対戦、序盤は刀弥が完全に押していた。二つのボールでシェナを誘導して三つ目のボールを届かないところに放つ、そういう戦い方だ。

この戦術にシェナは苦戦。中盤で何とか対応策と共に刀弥の戦術を取得し追い上げようとするが、それを見越していた刀弥の攻撃封じと心理戦によって、結局十対六で刀弥の勝利で終わったのだった。

「刀弥。対応が早すぎ」

ゲームが終わった後、どこか恨めしそうにシェナがそんな言葉を刀弥にぶつけてくる。

「なんていうか、一人だけゲームのコツをわかってた感じだったね」

「確かに」

リアの言葉にアレンが相槌を打つ。

「まあ、リアとシェナの対戦を見てたから、それで大体の勝手はわ

かったからな」
　基本的に二つのボールで相手を崩し、三つ目のボールで決める。
それがこのゲームの主な戦い方だ。
「でも、コツを掴むのが早すぎだったと思うよ。さっきの対戦、シェナさんが完全に置いてけぼりを食らってた感じだったし」
「刀弥のプレーを見て、どうにか対応できるようになった途端、別の戦い方をされた。ちょっと悔しかった」
　リアの言葉に頷くように、シェナが先程の対戦の感想をこぼす。
少し頬を膨らませているところを見ると、本当に悔しかったようだ。
「まあ、そこは戦略だからな」
「つまり、予定通りだった……」
　ジト目でシェナが睨みつけてくる。どうやら刀弥の言葉を聞いて、余計に腹がたったようだ。
「そう言われてもな。それが戦いだしな」
　目を逸らしながら頬をかく刀弥。
「……刀弥、明日の修行楽しみにしておいて」
「シェナ、修行に私怨を混ぜるな」
　恨みがましく告げるシェナに、すかさずアレンが後ろからはたく。
小気味いい音が施設内に響いた。
「アレン、痛い」
「そんなこと言ってないで、ほらいくぞ」
　頭を押さえるシェナ。その腕をアレンがとると、そのまま引っ張るように施設の外へとつれ出していく。
　刀弥とリアは笑みを交わしながら、その後を追うのだった。

二章三話「襲撃」（1）（後書き）

お待たせしました。
ようやく二章三話を投稿することができました。
一応、見直しはやってるのですが、見落としている可能性も否定しきれません。誤字脱字など気づいたことがあればお教えください。

二章三話「襲撃」（2）

四人が施設の外に出た直後だった。
突然、轟音が町中に響き渡る。
その耳を壊すような凄まじい音に窓やドアが揺れ、それとほぼ同時、町を覆う壁の一角が砂煙を上げて崩れだしていく。
「一体、何？」
「どうなってるんだ？」
リアやアレンも含め、町に人たち皆が呆然とその光景を眺めていた。
壁の崩落は大なり小なりの岩々を落とし、それがさらに周囲の壁も巻き込んでいく。崩落の連鎖だ。地面に落ちた岩は大きな音をたてて次々と砕け、割れていく。
その凄まじい音に、思わず現場付近にいた者たちは耳を塞いでしまう。
やがて、音は小さくなっていき最終的には崩落も収まる。
耳を塞いでいた者たちは恐る恐るといった感じで耳から手を離すと、未だ砂煙渦巻く崩落現場へと視線を向ける。それは他の人々も同様だ。
中には勇敢にも、ゆっくりとその砂煙に近づいていく者たちまでいる。
彼らは見えぬ砂煙の向こうをよく見ようと、目を凝らす。
と、そのとき、彼らのうち一人が何かの影を捉えた。
「何かいるぞ！！」
その叫びに、他の者たちは近づくのをやめて砂煙が止むのを待つ。
そして、砂煙が収まっていく。それと同時に砂煙に隠れていた彼らの姿を人々は見た。
それはサソリような生き物だった。黒い体と左右にある合計六つの足に二つのハサミ。けれども、尾はない。故にサソリのような生

き物だ。
そんな生き物が、ゾロゾロと壁の割れ目から姿を現す。
「エアゲイルだー！！」
その声を皮切りに、近づいていた人たちが一斉に逃げ始める。遠目でそれを見ていた人たちは、それを見て背を向けて走り出し、それを見てさらに遠くにいた人たちが走りだす。
混乱が混乱を呼び、町中がパニックに陥っていく。人々は我が身可愛さにただ必死に走り、他のことなど目もくれない。途中、誰かとぶつかろうが踏もうがお構いなしだ。
そんな状況の中、刀弥たちは細い路地裏に集まっていた。
通りには人々が溢れており、あのまま通りにいては人の河に流されてはぐれてしまうと判断したからだ。
「で、どうする？」
アレンの問い掛けに刀弥とリアが顔を見合わせる。
「どうするって言われてもな」
「だよね」
現状の選択肢としては逃げる、戦うの二つがある。一番安全なのは逃げることだが、現状どう考えても隣町へ続く洞窟は混んでいるだろう。また、洞窟の外へ逃げるのも手だが外の環境が厳しい以上寿命を伸ばすという意味しかない。つまり、逃げるのは難しい。
「まあ、逃げれないなら戦うしかない」
「だね」
「まあ、そうだよな」
二人の意見にアレンが諦めたように同意する。
「ところでシェナさんは？」
「そういえば、いないな」
リアの問いに、刀弥はようやく彼女の姿がいないことに気が付く。
ここに集まったときにはシェナの姿は確かにあった。それがいないということは……
「あの馬鹿……」

悪態を吐いてアレンが通りに飛び出す。刀弥もリアもその後に続く。

通りは今も人の姿があるが、先程と比べると遥かにマシだ。その間を縫うように彼らは逆走する。

「……いた」

刀弥の見つめる先、桜色の尻尾が確かにある。尻尾は人々の隙間は的確に見極め効率良く進んでいく。そのため、両者の距離は徐々にだが離されていく。

「まずい。離されてるぞ」

「くそ！！」

アレンの叫びが虚しく響く。何とかして追いつきたいが、その思いとは裏腹に両者の距離は遠くなっていき……

そして遂に、三人はシェナの姿を見失った。

シェナは逃げる人々の流れに逆らうように走っていた。

彼女の中にある思いはただ一つ。助けたいという思いだ。

銃の腕を磨いている内に、彼女はいろいろな人を助けていった。

最初はなんとなしだったのだが、そのうち感謝されるのが嬉しくなり、もっと皆の力になりたいと考えるようになった。それは旅に出てからも変わらない。

アレンが大事なのは当たり前だが、場合によっては誰かを助けるという思いのほうが勝つときもある。今がそれだ。

路地裏に集まろうとしたとき、シェナは偶然それを見てしまった。

逃げ惑う人々の中、小さな足で必死に逃げる幼い兄妹を……

あの速度では、すぐにエアゲイルたちに追いつかれてしまう。だからシェナは、アレンたちの話を聞かずにそのまま通りに飛び出してしまった。

そしてシェナは人の波から抜けだした。

目的の二人は、すぐに見つけた。その傍にエアゲイルがいるのも。
迷わずシェナは、拳銃を引き抜きその引き金を引く。
銃口から透明な弾丸が飛び出し、エアゲイルの頭部を貫いた。
崩れ落ちるエアゲイル。その間にシェナは、子供たちの盾になるかのように前にでる。
「行って」
ただ短いその一言に兄妹は頷き、急いでこの場から離れようと走り始める。
逃げる獲物をエアゲイルたちは追おうとするが、シェナの銃弾がそれを阻む。
仕方なく兄妹を諦め、獲物をシェナへと切り替えるエアゲイルたち。
彼らは左右のハサミを開き、それをシェナへと向ける。
その行動にシェナは疑問を持つが、次の瞬間その理由が判明する。
何と、エアゲイルたちのハサミから射撃が放たれたからだ。
咄嗟に飛んでその攻撃を避けると、反撃に射撃を撃ち返す。見えた弾丸はシェナの拳銃と同じ透明。どうやら空気を圧縮して、弾丸として放つ器官を彼らは持っているらしい。
とにかくエアゲイルたちの数を減らそうと、シェナは左右の拳銃を撃ち続ける。
そうしながら彼女は敵の射撃をかいくぐり、エアゲイルたちの中へと入り込む。
周囲に敵がいるというのは中々の恐怖だが、メリットもある。普通、この状況では同士討ちを恐れた相手が攻撃の頻度を落とすためだ。
エアゲイルたちもそれを判断できるだけの知能を持っていたようで、射撃の頻度が目に見えて減少した。
それを好機と捉え、彼女は一気に反撃に映る。
前、後ろ、右、左、両手の拳銃を四方八方に動かしながら、シェナはひたすらに引き金を引き続ける。ときに腕を振り回し、ときに

体を傾け、ときに踊るように身を回しながら黙々と彼女は周囲のエアゲイルたちを撃ち倒していく。
そして銃音が止んだとき、その場に立っていたのはシェナただ一人。エアゲイルたちは彼女の周囲で皆静かに横たわるだけだった。
ふと、先程の兄妹が去ったほうを凝視するが、そこに彼らの姿はない。無事に逃げ果せたのならいいのだけどと、そんなことを考えてしまう。
とりあえずその心配を頭の片隅に置いて、シェナは後ろへと振り返る。
すると、そこには新たなエアゲイルたちの姿があった。
拳銃を構えるシェナ。
エアゲイルたちは、銃口と言うべきそのハサミを彼女に向け……
突然、飛んできた風の矢に貫かれた。
それが『エアアロー』と呼ばれる魔術だということは、シェナも知っている。
問題はこれを誰が放ったのかということだが、おおよその見当はついている。
「シェナさん。大丈夫ですか？」
その予想通り、彼女の知り合いが駆けつけてくれたのだ。
「大丈夫。リア、助けてくれてありがとう」
リアに礼を言った後、シェナはその隣に立つアレンへと視線を動かす。
「全くお前は……」
「ごめん」
呆れを含んだその声に対して、シェナはただ一言そう謝る。
「お前が助けた兄妹なら、そのまま逃げていったから安心していいぞ」
それを聴いて、シェナは自然と安堵の表情を浮かべる。
と、そのとき人々の叫び声があちこちで聞こえてきた。どうやら他の場所でも人々が襲われているようだ。

「どうする？」
刀弥の問いにリアが答える。
「一旦、別れて行動しかないかな。じゃないと助けきれないし」
「本当はあまり良い提案じゃないんだけどな」
アレンの意見に刀弥は心の中で頷く。
確かに彼の言うとおり、分散はかなりリスクが高い。同時に複数の箇所に向かえる代わりに、たった一人で敵集団と戦わなければいけないからだ。
しかし、叫び声は四箇所以上から聞こえている。固まって動いていては時間が掛かってしまう。
「時間がないな。分散でやろう」
「わかった。でも無茶はするなよ」
「うん」
「気を付けて」
そう言葉を交わし四人は別々の場所に向かうのだった。

二章三話「襲撃」（3）

刀弥は走りながら周囲を見渡す。

エアゲイルたちの姿はいくつか見えるが、今は相手している時間が惜しい。そのまま突き抜ける。

叫びの主はすぐに見つかった。エアゲイルたちがその人物に向けて、攻撃を放っていたからだ。

その人物は男性で、エアゲイルたちの射撃をやり過ごすために建物の影に隠れていた。時折、少し頭を出してはエアゲイルたちの様子を伺っている。

刀弥の位置はエアゲイルたちの真後ろ。迷わず彼は接近する。

すれ違いざまにエアゲイルたちに一太刀あびせながら、彼は群れの真ん中に飛び込む。先程のシェナと同じ狙いだ。

そうして相手の攻撃が少なくなったのを確認すると、そのまま周囲のエアゲイルたちを斬り刻んでいく。

基本は相手に狙いをつけさせないように動き回り、発射口であるハサミ群をよく見て、射線上にのりそうになったらすぐさま移動。

攻撃は一撃離脱。可能な限り殺せる部分を狙い、無理なら相手の攻撃や移動を阻害できるところを狙う。極めて堅実な戦い方だ。

さらに反時計回りにエアゲイルたちを狩っていくことで、撃破の偏りをなくし出来る限り同士討ちの可能性を残しておく。

全てのハサミの射線を見極めれるかどうか多少不安もあったが、何とかこなせている。

シェナとの修行のおかげといったところか。

最初のほうは銃口を注視して何とか射線を読んでいた状態だったが、今では感覚で感じれるところまで上達することができた。それでもシェナ曰く『読みが粗い』とのことだが。

ともかく、その感覚が彼らの射線を教えてくれる。

胴を斬る、動く、足ごと斬り落とす、後ろへと飛ぶ、回りこんで

刺す、繰り返される攻撃と移動。
時折、相手からの攻撃も飛んでくるが、射線上にいない以上当たることはない。稀に当たりそうな攻撃もあるが、それ事態は事前に予測しその部分に刀を動かすことで防いでいる。
移動方向をいきなり反転させる。射線に身が重なるが、それも一瞬のこと。相手が撃とうとしたときには、既に射線上にその姿はない。
そんなことをしながら刀弥は相手に迫ると、足と足の隙間から胴を斬り裂く。
そしてバックステップで下がって移動を再開。瞬歩の連続移動でジグザグに進んで、別のエアゲイルの正面まで接近する。
刀弥に気が付いたエアゲイルがハサミを振ろうとするが、刀弥の左上から右下への振り下ろしのほうが早かった。顔を斬られ崩れ落ちるエアゲイル。
刀弥はその勢いを利用して旋回、離脱する。
群れの中にいるため、周囲はエアゲイルばかり。気を抜けばその瞬間、エアゲイルたちの餌食となってしまう。
体中に走る緊張感。けれども、それが心地よくもある。
久々の感覚だと刀弥は思う。少し前まではそれを感じている余裕もなかった。それほど自分自身が悩んでいたということだろう。
そして最後のエアゲイルを倒すと、刀弥は周囲を見渡した。
他にエアゲイルたちの姿は、どこにも見当たらない。
どうやらこの一帯は全て片付け終えたようだ。
「大丈夫か？」
溜息を一つ吐いた後、刀弥は男のほうへと振り返る。
「あ、ああ」
男は周囲が安全になったことを確認すると、恐る恐るといった様子で建物の影からでてきた。そして視線を巡らせながら急いで刀弥の傍まで走り寄ってくる。
「助かった。もう駄目かと思ってたところだったんだ」

「一人か？」
「もう一人いたんだが……」
徐々に尻すぼみになっていく男の返答。
その様子から、刀弥はもう一人の末路を悟った。
その人物を救えなかったことに刀弥は無力感を感じてしまうが、そんなことより現在に意識を向けることのほうが大事だ。
「とにかく早く逃げるんだ」
「あんたは？」
男の問いに刀弥は、きっぱりとこう答える。
「他にあんたみたいな連中がいないか。探してくる」
「正気か！？　向こうは結構な数がいるんだぞ」
信じられないという顔で男が驚く。
男の驚きは当然だろう。これだけの数に襲われている状況で、他者を助けに行くなんてこと普通できる訳がない。
「その正気じゃない判断のおかげで、あんたは助かったんだけどな」
男の驚きに対して、刀弥はそんな台詞を返す。
その台詞に男は唸ることしかできない。
「それじゃあ、気を付けろよ」
それを見計らって、刀弥は走りだす。男の呼び止める声が聴こえたが、聞こえない振りをしてそのまま刀弥は走り去る。
走っている最中、いくつもの戦いの音を耳に捉えることができた。見知っている音だけでなく聞きなれない音もそこにある。
どうやら、自分たち以外にも同じようなことをしている人たちがいるらしい。
その事実に若干、頬が緩んでしまうがすぐに気を引き締め直す。
と、そこへエアゲイルに取り囲まれた女性剣士の姿が目に入った。
どうやら少し女性剣士が不利のようだ。
刀を構え直した刀弥は、彼女を助けるため己の走る速度を速めることにするのだった。

火球が爆ぜる。爆風が外殻を砕き、熱がその身を焼く。
そうしてできた六つのエアゲイルの死体。
だが、リアはそれに目もくれない。すぐさま新たな魔術式を構築する。
見据える先にいるのは、別のエアゲイルたち。
放たれる空気の弾丸を彼女は己の魔術で防ぐ。
『ウォールストーム』
突然発生した竜巻の壁が、相手の風弾をかき消す。
竜巻の中にいるリアはこの間に別の魔術式を構築、竜巻の解除と共に発動させる。
『ボルトハンマー』
雷の鉄槌を持って、彼女は先のエアゲイルたちを叩き潰す。
光と音が咲き乱れ全てを飲み込む。
やがて、雷が止むとリアは周囲を見回した。これで周囲の安全を確保したはずだ。
「……うん、大丈夫かな。もう出てきてもいいよ」
そうして安全を確かめると、彼女は建物の影に向かって声をかける。
すると、建物の影から小さな四人の子供たちが姿を見せた。
年齢はバラバラのようだが、皆仲良く手を繋いでいる。
「それじゃあ、今の内に安全な場所に移動しようか」
微笑みながら語りかけるリア。それに対して、子供たちが一斉に頷く。
リアが先導し、その後ろを子供たちが付いて行く形で五人は進む。
辺りにエアゲイルの姿はない。進むなら今がチャンスだ。
「走るよ」
リアの言葉に従い、五人は一斉に駆け出す。
遠くのほうで、いくつかの戦闘音が聞こえる。誰かが戦っている

のだろう。
ふいに刀弥のことが頭に浮かぶ。彼は大丈夫だろうか。
シェナとの訓練のおかげで、対遠距離戦は十分積んでいるので心配はないはずだが、それでも不安が込み上げてくる。
頼りになるパートナーであるのは間違いないが、必要であれば無茶をするところもある。その点が不安の原因だ。特にこういう状況であれば、尚更だ。
そんなことを考えながら、リアは子供たちを引き連れる。
背後から人のものではない足音が複数聞こえてきたのは、そんなときだった。
「次の建物の影に隠れて」
リアの指示に従い子供たちは建物の影に隠れ、彼女は魔術式を構築しながら背後へ振り返る。
ほぼ同時、彼女のもとに空気の弾丸が飛んできた。だが、それは予想済み。
『アースランス』
地より大地の槍群が出現し、その攻撃を迎撃。そのまま槍群は次々と姿を現しながら、追いかけてきたエアゲイルたちを刺し貫いた。
けれど、リアはまだ気を抜かない。足音はまだ止んでいないからだ。
「!?　そこ!!」
音を頼りにエアアローを飛ばし、建物の影から飛び出してきたエアゲイルたちを串刺しにする。
耳を澄ましてみると、足音はもう聞こえない。どうやら、辺りにはもういないようだ。
そのことにリアは安堵を漏らすと、再び子供たちを呼んで急いで彼らを安全な場所まで連れて行くことにするのだった。

「全く！！」
アレンは引き金を引きながら、悪態を漏らしていた。
彼の攻撃を受け、エアゲイルが一体倒れる。
周囲には誰もおらず、漏らす声も小さい。そのため誰にも聴かれることはない。もっとも、だからこそ彼はそんな独り言を漏らしていたのだが……
「あいつはいつもいつも……」
建物の影に飛び込むようにして彼は隠れる。直後、彼のいた場所を無色の弾群が通り過ぎていった。
すぐさま、銃口を向けて反撃。いくつもの爆発が起こり三体のエアゲイルたちが沈黙する。
「こっちが、どれだけ大変な目にあってるのかわかってるのか！！」
さらに懐から爆破の魔具を取り出して、投げつける。
目標は建物の向こう側。エアゲイルの足音がそこから聞こえたからだ。
爆発音が響き、それと同時にアレンは駆け出す。
T字路に飛び出した瞬間、アレンは右側の通路にエアゲイルたちの姿を見つける。ハサミは既にこちらを向いている状態だ。
「やばっ！？」
迷わず、正面の家のドアを体当たりで破って攻撃を回避。
攻撃が止んだのを確認すると、即座に爆破の魔具をドアから放り投げる。
爆破の魔具は壁にぶつかって跳ね返り、相手の傍に落ちて直後、爆発。耳をつんざく音共に風が巻き起こる。
爆発が収まったあと、アレンはゆっくりと顔を入り口から出して外の様子を伺う。
視線の先、爆発に飲まれたエアゲイルたちの死体を認めると、彼は周囲を警戒しながら家から出てくる。
遠くから戦いの音が聞こえている。誰かが戦っているのだろう。
最初はシェナや刀弥たちかと思ったが、音に聞き覚えはない。ど

うやら誰かを救おうとする物好きは、自分たちだけではなかったらしい。

「これで多少は楽になるな」

そんな感想がこぼれ、多少気が楽になる。

シェナのほうは大丈夫だろう。心配していないと言えば嘘になるが、彼女の実力を疑ったことはない。

それよりも自分の心配だ。彼女と違って自分はそれほど強くない。下手すればその瞬間、死ぬ可能性だってあり得る。

アレンとしても死ぬつもりはない。死ねばシェナが哀しむからだ。そのためシェナほどではないが、戦い方は学んできている。

アレンが心掛けている戦い方は、まず自分の身を安全な場所に置くということだ。

四人の中で、一番弱いのは自分だとアレンは自負している。

シェナのように広い視野を持っている訳ではない。刀弥のように動き回れる訳でもない。リアのように多数の魔術を扱いこなせている訳でもない。

そんなアレンが戦いの場で足手まといにならないようになるためには、相手に守ってもらう必要がない状態になる必要がある。それ故の戦い方だ。

安全な場所にいるなら、味方は彼を守る必要がなく自由に動き回れる。

そうやって彼はこれまで戦ってきた。

「……また来たか」

少し考え事に気をとられていたせいだろう。

気が付けば、またエアゲイルたちの足音がこちらに近づいてきている。

「さて、どうしたものか……」

アレンは少し考え込む。

彼がこの辺りで戦っていたのには理由がある。

この辺りにやって来たのは叫び声を聞いたからだ。行ってみると、

そこにはエアゲイルたちから逃げている一団があった。
彼らを助けるために、アレンはエアゲイルたちの注意を自分へと向けさせることにした。
試みは成功し、ほとんどのエアゲイルたちを引きつけることができた。恐らくその一団も逃げ延びているはずだ。
そのため、新たに来るエアゲイルたちと戦う理由はない。だが……
「出入口に近いんだよな」
そう、アレンが今いる場所は出入口の洞窟に近い。時間を考えれば、出入口はまだ人で混み合っているはずだ。
ここでエアゲイルたちを通してしまえば、そんな人々のところに彼らが殺到することになってしまう。さすがにそれはまずいだろうとアレンは考える。
「仕方ない」
そう呟いて彼は懐から新たな爆破の魔具を取り出すと、彼らを奇襲するために近くの建物の影に隠れることにするのだった。

二章三話「襲撃」（4）

風の如く少女が舞い、桜色の髪がその軌跡を描く。
風の礫が、敵を貫き永久の眠りを与える。
そうやってシェナは町中を駆け巡りながら、エアゲイルたちを倒していた。
右、左、前。彼女が進む度にエアゲイルたちの死体が作られていく。
無論、相手も反撃してくるが、それらの攻撃がシェナを捉えることはない。逆に彼女の攻撃は確実に彼らを捉えていた。これでは、どれだけ相手に数がいても意味を成さない。
そうやって、彼女が順調にエアゲイルたちを蹂躙していたときだった。
建物の角から飛び出し右へ視線を向けた瞬間、そいつはいた。
人一人を楽々挟めそうな、巨大な二つのハサミ。子供の体なら丸呑みできそうな大きな口。そして巨大な体。
巨大なエアゲイルの姿がそこにはあった。
鋭い視線を感じ、反射的にシャナは来た道のほうへと跳躍。
直後、爆発としか言えないような大きな音が、彼女の背後から響いてきた。
前転の要領で転がりながら、シェナは後ろへと振り返る。
すると、先程まで彼女が立った場所に巨大な穴ができていた。まず間違いなく、先のエアゲイルが撃ったものだろう。
危険だとシェナの感が告げている。このエアゲイルを放っておけば、間違いなく他の人間に被害を及ぼすだろう。
だからこそ、そうなる前に自分の手で撃破すべきだと彼女は判断を下す。
丁度、相手もシェナをターゲットに選んだらしく、ゆっくりとだが重い足音がこちらに近づいてきているのが聞こえていた。

狙うは相手の頭が建物の角から見えた瞬間だ。その瞬間、頭部に接近して至近距離から左右の六連同時を見舞う。

遠慮はいらない。ただ全力を持って相手を倒す。

そして、敵の頭が視界に映った瞬間、シェナは駆け出した。

迷いはいらない。怯える必要もない。ただ一秒でも早く辿り着く。

それができれば全ての問題は解決するのだから。

そうして彼女は巨大なエアゲイルの至近距離にまで近づいた。

手を伸ばせば、外殻に触れれるほどの距離だ。

迷わず彼女は、両の拳銃をその外殻に押し付けて引き金を引く。

一瞬の内に左右の拳銃から六発の銃弾が放たれ、その外殻を貫く――ことはなかった。

貫くことができなかった銃弾は、力の逃げ場を得ることができず銃口内で暴れまわり……結果、銀の拳銃はシェナの手から離れ宙を舞ってしまう。

二つの拳銃はクルクルと回りながら、放物線を描いて飛んでいる。

銀のボディが太陽変わりの光を反射し煌めく。

予想外の事態に、シェナは反射的に拳銃の軌跡を目で追ってしまっていた。

数秒にも満たないよそ見、それが隙となった。

次の瞬間、エアゲイルの左のハサミがシェナに迫る。

即座にバックステップで反応するが、完全には避けきれずハサミの外側で腹を殴打。その威力で身が吹き飛ばされる。

地面を何度かバウンドして、ようやく動きが止まる。

息が苦しい。腹に痛い。だが、シェナはそんな体を無理矢理起こして飛ぶ。そうしないと危険だからだ。

その予測通り、彼女がいた場所で爆発が巻き起こる。

どうやらあの巨大なエアゲイルが放つ射撃は、かなり威力が高いようだ。直撃を一発でももらえば、ただでは済まないだろう。

巨大なエアゲイルは、そのまま彼女を始末しようと何度も攻撃を撃ってくる。シェナはただ避けることしかできない。

現在、彼女がとれる手段は二つ。

一つは、手放してしまった拳銃を取りに行くこと。どこに飛んでいったかは目で追っていたので、場所はわかっている。設計上、あの程度で壊れるほど柔な武器でもない。

問題はこの攻撃を対処して、拳銃を取りに行かなければならないことだ。不幸というべきか、拳銃は巨大なエアゲイルのハサミで狙える範囲に落ちていた。拾おうと足を止めればその瞬間、奴に狙われてしまうだろう。

もう一つはテスト運用中の銃を使うことだ。何度か既にテストはしているので、基本的な性能は大まかにだが把握している。あの威力ならあの固い外殻も楽々破壊することができるだろう。

こちらの問題は、銃の安定性とスペーサーから展開するために多少時間が必要なことだ。後者は建物の影に隠れて展開すればいいだけの話だが、前者はかなりの問題だ。

場合によっては不具合を起こし、さらにシェナを追い詰めることに繋がるからだ。

危険を承知で銃を取りに行くか、アレンの作った銃を信頼するか。どちらにするか。

シェナは即座に決断した。

建物の影へと、彼女は急いで走る。彼女の選択は後者だった。というよりも、彼女にとってその選択肢が当然だった。

これが他の人物が制作した銃であれば違っただろうが、この銃を作ったのはアレンだ。ならば不安に思う必要などない。

本人が聞けば呆れるだろうが、知った事ではない。

信頼するパートナーが一生懸命に作った物だ。自分が信頼しないでどうする。そんな思いが彼女の中にはある。

建物に影に飛び込むと、そこから彼女はさらに奥へと入り込む。そして二度程曲がり角を曲がって安全を確認すると、彼女はスペーサーからその銃を取り出すことにした。

巨大な銃がゆっくりとその身を彼女の前に晒していく。

白と金のカラーリングが施された巨大な銃身。その大きさから、銃というよりも砲という言葉のほうがしっくりくる。アレンや刀弥はこれのことを『砲銃』と呼んでいた。

シェナはその砲銃のグリップを、右手でしっかりと握る。拳銃と違いずっしりと来る重量感。拳銃のように振り回すのは中々難しいが、撃つだけなら何ら問題はない。グリップもしっかり手に馴染んでいる。

大事なパートナーが自分のために作ってくれた物。その事実を思い出す度にシェナの心の中で嬉しさが込み上げてくるが、とりあえず今はそれを抑えこむ。

ともかく相手の位置を探るため、彼女は耳を澄ませる。

巨大なエアゲイルの足音は、右後ろから右へと真っ直ぐ移動していた。丁度、右側に通りに出る道もある。

ならば、やることは一つ。先程と同じように相手が頭部を見せた瞬間、この砲銃を放つだけだ。この砲銃なら、この距離からでも十分仕留めれるだけの威力もある。近づく必要すらない。

故にシェナは構える。構えは右腕を前にした半身の姿勢。バランスを取るために少し足を広げておく。

音は徐々に大きくなっている。確実に近づいてきている証拠だ。

足音が一歩また一歩と近づくにつれ、シェナの感覚がどんどん鋭敏になっていく。

敵の到達まで三呼吸。

相手は警戒しているようだ。足音のリズムが若干固い。警戒で力が入っていると考えるべきだろう。

敵の到達まで二呼吸。

警戒しているせいか、相手は左右に顔を動かしているらしい。足

音の位置が、微妙に左右に動いている。

敵の到達まで一呼吸。

どうやらハサミは若干、引き気味に上げられていると思われる。一番前の足音が、他と比べて若干弱い。重心が少し後ろに下がっている証拠だ。至近距離で見つけた場合、ハサミを突くように降ろすつもりなのだろう。

そして到達。

遂に巨大なエアゲイルの頭がシェナの視界に現れる。そのタイミングでシェナは躊躇うことなく引き金を引いた。

放たれたのは嵐だった。雷が先行し、その後を風が雷の軌跡を包みこむように追いかける。それらが通り抜けた後に残るのは、多数のスパークと暴風のみ。まさに嵐の砲撃と言えるだろう。

嵐の砲撃が向かう先には、巨大なエアゲイルの頭部がある。狙いは正確だ。

そのまま嵐の砲撃は巨大なエアゲイルの頭部と衝突し……

そのまま、その頭部を貫いた。

破壊は頭部だけでは済まなかった。吹き荒れる暴風が、嵐によって生み出された穴を瞬く間に広げていく。

嵐の砲撃は、巨大なエアゲイルの頭部を抜けた後も向こう側にあった建物を更に貫通。己の気が済むまで、ただひたすら真っ直ぐに飛んでいったのであった。

頭部を失ったエアゲイルの体は力を失い、ただ崩れ落ちていくのみ。

そんな巨大なエアゲイルの死体をシェナは一瞥すると、すぐに拳

銃の落ちている場所へと向かう。
拳銃を拾い念のため試し撃ちをしてみる。特に問題なく拳銃は動作した。
そのことに安堵しつつ、シェナは砲銃をスペーサーの中へと戻していく。
そのとき、遠くほうで大きな音がいくつも響いた。
その音は、シェナも聞き覚えのあるものだった。故にシェナはすぐに事態を把握する。
「もう一体!?」
そう、音の正体は巨大なエアゲイルの放つ射撃音。
その事実にシェナは驚愕し、急いで走りだす。
射撃が放たれているということは、誰かがあれと戦っているということだ。
間に合ってと心の中で祈りながら、彼女は全速力で音の聴こえたほうへと急ぐのだった。

二章三話「襲撃」（5）

傍にあった地面が、爆ぜるように砂煙を巻き起こす。
だが、刀弥が視線を動かすことはない。よそ見をすればその途端に死んでしまうような気がしたからだ。
彼の視線の先には巨大なエアゲイルの姿がある。左右のハサミは刀弥を狙うべく攻撃を放ちながらも、常に彼を追いかけている。
ハサミの射線から逃れるため、刀弥は瞬歩で右へ左へと動き回りながら相手に接近しようとしていた。
相手の射撃の威力は高く、まともに食らえばその瞬間終わりとなってしまう。
防御はできない。一度でも防御に入れば相手の威力に足が止まり最悪、防戦一方になる可能性もあるためだ。
故に、生きるためには避け続けるしかない。
建物の影に隠れてやり過ごすという選択肢もない。
先程、刀弥が建物の影に逃げ込んだ際、相手がその強力な射撃を次々と撃ち込んで建物を崩壊させてきたからだ。おかげで刀弥は危うく、その崩壊に巻き込まれそうになった。
それにこんな危険なモンスターを放っておけば、他の人たちが危険に晒されてしまう可能性が高い。何としても、ここで叩いておくべきだと刀弥は考える。
透明の弾丸が左肩をかすめる。
その事実にヒヤッとしながらも、彼は集中力を絶やさない。
近づけば近づくほど、それだけ相手の攻撃が自分に届くまでの時間が短くなる。故に気は抜けない。
射線には乗らない。重なったとしても切り返しのときなどの一瞬だけだ。
相手は当たらないことに苛立ったのか、射撃をばらまくように撃ってきた。

ばらまくと言っても、シェナほど連射のある射撃ではない。そのため隙間を抜けるのは簡単だ。

念のため射撃のタイミングで射線に乗らないように気を付けながら、彼はさらに相手へ接近する。

僅かずつではあるが、距離を詰めていく刀弥。

そして遂に、刀弥は己の間合いまで近づいた。

攻撃が止んだのを見計らって、刀弥は一気に瞬歩で相手の目前まで迫る。

放つ一撃は己の体重を乗せた振り下ろし。狙う先は頭部。

だが、ここで驚くべきことが起こった。

何と巨大なエアゲイルが、六つの足を器用に使って後ろへと飛んだのだ。

予想外の行動に刀弥は相手を追いきれず、彼の攻撃は巨大なエアゲイルの目を斬るだけに留められた。

さらに相手は、後ろへ飛んだと同時に彼に向けて左右両方のハサミから射撃を放つ。

攻撃に集中していた刀弥は、相手の射線を意識していなかった。

攻撃は彼に当たるコースで飛んでくる。

咄嗟の判断で刀弥は瞬歩で後ろへと飛ぶ。

だが、逃げ切れない。地面を蹴った左足が僅かばかり巻き込まれた。

バランスを崩して刀弥は地面に倒れる。

「ぐっ！？」

左足に激痛が走る。見ると、左足の靴やズボンがその威力に裂けそこから血が流れているのが見えた。

だが、じっとはしていられない。こんな状態、敵からすれば格好の的だ。

悲鳴をあげる体を叱咤して、彼は飛ぶ。飛んだ直後、彼のいた場所に敵の射撃が着弾する。

痛みを堪え立ち上がった刀弥は再び、相手へと近づこうとする。

だが、左足が痛みで言うことを聞かない。必然的に左足で行う瞬歩の速度や移動距離が落ちる。

これでは射線から逃げ続けるのは難しい。ならば……

刀弥は覚悟を決める。それまでの射線から逃げ続ける戦い方から、弾が来た瞬間だけ射線から離れることで相手の攻撃を回避する戦い方に彼は切り替えることを決心したのだ。

無論、これはかなり難しい。刀弥がこれまで射撃に対処できたのは、当たらない場所に居続けたことと当たるであろう場所を事前に予測し対策をたてていたからに過ぎない。

だが、今からする戦い方には相手の射撃のタイミングを見極める能力が必要になる。

タイミングを間違えて回避が遅れれば、攻撃を避けきれず死亡。

まさに刀弥は己の命を賭けて、この難題に挑まなければならないのだ。

――もっと集中を……

心の中で呟くように唱える。

見つめるのは正面のみ。周囲は気にしない。他のエアゲイルの気配はないのだから。

足を止め敵を見据える刀弥。

相手の様子が変わったことに気が付いたのか、巨大なエアゲイルが動きを止め刀弥の出方を伺うように身構える。

睨み合いは一瞬。次の瞬間には刀弥が傷ついた足で歩みを進ませていた。

直後、巨大なエアゲイルの射撃が放たれる。放ったのは右のハサミからの一発。

射撃の直前、僅かに揺れていた相手の右のハサミが一瞬止まったのを刀弥は見逃さなかった。それ同時に彼は右足の瞬歩で左へと移動する。

回避成功。彼の右を敵の攻撃が通過する。

間髪入れずに相手は左のハサミで攻撃を放つが、これも刀弥は右

へと飛んで避けてしまう。
再び、攻撃を放つ敵。今度は右、左の連続攻撃。右の攻撃は刀弥のやや右側。左の攻撃はそれより二歩分左。まるで左へと避ける刀弥を狙ったかのような射撃だ。
だが、射線が感覚でわかる刀弥には通じない。彼は右へと瞬歩で移動して攻撃から逃れると、さらに前への瞬歩で一気に距離を縮める。
誤って左足で瞬歩の静止をしてしまい激痛に顔をしかめるが、その足が止まることはない。
刀弥は一歩一歩確実に相手に近付いていく。
巨大なエアゲイルの透明な弾群がそれを阻もうと飛んでくるが、それらが彼に当たることはない。全て彼の傍らを過ぎていくだけだ。
気が付けば足の痛みを忘れていた。それほどまでに刀弥は目前の戦いに集中していた。
巨大なエアゲイルは攻撃の当たらぬ刀弥に怯えたのか、徐々に攻撃の頻度を上げていく。
だが、当たらない。刀弥は攻撃を悠々攻撃の間を通り抜け、巨大なエアゲイルに迫っていく。

その様はまるで風のようだった。

遮られても僅かな隙間から抜け出し突破する。今の刀弥はまさにそれを体現していた。
後退る巨大なエアゲイル。
一方の刀弥はと言うと、左足を負傷しているにも関わらず、かなり体の調子がよかった。もしかしたら、怪我を負う前よりも遥かに調子がいいくらいだ。
世界が今まで以上に広く感じる。
それは、極限の集中力がもたらした情報収集能力故の感覚だった。

生と死の境界線上にいることにより、生きようとする彼の思いや本能がより一層の集中力を体から引き出そうとする。

そうして引き出された高い集中力がより詳細な情報を拾い上げることで、彼はこれまで以上に詳細な世界を認識することになったのだ。

普段では拾うことすら難しい僅かな動き、音、振動を今、彼は拾うことができる。それらの情報を元に彼はさらに相手を知っていく。

結果、刀弥はさらに相手の動きを見切る能力が上昇した。

先程よりも、早い段階で動き出す刀弥。おかげで攻撃を余裕をもって避けることができた。

この変化に怯えた巨大なエアゲイルは本能的に逃げ出そうと、先の時と同じように後ろへと飛ぼうと足に力を込める。

しかしその瞬間、巨大なエアゲイルの頭部に何かが刺さった。

刺された痛みで巨大なエアゲイルはもだえ苦しむ。

巨大なエアゲイルの頭部に刺さった物。それは刀弥の刀だった。

相手が飛ぶことを僅かな動きから予知した刀弥が、直前に己の刀を投げたのだ。

刀弥は相手がもだえている間に、接近。浅く刺さっていた刀を引き抜くと、それを片手で持ち腰を回すように引き絞ると放つための構えを作る。

風野流剣術『一突(いっとつ)』

強い踏み込みと腰のバネによる突きの力を持って、再びその頭部に刀を突き刺す。

硬い手応えが返ってくるが、ロックスネークの硬さと比べれば全然柔らかい。

そうして刀は、相手の脳天を刺し貫いた。

巨大なエアゲイルは大きく身を仰け反らせ足掻こうとするが、最後はただゆっくりと力を失って倒れていく。

しばらく眺めた後、相手が動かないことを確認すると刀弥はゆっくりと近づき頭部に刺さった己の刀を抜いて腰の鞘へと戻すのだっ

た。
　刀が鞘に収まる音が鳴り響いた途端、彼は左足の激痛を思い出し膝をついてしまう。
「っ！？　そういえば左足、怪我をしてたんだったな」
　戦いの最中、足の痛みを忘れていたせいでそのことがすっかり抜け落ちていた。
　とりあえず周囲を見渡し、耳を澄ましてみる。
　どうやら付近に他のエアゲイルの姿も足音もないようだ。
　その事実に刀弥は安堵の息を吐く。
　安全であるなら、ここで少し休んでもいいだろう。
　そのまま座り込んだ刀弥は、少しの間休むことにした。
　戦いの音自体、小さくなっている。どうやら大半は倒し終えてしまったようだ。
　そんなことを考えていると、やがて誰かの走る音が聴こえてきた。
　音のほうへと目をやると、やってきたのはシェナだった。
「そっちは終わったのか？」
　刀弥が声をかけると、シェナは驚いた表情で刀弥と巨大なエアゲイルの死体を見ている。
「これ、刀弥が？」
「ああ、どうにかって感じだけど」
　苦笑混じりの声で刀弥は答えるが、シェナは驚いたままだ。
　正直、シェナは刀弥に感心していた。
　武器や戦い方による相性があるとはいえ、あの攻撃を抜けて近づくのは中々大変だったはずだ。
　けれども、彼はそれをやり遂げた。
　やはり彼は自分と同じ、戦いに関しての才能があるのだとシェナは確信する。
「刀弥」
「何だ？」
　名前を呼ばれ反応する刀弥。

「刀弥は強くなりたいの？」
突然の問いに刀弥は目をパチクリとさせるが、それから少し考え込むそぶりを見せる。
そうしてしばらくした後、顔を上げた彼がこう答えた。
「そうだな。守りたい人を守れるようになるくらいには……」
「そう。なら、それを忘れないで。刀弥は自分の願いを叶えるだけの力を持っているから……」
かつてアレンからプレゼントを受け取り、彼のためにも上手くなりたいと願った自分のように……
そんな話をしていると、リアやアレンの姿が遠くのほうから見えてきた。
リアは刀弥の左足の怪我に気が付いた途端、急いで駆け寄ってくるとキュアでその傷を治し始める。
「もう、また無茶して～」
「悪い」
そうやって怒るリアに、刀弥が素直に謝る。
「他に怪我はない？」
「他は大丈夫だ。そういうリアこそ怪我はないのか？」
「見ての通り、大丈夫♪」
そう言ってリアは笑みを浮かべて、無事な様子をアピールしてくる。
一方、シェナとアレンのほうでも似たようなやり取りをしていた。
「アレン、お疲れ様」
「全く、本当疲れた」
シェナとタッチを交わしながら、アレンが疲れた顔をする。
「疲れてるの？」
「ああ、洞窟に行きそうだったからな。結構大変だったよ」
そんな応答をしながら、アレンは座り込んでしまう。
そんな彼を見てシェナは何を思ったのか、突然、アレンの後ろに回り込んだかと思うと肩たたきを始めてしまう。

「気持ちいい？」
「……あー、もうちょっと右だな」
アレンは何か言おうとしたようだが、結局そのまま彼女の厚意に甘えることにした。
「わかった」
アレンに指示したがって叩く場所を動かすシェナ。
その後、誰かが知らせにいったのだろう、逃げ出していた町の人や観光客たちが戻ってきた。
町長は刀弥たちを始め町の人を助けたりエアゲイルたちを退治してくれた人たち一人一人に感謝の言葉を言い回った。
そして、町の無事と彼らの活躍を称えるためにその日、夜通しの祭りを開くことを決めてしまう。
町中が騒ぎ始める中、刀弥たちは疲れていたこともあって、おとなしく宿屋へと戻ることにしたのだった。

二章三話「襲撃」（5）（後書き）

2章も次の最後の予定です。
また、2章3話の見直しをしながら、3章のプロットを練る作業が始まりです。
誤字や感想、評価がありましたら是非ともお願いします。

二章三話「襲撃」（6）（前書き）

後一回で終わらせるつもりだったんですが、思ったよりも話が伸びそうなので分割することにしました。

今度こそ次の話で二章三話を終わらせます。

二章三話「襲撃」（6）

「疲れた～」
部屋に入った途端、そう言ってアレンがベッドに倒れ込む。
刀弥とアレンの部屋は標準的な部屋で壁は白色、天井は黒鳶色に葡萄色の床という色合いだ。
窓の外ではお祭り騒ぎの様子が未だ続いている。
人々の中で歓迎されている人たちがいるが、恐らく自分たち以外のエアゲイルを退治していた者たちだろう。皆元気に騒いでいる。
あんな後なのに元気だなと、少し刀弥は感心してしまう。
「温泉には入らないのか？」
「今はいい。明日起きたときに入ることにする」
刀弥の問い掛けにも顔も上げずに億劫そうに答えると、そのまま彼は寝入ってしまった。
どうやら本当に疲れていたようだ。
それを見て刀弥はもう一つのベッドに座ると、今日の出来事を思い返す。
確かに、今日の戦闘は刀弥もかなり疲れた。
ただその一方で、言い知れぬ充実感があったのも事実だ。
特に大きなほうとの戦いでは、今までと違う世界が見えた。
――あの力を自由に引き出せるようになれば、もっと強くなれるはずだ。
自然とそんな予感を感じる。
そのためには、今以上に己を磨かなければいけないだろう。
――まずは明日だな。
明日はシェナとの対遠距離の修行の最終日。
教えてくれた彼女のためにも、これまで培ったものや今日の戦闘で得たもの全てをぶつけていくつもりだ。
シェナのほうもかなり本気でやるつもりのようだし、気を抜けな

い。
そのためには早めに寝たほうがいいだろう。だから、刀弥はその前に温泉に入ることにした。
宿屋の人の話だと、泊まりの客は自分たちを除いていないそうだ。それならばゆったりと温泉に浸かれるだろう。
部屋に備えられていた浴衣のような衣服――宿屋の人によるとカターヤというらしい――を手に取ると、刀弥はアレンを起こさないよう極力音を抑えながら静かに部屋から出ていくのであった。

温泉は露天風呂だった。と言ってもここは洞窟の中なので空を見上げることはできない。
ただ、それでも建物の中では味わえぬ開放感を味わうことはできた。
縁は岩で囲み、床は岩を加工したような大小のタイルが一面に敷き詰められている。温泉は染まったような月白色の濁り湯。
入ってみると湯は熱いが、十分浸かれる温度だ。
そのまま肩まで浸かって縁に背を預けると、刀弥は思いっきり伸びをする。それから彼は自分の左足をさすった。
左足の怪我はリアの魔術のおかげで傷自体は塞がっている。けれども、ダメージ自体をなくならないので痛みは残ったままだ。
といっても動く分には問題ない。明日になれば痛みは完全に引いているだろう。
そんな考え事をしていると、誰かが浴室に入ってきたようだ。
恐らくアレンだろう。どうやら結局、目を覚まして風呂に入ることにしたようだ。
「なんだ。結局、入ることにしたのか？」
振り返る刀弥。

すると、何故かそこにはリアがいた。

時間が静止したかのような静寂が辺りを漂う。

幸い、リアは胸の辺りから足元まで隠れるくらい長いタオル巻いていた。おかげで彼女の裸体を見てしまうことはない。

そのことにほっとしながらも、刀弥は己の疑問を口に出してみる。

「……何でリアがここに？」

問われた側のリアは事情を把握しているらしく、溜息を吐きながらも刀弥にその理由を説明してくれた。

「ここの温泉、混浴だよ？　看板の隅のほうに書いてあったんだけど……」

「……そうなのか？」

全く気が付かなかった。記憶を掘り返してみるが隅の方までは思い出せない。

「やっぱり、気付いてなかったんだ」

「……悪い」

知っていれば確認をとるなどで回避できた事態だけに、悔やまれる。

「まあ、わざとじゃないのはわかったから許してあげる」

そう言いながら温泉に入ったリアは、そのまま刀弥の左隣に並んだ。よく見ると気のせいか頬が若干赤い。

このまま彼女を見ているのもマズイかと思い、刀弥は視線を外して天井を眺めることにした。

そのまま気まずい沈黙が続く。

「そ、そういえば刀弥。左足は大丈夫？」

「え？　あ、ああ……少し痛みはあるけど、十分動ける範囲だ」

突然、話しかけられ戸惑いながらも刀弥は答える。

「本当に？」

心配そうな声でそう問いかけながら、リアは己の手を刀弥の左足へと伸ばす。

彼女の手が自分の左足を触っているという事実に、刀弥はドギマギしてしまう。
「痛くない？」
「じ、十分我慢できる範囲だ」
実際、左足が伝えてくる痛みはその程度のものだ。彼女が心配するほどのことではない。
「なら、いいんだけど……刀弥ってときたま無茶するから、ちょっと不安になっちゃうんだよね」
目を細めリアは憂いの表情を作る。
「……悪いな」
「刀弥、謝ってばっかりだね」
「……」
もはや、謝ることもできず黙るしかない。
そんな刀弥の様子に、思わずリアは失笑するのだった。

謝ることができず黙るしかない刀弥が可笑しくて、ついリアは失笑してしまう。
そんなリアの反応に刀弥はどこか拗ねたような顔になる。
――あ、こういう可愛いところもあるんだ。
新たな一面の発見にリアは内心喜ぶ。
真面目で冷静かと思えば、時折熱くなって無茶をする。
それがリアの目の前の少年に対する評価だった。
無限世界とは繋がっていない閉鎖世界の住人。
代々剣術を教えていた家の人間だけあって、それなりに戦う術を身につけてはいたが、実戦経験は皆無。
それでも彼は今日まで何とかやってきた。
足りないものを戦いの中で見つけ出し、可能であれば戦いの中で編み出す

剣士としての才能もあるのだろう。特に分析力は眼を見張るものがある。

慢心はなく、実戦経験が少ないことを自覚しているおかげか戦闘時に気を抜くこともない。

明るいと性格とはいえないが、それでも優しい部分があるのは確かだ。でなければ一人の少女のために危険な戦いに行こうとはしないだろう。

己の悩みを内に抱え込む悪い部分もあるが、それは時間が解決してくれるだろう。

まだお互いを完全に信頼し合うには、まだ時間が短すぎるというのは彼女も理解している。

未熟な部分もあるが、それは自分も同じだ。だからこそお互いで補い合うことができればいいなと考えている。

ただ、一番の不安はやはり無茶をすることだ。

これまでの戦いは彼の成長もあってかどうにかできているが、それがこの先も続く保証はない。

リア自身一人旅のときは、無茶をしないようにしてきた。可能ならしっかり準備を整え、危険だと判断すれば逃げたり一度引いて態勢を立て直してから再度挑戦する。そんな堅実な方法をとってきた。

しかし刀弥の場合、その選択肢を選ばず己を高めることで事態を解決しようとしているところがある。まるで強い敵を求め、その中で強くなろうとする戦闘狂たちのように……

もう一度、リアは刀弥の左足を見る。

宿屋への帰りの最中に聞いた話によると、刀弥の負傷は大型のエアゲイルとの戦闘で得たという話だ。

シェナの証言だとかなり手強かったらしい。

そんな相手と刀弥は戦ったのだ。左足の怪我だけで済んだのは幸いだといえるだろう。

「前から思ってたんだけど、刀弥って強い敵を求めてるってことはないよね？」

「どういう意味だ？」
その返事に、リアは溜息を一つ吐いて言葉を続ける。
「なんていうかな。刀弥って厳しい戦いの中に身を置くことで、強くなろうとしてるんじゃないかなって思うときがあるの。ロックスネークや今回の戦いとか……」
「……別にそんなつもりはないんだけどな」
困ったような顔を浮かべて、刀弥はそう否定する。
「強くなりたいという思いはあるけど、それも普通の範囲でっていう意味のつもりだし……」
「そう」
ひとまずその返答にリアは安堵する。
少なくても刀弥自身は、そちら側へ落ちるつもりはないようだ。
であるなら話は早い。
「刀弥」
リアは両手で刀弥の頭を挟みこむようにして優しく掴むと、上を見ていた彼の視線を自分のほうへと向けさせた。
「リ、リア？」
無理やりリアのほうを見ることになった刀弥は、顔を赤くしながら慌ててしまっている。
けれども、リアはそんなことにも目もくれず真剣な眼差しで彼を見据えていた。
「あのね刀弥。私これでも刀弥のこと心配してるんだよ？」
「あ、ああ。それはわかってる……」
戸惑った声で刀弥がなんとかそう答える。そんな彼の反応を見て、つい可愛いと思ってしまった。
死んで欲しくない。そんな感情が彼女の中に渦巻く。
だからこそ、リアはその言葉を彼に告げることにした。
「だったら、約束して絶対に死なないって」
「……」
刀弥の瞳が見開く。

そんな視線を感じながらリアは思考する。
もはや、何を言ったところで刀弥が必要と判断すれば彼は無茶をするだろう。
止めることは不可能。ならば、後は生きる可能性を上げるしかない。
そのための約束だった。こんな約束でも彼はしっかり果たそうとしてくれるだろう。
「……わかった。約束する」
一旦目を瞑った後、刀弥は静かに頷く。
「うん。約束だよ」
「ああ」
その言葉にリアは笑みを見せると、それ見て刀弥もまた笑みを返してくる。
そうして二人は一緒に笑い出した。
「……で、そろそろ手を離して欲しいんだけど……さすがこれ以上はマジマジと見られるのも恥ずかしいだろ？」
「え？　……あ！？」
刀弥に言われここが温泉だということを思い出すと、リアは急いでその手を離す。
すぐさま刀弥はあさっての方向へと視線を動かし、リアは刀弥のほうへ背を向ける。
濁り湯と頭を抑えていたおかげで、刀弥が見れる範囲などたかが知れているだろう。だが、やはり見られたという事実は恥ずかしい。
「じゃあ俺、先に上がるから。おやすみ」
やがて、気まずい空気に耐えられなくなったのか、そう告げて刀弥が温泉から立ち上がる音が聞こえた。
温泉から上がり彼はそのまま男性の更衣室のほうに向かったようだ。
ドアが閉まる音が聞こえると、思わずリアはほっと胸を撫で下ろしてしまう。

そうしてしばらくして、彼女は恥ずかしさから立ち直ると急いで温泉から上がりカターヤに着替える。

そしてリアはシェナの眠る部屋へと戻ると、そのままベッドに横になり安らかな眠りの中へと落ちていくのであった。

二章三話「襲撃」（6）（後書き）

すいません。今回で終わらせるつもりだったんですが結構ページ数が伸びたので分割して出すことにしました。

次こそ二章編を終わらせてみせます。

二章三話「襲撃」（7）

薄明かりが騒ぎの終えた町々を静かに照らしている。
あちこちの温泉からは湯気が立ち上り、岩盤の天井を白に染めていく。
それは四人がいる河原も同様だ。
河原では、刀弥とシェナが武器を持って互いに向かい合っていた。
それをリアとアレンが斜面に腰かけて眺めている。
よく見ると刀弥は以前と少し違う衣服を着ていた。
ズボンは黒緑色（くろみどりいろ）。素材は柔らかそうだが、足元の口が少し広いのが特徴だ。
一方の靴は黒色で履き口部分が大きく開いたタイプ。ちなみに靴下も新しくなっている。
どちらも、フォレストウルフを倒した町で刀弥たちが購入しておいた物だ。非常用ということで安めのものを選んでおり、着てみた感想として若干不満が残っている。
とはいえ、元のズボンや靴は左足部分が裂かれてしまっている以上、これで我慢する他ない。
「とりあえず『エンクロージャーウォール』を発動させたから、周囲に被害が行くことはないかな」
「助かった。リア」
二人に対してそんな説明を入れるリアに、刀弥は礼を言う。
リアが展開した『エンクロージャーウォール』は本来、攻撃を遮る力場で全方位を囲む防御を目的とした魔術だ。
しかし、範囲を広くしその中に対戦者を入れることで、周囲に被害が及ばないようにするバトルフィールドとして活用することもできる。
おかげで、刀弥とシェナは何の気兼ねもなく戦うことができる訳だ。

「じゃあ、刀弥は準備はいい？」
「ああ、いつでもいい」
シェナの問いに刀弥が構え、返事を返す。
「それじゃあ、始めましょ」
その瞬間、シェナの腕が上がり、いくつもの銃弾が刀弥に向けて放たれていた。
即座に瞬歩で左へと移動。銃弾の範囲から逃れる。
だが、刀弥の後をシェナの銃口が追いかけていた。
刀弥は反時計回りに回りこむような形で、シェナに近づこうとする。
しかし、シェナの射線が刀弥に追いついた。
刀弥の行き先に射線を先回りさせた上で引き金を引く。
銃弾が真っ直ぐ飛び、その線上に刀弥が飛び込んだ。
けれど、刀弥は構えていた刀を僅かに動かし防御。と、同時に走る速度を緩め、先回りされた射線から逃れようとする。
攻撃を止めたシェナは銃口を動かし刀弥を追う。
銃弾を撃ってないので、反動がない分、撃ちながら動かすよりも遥かに早い。加えて撃ちことに意識を回す必要がないので、かなり繊細に銃口を合わせてくる。
今までの修行のときは基本、撃ちっぱなしだったのは刀弥に射線を把握させるためと同時に射線の移動速度を刀弥の能力に合わせるためだったのだろう。
どうやら今回は本当に本気で戦っているようだ。それを嬉しく思いつつ、刀弥はどうするべきか考える。
射線から逃げ続けるのは、もはや難しい。となると撃たれた瞬間、それに合わせて射線から逃れることで攻撃を回避するしか方法はない。
決断は一瞬、すぐに刀弥は実行に移した。
それまでやっていた回り込みを止めて一直線にシェナのほうへと突っ込む。

当然、刀弥に射線を合わせたシェナが連続で射撃を放ってくる。
けれど、刀弥は引き金を引く直前の僅かな指の動きを見極め、発射と同時に射線から外れ次々と攻撃を回避する。
まだ巨大なエアゲイルとの戦いで見せた領域には至ってはいない。それでも、現状の力でシェナの発射タイミングを見極めることはできた。そのことに刀弥は内心安堵する。
刀弥の新たな動きに、シェナはもちろん見学していたリアやアレンも目を見開いていた。
そうしてその攻撃と会費の果てに両者の距離が最初の半分を切る。
それと同時にシェナが刀弥から距離をとろうと、後ろへと飛んだ。どうやら逃げながら撃つつもりのようだ。動きながらの射撃は体の揺れや動かすことに意識が向く分、射線が揺れ乱れやすい。仮に安定させるとしても時間が掛かるだろう。
とはいえ、刀弥からすれば距離を離されるわけにはいかない。逃げさないとばかりに刀弥は前進の速度を上げようとする。
しかし、飛んでくる銃弾が彼の侵攻を阻む。
必然的に回避と防御に集中せざるをえず、前進の速度は上がらない。
そんな状況ではあるが、それでも両者の距離は徐々にだが確実に縮まっていき、遂に刀弥は己の間合いまで接近することができた。
接敵と同時に刀弥は突きを放つ。狙いはシェナの右肩。
けれども、この攻撃をシェナは右の拳銃で防ぐと、そのまま腕を外へと動かし刀弥のバランスを崩しつつ、左の拳銃で刀弥を仕留めようとする。
だが、ここまでの流れは刀弥も想定内。外に運ばれている刀から左手を放し左の銃口を己の外へと向けさせる。
そうしてから左足を前に出して相手の足を踏もうとする。相手を逃さぬためだ。
咄嗟の判断でシェナはバックステップ。下がりながらも両の拳銃を中へと戻し、刀弥へと狙いを定めようとした。

と、そのとき、刀弥の身が前へと崩れ落ちる。左足の力を抜いたことで支えを失った体が前方へと倒れたためだ。

突然のことにシェナは驚き戸惑ってしまうが、すぐに気を引き締め直し狙いを補正する。

倒れていく刀弥はそのまま己の体重で左足を曲げると、その左足を使って強く踏み込み相手に急接近する。

風野流剣術『疾風(しっぷう)』

刃の狙う先は彼女の足元。右から左への水平の一閃だ。

刀弥の攻撃に気が付いたシェナは、すぐさま右へと飛んで疾風から逃れる。

そして、左の拳銃で技終了直後の刀弥を狙い撃った。

しかし、それは刀弥も予測済み。右足を軸に振り抜いた勢いを利用して反時計回りに身を回し、刀の刃で銃弾を防ぐ。

視界の先、シェナの右の拳銃も刀弥を捉えようと動いていた。

故に刀弥は動く。狙う場所はシェナの背後。

回転した力を利用して左足を強く踏み込み『瞬歩』を繰り出す。

行き先に気付いたシェナが急ぎ体ごとを見を回そうとするが、刀弥の到着のほうが僅かに早い。

ただ、問題は刀が今刀弥の体の左側にあることだ。今から振り抜いてはシェナの旋回が間に合ってしまう。

けれど、方法はある。故に刀弥はその選択肢を繰り出す。

刀弥が選択した攻撃は右肘による打撃だった。

鈍い音が響き、シェナが一瞬呼吸を止めてしまう。

さらにその衝撃で彼女の体が僅かに離れたところに、片手の刀による一撃が襲いかかる。

高峰流剣術『連爪(れんそう)』

格闘術と剣術を融合させた高峰流。連爪(れんそう)は持ち手側の肘打ちから剣戟へと繋げる二連攻撃の剣技だ。

とはいえ、刀弥自身、この攻撃を連爪とは思っていない。本来、この技はもっと短い時間で繋げなければいけない。そこまでいって、

ようやく技と呼べる領域なのだ。
見よう見まねで行った刀弥ではそこまで行くことはできない。
とはいえ、この状況では有効の攻撃手段だと判断した。
そしてその判断通り、刀はシェナの左脇とへと迫り
当たる直前にその刃をピタリと止めるのであった。

「私の負け」
残念という顔を浮かべて、シェナが結果を告げる。
「それでもどうにかって感じだけどな」
刀を収めながら、刀弥がそれに答えた。少し疲れたのか息が乱れている。
「お疲れ、刀弥」
「残念だったな、シェナ」
そこにリアとアレンが歩み寄ってきた。
「ようやく勝てたね」
リアは刀弥の傍までやってくると、そう言って刀弥の勝利を喜ぶ。
「まあな」
「途中、今までと違った動きをしてたけど、あれはいつ覚えんたんだ？」
アレンが言っているのは間合いに近づく途中、一直線にシェナに突っ込んだときのことだろう。
「大きなほうのエアゲイルとの戦闘のときにな」
「なるほどな。それを使って倒したわけだ」
納得するアレン。
一方のリアは呆れ顔だ。
「もう本当に無茶ばっかりしてるんだから」

「それはもう諦めるしかないわ」
そんなリアの肩にシェナが手を置く。
「シェナ。それは遠まわしに俺にも諦めろと言いたいのか？」
彼女の言葉を聞いて、アレンがジト目で訊ねる。
「どうしてそうなるの？」
不思議そうにシェナが首を傾げた。どうやら本当にわかっていないらしい。
「えっと、そんなことより早く出発しませんか？」
「……そうだな」
慌てて間に入ってくるリア。
それにアレンは溜息混じりに頷いた。どうやらこれ以上言ったところで無意味だろうと判断したようだ。
予定ではこのままラーマスへ出発して、昼頃に到着する運びとなっている。
ラーマスに到着したらすぐに刀弥のメイン用のズボンと靴を買うつもりだ。
さすがに非常用のズボンや靴のまま旅をする気は刀弥にもない。
それからすぐにシェナたちは出立。つまり向こうに着いて、刀弥のズボンや靴を購入したらすぐにお別れということになるのだ。
「それじゃあ、さっさと行くか」
刀弥のその言葉に他の三人が頷く。
そうして四人はラーマスに向かうべく、急ぎその場を後にするのだった。

四人がラーマスに到着したのは、彼らの予想通り昼頃だった。
そのまま四人はその足で服屋へと向かい、刀弥のズボンや靴を購入する。
「満足できるのがあってよかったな」

服屋を出てすぐ、先頭を歩いていたアレンが振り返ってそんな感想告げてきた。
「そうだな」
それに刀弥が頷き、己の足元へと目を向ける。
脛（すね）の中間辺りまで伸びた黒いブーツと黒いズボン。
特にズボンは使われている素材がかなり違う。前のズボンはデニム素材だったため少々固めだったが、今着ているズボンはかなり柔らかく動きやすい。
着心地は落ち着かないが、それは単に着慣れていないせいだ。時期に慣れるだろう。
「でも、本当によかったの？　前のズボンや靴を手放しちゃって」
そんな刀弥に対して納得しきれないといった表情を見せるリア。
彼女の言うとおり、刀弥は前のズボンや靴をもう使えないということで手放すことにした。
最初は捨てるつもりだったのだが、偶然その話を聞いていた店の人がズボンや靴の素材に興味を持っていたこともあって話し合いの結果、その店に売るということで決着がついた。
どうやらリアはそのことが不満だったようだ。
「使えないものを持っていたも仕方ないだろ？」
「でも、あれは数少ない刀弥の世界のものでしょ？」
その言葉で、ようやく刀弥は彼女がなにを気にしているのか理解した。
頬を緩めて、刀弥はリアの不満を和らげようとする。
「気にするな。物は他にもあるしな。第一、あのズボンにそれほど思い入れもない」
刀弥がこの世界に来た時に持っていたのは衣服を除けば、財布、携帯電話とストラップとなっているお守り。そして直前に買ったライトノベル。それらはスペーサーの中に入っている。
「それに衣服に関しては消耗品だし、その覚悟は前々からしてたってのもあるしな」

今回のような戦闘で破れるときもあれば、使いすぎで布地が薄くなって破れることもある。それは衣服として避けては通れないことだ。

故にそうなった際は、捨てようと刀弥は心に決めていた。

「そうなんだ。じゃあ、これ以上言ってもしょうがないね」

そう言って肩をすくめるリア。どうやら納得しれくれたらしい。

「それじゃあ、俺たちもこの辺でお別れだな」

「いいのか？　向こうの出入口まで見送らなくても」

刀弥のその言葉にアレンが首を振る。

「大丈夫だ。そっちだってまだやることはあるんだろうし。それじゃあな」

「じゃあね、刀弥、リア」

「シェナさん、アレンさん、ここまでありがとうございました」

「元気でな」

そうやって別れを交わし、アレンとシェナは去っていった。

残されたのは刀弥とリアの二人のみ。

「行っちゃったね」

「そうだな」

二人を見送った後、リアが呟き刀弥がそれに相槌を返す。

「とりあえず、昼飯を食べて、それから両替とかいろいろ準備をしないとな」

「うん」

そうすれば、後はゲートを通ってリアフォーネに行くだけだ。

「リアが自信を持つ根拠。楽しみにしてるからな」

「それはこっちの台詞。刀弥の顔がどうなるか楽しみなんだから」

そう言い合って、二人は互いに笑みを浮かべる。

そうして二人は昼ご飯を食べるべく、どこか良さそうな店を探し始めるのであった。

二章終了

三話終了

二章三話「襲撃」（7）（後書き）

ようやく2章3話が終了し、2章も終りを迎えました。
さて、次の3章に向けてまたプロットを作っていきたいところです。
その間にまたまたというべきか改稿作業もしていくつもりです。
実を言えば気になった文章があったら、細々と修正とかは入れてたりします。
「ここはこう書いたほうがいいんじゃないか？」とか考えちゃって文章とは難しものだと実感します。
ともかくこれから続きますのでどうぞ応援よろしくお願いします。

三章一話「観光」（1）

青い空の河の上を白い雲が流れている。
太陽は天高く昇り、眩しい日差しが眼下の世界に降り注ぐ。
眼下の世界にはいくつかの色があった。
森と平原が作る緑色。大地が作る茶色。川や水が作る青。そして……遙かなる昔に生み出された建造物が作る紺色。
それがこの世界の色だ。
そんな世界のある場所に一台の馬車が走っていた。
馬車の中では二人の人間が向い合い話し合っている。どちらも若く、少年と少女と呼ぶべき年頃だ。
「リアフォーネはね。ゲートが通じたときは誰もいない無人世界だったの。だけど、どういう訳か人口の建造物があちこちにいくつもあってね。それがリアフォーネを遺跡世界と呼ぶ所以という訳」
そう説明するのは、赤銅色の長い髪をした少女だった。席に座る膝の上に金色の杖を載せている。
「どういうことだ？　なんで誰もいないのにそんなものが建ってる？」
その説明に疑問を返すのは黒髪の少年だ。腰には刀の収まった鞘が吊り下げられている。
「それがリアフォーネ最大の謎なの。今もその謎を解こうと調査隊が遺跡を調査しているって訳。でも、この世界がゲートに繋がってから一〇〇年以上過ぎてるけど、未だ解明できずの状態」
少女、リア・リンスレットはそう言うと同時に両手を上げてお手上げのポーズを示した。
「解明はできなくても、いくつか説ぐらいは出てるんだろう？　どういう説があるんだ？」
少年の名前は風野刀弥。彼はリアの話を聞いてそんな質問を返す。
「えっとね。一つ目は自分たちの文明が原因で絶滅しちゃったって

いう説。二つ目は空に上がったって説。で、三つ目はゲートでどこかに行ってそのゲートが閉じたという説」

覚えのある説を上げながら左手の指を折っていくリア。

それを聴いて、刀弥が反応を返す。

「ここの遺跡って最初の説がありえそうなくらいレベルが高いのか？」

「う～ん。どうなんだろう。私も初めてくるし、話も他の人から聞いた程度だから詳しくはわかんないし」

刀弥の問いにリアは考え込むが、わからない以上答えなど出るはずもない。

「それで、今はどこに向かってるんだ？」

こちらに辿り着いて早々、リアが刀弥を引っ張って駆け出し、気が付いたら馬車の中に連れ込まれていた。

この馬車が一体、どこに向かっているのか刀弥は全く知らないのだ。

「この馬車はワートってところに向かってるの」

「ワート？　どういうところなんだ？」

刀弥の疑問にリアは待ってましたとばかりに笑みを浮かべる。

「ワートはすっごい高い塔の遺跡なの。聞いた話じゃ最上階は一帯の景色を一望できるんだって」

「高いってどれくらいなんだ？」

刀弥では精々、自分の国にあるテレビ塔程度の高さしかイメージできない。

「う～んとね。あれくらい」

そう言って彼女は馬車の窓を指差す。

それに従って刀弥が馬車の窓へと顔を向けると……

雲にまで届こうかというくらい高い塔が窓の向こうに映っていた。

「……」

想像以上の高さに刀弥は絶句してしまう。
そんな彼を見てリアが彼の耳元で囁いた。
「どう？　驚いた？」

そうして馬車が塔の手前に到着すると、二人は馬車を降りた。
改めて塔を見上げる。
塔は円柱形で壁の色は紺色。それが遥か上のほうまで伸びている。
よく傾かないなと変な感心が刀弥の頭をよぎる。
「ほら、早く早く」
リアの声に気付いて視線を前に戻せば、彼女はかなり先から刀弥を呼んでいた。まるで初めて海に来た子供のようだ。
早足で彼女のもとに向かう。
そうして二人は塔の中に入った。
中は結構広い空間だった。
壁が紺色なのは変わらないが、天井は高く、柱一つない。
唯一の例外は中央にある細長いもの。それは天井へと伸びている。
しかし、それはエレベータのようだ。その証拠にドアが開き、そこから人が出てきた。彼らが出ていくと今度はそれを待っていた人たちが中へと乗り込んでいく。そうして全員が乗り込むとドアが閉まった。
「あの中央ので上へ行くのか？」
「うん。あれでそれぞれが望む階へ転送するの」
「ふうん」
彼女の説明を聞いて刀弥が相槌を打つ。
しかし数秒後、彼女の説明にあった意外な言葉にようやく彼は気が付き、戸惑いの声を上げた。
「……待て。今、転送って言ったか？」
「うん。言ったよ」

首肯するリア。どうやら聞き違いではなかったらしい。
エレベータでなく転送装置とは、さすがに刀弥も予想していなかった。
「……凄いな」
頭に浮かんだのはそんな一言だけだった。それだけ彼にとって驚愕の事実だったのだ。
「そうだね。魔具や魔術でも人を別の場所に転送させるなんて事は無理なのに、ここの文明はそれを叶えてるんだもん」
一方のリアは、かなり興奮しているらしい。どこか熱の篭った口調で刀弥に語っている。
「という訳で、まずは最上階に行こっか」
「……当然、あれでだよな？」
中央の転送装置を指さす刀弥。
「もちろん。どんな風に転送されるのか楽しみだね」
笑顔を浮かべて、心躍らせるリア。
一方の刀弥は不安を感じていた。
「刀弥、どうしたの？」
「あ、いや……」
目聡く気付いたリアが尋ねてくるが、刀弥は言葉を濁すだけでそのことを語ろうとしない。
けれども、彼女はわかったしまったようだ。突然、ニヤニヤと笑みを浮かべて刀弥に語りかける。
「さては、ゲートのときみたいに心配してるんでしょ？」
「……ああ、その通りだ」
素直に刀弥はそのことを認める。
「大丈夫だって、本当に問題があるんだったら、そんなのに人を乗せないだろうし」
「あえて、不祥事を隠すところもあるんだがな……」
安心させるように言ってくるリアに、刀弥がそんな皮肉を返す。
「ええと……と、ともかく、長年使っていて何も問題が起きてない

んだから大丈夫だって……」
「……そうだな」
刀弥としても先の皮肉は冗談のつもりだ。長年、やっていて悪い噂がないというのであれば信用しても大丈夫だろう。
とはいえ、頭で理解していても感情まではどうすることもできない。それで不安な心情が消えるという訳ではないのだ。
内心ドキドキしながら、刀弥はリアと共に転送装置の中へと入っていく。
やがて、他の人たちも乗り終わり、ドアが閉まった。
すると、それと同時に床から光が溢れ出してくる。
光の色は翡翠色。それが徐々に室内を満たしていく。
一瞬、刀弥の顔に緊張の色が走るが、その瞬間リアが刀弥の腕を掴んだ。
刀弥が彼女の顔を見ると、彼女は彼を安心させるように笑みを見せてくる。
それで若干の緊張がとれた。と、同時に光が部屋を埋め尽くす。
眩しさに目を瞑る刀弥。
やがて、何かが開く音と共に人々の歩く音が聴こえてきた。
「着いたよ」
それと同時にリアが声を掛け刀弥の腕を引く。
それで刀弥はまだ腕を掴まれていることに気が付いた。
慌てて目を開けて腕を振りほどくが、周囲の人たちが送ってくる生温かい視線についつい顔が赤くなってしまう。
ともかく転送装置から出ることにする。
そんな刀弥の後をリアが笑いながら付いてくる。
「笑うなよ。リアが原因なんだから」
「まあまあ、それより早く行こ」
怒る刀弥をリアがなだめながら、二人は進む。
そうして二人は部屋の端まで来る。しかし、そこにあるのは紺色の壁ではなく透明な壁だ。

「うわあ……」
「絶景だな……」
感嘆の声を漏らす二人。
二人の目の前には、まるで天から世界を見下ろしているかのような景色が広がっていた。
雲が手を伸ばせば届きそうなくらい近い。眼下には茶色と緑色の混じった大地がこれでもかというくらい広がっている。
「凄い凄い！！」
興奮した様子でリアが叫ぶ。
「落ち着け。他の人たちが見てる」
周囲の視線が自分たちに向いたことに気付き、慌てて刀弥が彼女を注意する。
「あ、ごめん」
刀弥の言葉にようやくリアも周囲の視線に気が付いた。恥ずかしがりながら彼に謝る。
「でも、凄いよね」
「それに関しては同意だな」
叫ぶのはどうかと思うが、彼女の心情に関しては理解できる。
それだけこの光景に感動したということだ。
「折角だから、オーシャルで撮ったらどうだ？」
「そうだね」
刀弥の言葉にリアは早速、首元に下げていたオーシャルを取り出し、撮影をする。
「撮れてよかったな」
撮影が終了すると、刀弥がそう言ってリアに声を掛けた。
「うん。あ、見て。あそこに絵や写真を売っているところがあるよ」
彼女が指し示す先、確かに絵や写真を並べて売っている露店があった。
リアには風景の絵や写真を集める趣味があった。そんな彼女からすれば、さぞ興味のある店だろう。

予想通り彼女はその店に向かって駆け出していった。そんな彼女の後を刀弥はゆっくりと追いかける。
刀弥が追いついた頃には既にリアは何か買った後だったようで、お金を店の人に支払っているところだった。買った物は既にスペーサーの中に入れてしまったらしい。
「いいのがあったのか？」
「うん」
満面の笑みでリアが頷く。
「それじゃあ、次は地下に行こうか」
「地下？　ここには地下もあるのか？」
これだけ高いだけでなく、さらに地下もあるという事実に刀弥は驚きを隠すことができない。
「うん。地下は、かなり広いみたい」
「広いってこれ以上に広いってことか？」
それに対してリアがコクリと首を縦に振る。
ここや一階でも十分広いのに、これよりも広いとなると、一体どんな感じなるのかもはや刀弥にはイメージできない。
「……行ってみるか」
結局、刀弥は想像するのを諦め実物を見ることにした。
「それじゃあ、行こー！！」
それにテンションの上がったリアが応え、二人は地下へ降りるため転送装置へと向かうのだった。

「……広すぎだろ」
それが目の前の現実に対する正直な感想だった。
刀弥の目の前には膨大な空間が広がっていた。
ドーム状の壁と天井。塔の一階や最上階と比べてみても、広さでは間違いなくこちらが上だろう。

「本当、広いね」
そう言いながらリアはオーシャルでこの光景を撮ろうとしている。
それを視界の片隅に収めつつ、刀弥は辺りを見回す。
ドーム状のこの空間の中には、いくつもの建物らしきものが建っていた。
――町みたいなところだな。
それが刀弥のここを見た印象だ。
ふと気付くとリアの姿がない。見回してみると、遠くのほうにそれらしい姿があった。撮るのに夢中で刀弥のことを忘れているらしい。
仕方なく彼女の後を追いながら、建物を眺めていく。
建物は外から見る分には構わないが、入るのは禁止されているようだ。入り口と思わしき部分には紐やテープらしき物が張り巡らされれていた。
加えて周囲には係員と思わしき者の姿もある。これではまず侵入するのは無理だろう。
「ただいま」
しばらくすると、撮り終えて満足した様子のリアが戻ってきた。
「十分撮ったのか？」
「もちろん」
ご機嫌な声でリアが返事を返してくる。その態度から十分満喫したことが伺えた。
「そうか」
そんな彼女を見て、つい刀弥も顔をほころばせてしまう。
「ねえ、刀弥はここを見てどう思った？」
今度はリアがそんなことを訊ねてくる。
「そうだな……俺は町みたいなところだなって思ったな」
周囲に視線を巡らしながら、刀弥は己の感じたことを正直にリアに話した。
「町？　こんな地下に？」

彼が口にした内容にリアが反応を示す。
「まあ、俺にはそんな風に見えただけの話だ。そう言うリアこそ、ここを見てどう思ったんだ？」
それを聞いてリアが考え込むそぶりを見せた。やがて彼女は苦笑と共にこう答える。
「ごめん。凄いっていう感想しか思い浮かばなかった……」
「いや、別に謝らなくてもいいだろう」
別に彼女の感想に刀弥はケチを付けるつもりはない。どう感じたかなんて人それぞれだろう。
改めて建物を見る。塔の壁と同じ素材を使っているのか、建物は塔と同じ紺色をしていた。
これが本当はどういう建物なのか刀弥としても興味がないわけではない。
これだけの建物だ。まず間違いなく建てた存在がいる筈だ。にも関わらずその痕跡は未だ見つかっていない。
中々面白い話だと刀弥は思った。
建てた者がいるはずなのに、その建てた者がいないという矛盾。この謎はかなり強烈だ。
なにせ当たり前であるはずのことが否定されているのだ。興味のある者ならこの謎を解こうと躍起になるだろう。
それが遺跡を調べている人たちの原動力なのかもしれないなと、そんなどうでもいいことを刀弥は考えていた。
「さてと、時間も時間だし、そろそろここを出て町に行こうか」
そんなことを考えていると、リアがそんなことを言ってきた。
「ああ」
刀弥としてもそろそろ町へ行って、宿屋で休みたいと思っていたところだ。
そうして二人は転送装置で一階に戻ると、エルゲスという町行きの馬車に乗ってワートから去っていくのだった。

三章一話「観光」（1）（後書き）

ようやく3章の開始です。
読んでくださる皆様。また、よろしくお願いします。

三章一話「観光」（2）

「……町も遺跡なんだな」

それが町を見た刀弥の最初に出てきた言葉だった。

刀弥の目の前にはエルゲスという町の光景が広がっていた。

町のほとんどは紺色の建物で、人々はそんな建物の中で生活していた。稀に木や別の材質を用いたと思われる家なども見られるが、それは極少数だ。

床も同じ素材なのか、紺色の床が一面に広がっている。

「うん。ゲートのあったラーネスみたいに、新しく町を作ったところのほうがこの世界では少数らしいよ。大半は調査済みの遺跡を拡張するような形で町にしてるんだって」

「へー」

そんな言葉を漏らしながら刀弥は床を見る。そこには紺色の床がある。この床がある範囲が遺跡のあった場所なのだろう。

そんなことを考えながら彼は視線を正面へと戻す。

すると、目の前を奇妙な物が通りすぎていった。

人ではない。それほど大きくないので当然だ。大体、刀弥の腰くらいの高さだろうか。体は紺色でそれが光沢を放っていた。全体的に体が大きく手足が短い。顔と思わしき部分には大きなレンズのような一つ目が付いていた。

「なんだ？　あれ」

何気なく出てきたそんな言葉。そんな彼の疑問にリアが応える。

「ゴーレムだね。一般的な定義としては体内に動力を貯める機関と思考する機関を有する人工物がそれになるかな。動力がマナでもそれ以外でも名称は変わらないよ」

つまり、鳥や猫の姿をしていても、その機関があるならゴーレム

と呼ばれるわけだ。
目の前のゴーレムは積み重ねた本を両手に持って歩いていた。察するに、お使いでも頼まれたのだろう。
「凄いな。こんな物もあるのか」
「リアフォーネの遺跡はゴーレムが守護者（ガーディアン）として警備してたみたいだよ。今のはその技術を使って作った奴かな？」
そのゴーレムは少しの間まっすぐに進むと、やがて曲がり角を曲って見えなくなってしまった。
それを見送って再び二人は歩き始める。
町中を歩いていると、兵士と思わしき鎧を着た人たちがところどころで立っていた。
それぞれ建物の入口などに立っていることから重要施設を守っていることが伺える。
そんなことを考えていると、突然隣にいたリアが何かを見つけたのか走りだした。
彼女の行く先には露店がある。露店にワートのときと同じく絵や写真が並んでいた。おかげで刀弥はすぐに事情を理解できた。
程なくしてリアが戻ってくる。
「また買ったのか？」
さすがに今回は刀弥も呆れ気味だ。
「だって～」
そんな彼の反応にリアが言い訳しようとするが、その口を刀弥は人差し指で抑えてしまう。
「言い訳は別にいい。それよりも……」
宿屋を早く見つけようと言いかけたところで、刀弥の言葉が止まった。
リアがどうしたのかと思い、彼の視線の先を見てみると、そこには本屋らしき店があった。
「悪い。寄り道していいか？」
「いいよ。私ばかり買い物してたし」

リアがそう返答し、二人は本屋へと入っていく。
店自体はそれほど広くはなかった。けれども、肝心の本は三つの棚の両面にびっしりと収まっている。
刀弥はその中から好みの本があるか確かめるために、抜いては読んで戻すという作業を何度も繰り返した。
その間、リアは適当に本を物色する。
少しして刀弥が二つの本を持ってカウンターに向かっていった。
刀弥が本を買い終え、それをスペーサーに入れたのを見計らってリアが彼の傍まで寄ってくる。
「待たせたな」
「ううん。全然」
そうして二人は宿屋探しを再開するために、本屋から出ていくのだった。

二人が見つけた宿屋は遺跡の建物を利用したものでなく、後から建てた建物だった。
白い壁と木の床。刀弥の感覚ではありふれた建物だ。
そんな光景に刀弥はわけもなく落ち着いてしまった。紺色の建物や床が異質な物に見えるせいか、どことなく落ち着かなかったのも理由としてはあるのだろう。
カウンターに行くと店の主人が二人を出迎えた。
「すいません。部屋は空いてますか？」
「二人部屋なら空いてるよ。他は満杯だ」
打てば響くように、すぐさま主人が返事を返してきた。
「どうする？」
「……ここにしよう」
少し悩んだ後、刀弥はそう返答した。それに、リアが僅かばかり目を見開く。

「誤解するな。正直、ここが一番落ち着きそうな気がして他のところに行きたくないだけだ」
慌てて刀弥がその理由を答える。
なるほどとばかりにリアが頷くと、早速その部屋をとることにした。
鍵を受け取り、二人は部屋へと向かう。
中に入ってみると、素朴な感じの部屋が二人を出迎えた。
白い壁と木の床。窓の外には紺色の町並みが広がっている。
「明日はどうするんだ？」
そんな情景をひとしきり眺めた後、刀弥がリアのほうへと振り返った。
「明日はリアクスっていう遺跡に行こうと思ってる」
「また遺跡か」
呆れた声を出しつつも刀弥の顔は笑っている。
どんなところかは聞かない。そのほうが楽しみが増えるだろうと思ったからだ。
「あ、そうだ。リア」
「なに？」
と、刀弥がなにかを思い出したのか突然、リアの名前を呼んだ。
呼ばれたリアが応答を返す。
「明日の朝。稽古に付き合ってくれないか？」
「いいよ。対魔術師の修行？」
「そんなところだな。人によるんだろうけど、少しでも慣れておきたいから頼む」
使う魔術が人に寄って変わる以上、リアで通じた戦い方が他の魔術師に通じるとは限らない。
ただ、魔術師の戦い方とて、いくつかのパターンに分けることは可能なはずだし魔術特有の特徴もある。彼女と稽古することで、なにかしらの成果は必ずあるはずだ。
「手法はシェナさんがやっていた感じのほうがいい？」

「できればそのほうがいいけど、無理か？」
その問いにリアが首を横に振る。
「ううん。学院にいたときに非殺傷設定の魔術式をいくつか組んでるから、それを使えば大丈夫かな」
「なら、頼む」
「うん。任せて……ところでさ、お腹も空いてきたし、そろそろ晩御飯を食べに行かない？」
と、話が一段落した所でリアが晩御飯の話を振ってきた。
「そうだな。俺もお腹が空いてきたし外で何か食べるか」
宿屋には食堂もあったが、折角なので外で何か食べたいと思ったのだ。
「刀弥はどんなのがいい？」
「できたら、この世界ならではのものを食べてみたいな」
どこか余裕のある笑みを見せる刀弥。
それにリアが笑みで応え、二人は晩御飯を食べるために部屋を後にするのだった。

鳥の囀りが朝の到来を知らせ、日差しが地平線より登り始める。
紺色の壁や床が日を浴びて眩しく煌めき、その輝きが光を隅々にまで行き渡らせる。
そんな目覚めを迎えた町の外。そこに二人の人間が向かい合っていた。
刀弥とリアだ。二人は武器を構えている。昨日、刀弥の言っていた稽古をするためだ。
「それじゃあ、いくよ」
「ああ、いいぞ」
そんなやり取りを交わした後、リアが『フレイムボール』で炎の珠をいくつも生み出す。

「一応、非殺傷用に魔術式は組んでるけど当たれば痛かったりするから、刀弥は頑張って対処してね」
「善処はする」
「じゃあ、いくよ」
その言葉を合図に炎の珠の群れが刀弥のもとへと迫った。
すぐに左へと飛ぶ刀弥。だがその直後、炎の珠の群れが右と左、二手に別れて曲がる。
「飛ばす方向は別にまっすぐだけじゃないのか」
「構築した魔術式にもよるけど、無茶な軌道じゃない限りは、事前に軌道を設定することはできるよ」
今回の場合、刀弥が避けることを予期して事前に曲がるように軌道を設定していたということだろう。ただ、どっちの方向かまでは予測出来なかったので右、左とそれぞれ二つに別けることにしたようだ。
ともかく今は対処に集中する。
先の話通りなら軌道設定は基本的に事前に行う必要があるらしい。ならば、彼女の狙いを読み切れれば、後はその読みから脱するだけで軌道から逃れることは可能になるということだ。
恐らく、炎の珠の軌道変更はこれ以上ないと考えていいだろう。
故に刀弥は炎の珠の群れへと飛び込む。
炎の珠の間は人がどうにか通り抜けるだけの隙間がある。そこに刀弥は己の体を入り込ませたのだ。
そうして炎の珠を通り抜けた刀弥。
そんな彼に今度は『エアアロー』が飛んでくる。
さすがに風というだけあって速度は速い。飛んでくる風の矢の数は九本。それが刀弥を包みこむような軌道でやってくる。
「フレイムボールと違って軌道の変更が緩くないか？」
それを見抜き刀弥は矢群の中央に飛び込む。浅いカーブの軌道で飛んでくる風の矢は、彼を捉えることができずに次々と彼の背後を通り過ぎていく。

「それがその『エアアロー』の軌道の限界って言えばいいのかな？
さっきも言ったよね。『無茶な軌道じゃない限りは』って」
「……ああ、そういうことか」
つまり可能な軌道は構築した魔術式によって異なるということだ。
その辺も上手く見極めれるようになれば、魔術師との戦いが楽になりそうだなと刀弥はそんなことを考える。
「っということでちょっと注意点」
そう言うと同時にリアは再び風の矢を放ってきた。
しかし、気のせいだろうか先程よりも遅い。
飛んでくるのは左から右への浅い横カーブを描いた軌道。狙いは刀弥は左側。
そのため、刀弥は右前へと飛び込むように動く。だが、そんな彼の行動を予測してたかのように風の矢が急激にその軌道を変えた。
「な！？」
これには刀弥も驚く。
先程のエアアローはこんな軌道をとれていなかった。リアも言っていたはずだ。『それがその『エアアロー』の……』
そこまで思い出した刀弥はあることに気が付く。とはいえ、まずは目の前の事態に対処するのが先決だ。
風の矢は刀弥の目前まで近づいてきている。右や左に飛ぶ暇はない。
だからこそ、刀弥は後ろへと倒れることを選んだ。
風の矢群は刀弥の腰よりも上、胸の辺りの高さを飛んでいる。結果、倒れていく刀弥の目前を風の矢が次々と通り過ぎ去っていく形となった。
地面に倒れたと同時に受身をとり、すぐさま刀弥は起き上がる。
そして、先程の疑問を解決するため、確認の問いをリアへと投げるのだった。
「なあ、リア。ひょっとして魔術の名称って近似の現象なら全てその名称に一括りされてるのか？」

その確認は正解だったらしい。それを聞いてリアが笑みを返す。
「そうだね。魔術式の内容問わず、ある程度近似の現象ならその名称で一括りにされてるの。一つ一つに名称つけてたら面倒だから。まあ、人によっては独自の名称を使ってたりするけど。だから、同じ『エアアロー』でもその魔術式によって多少の違いがあるの」
先程のもそういうことなのだろう。最初の『エアアロー』を普通の『エアアロー』とするなら、二度目の奴は速度を落として代わりに深い軌道をとれるように魔術式を弄ったものなのだろう。
一つを見極めたと思って油断していたら、足元をすくわれるぞというリアからの警告だ。これには感謝しないといけない。
「ほら、次いくよ」
そう思っていると、既にリアが次の魔術を起こしていた。今度は雷の球体が単体で現れる。
『ボルトシューター』
雷の球状にして放つ魔術だ。
「この系統は私、あまり得意じゃないんだけど……」
独り言とも言える小さな声でリアがそうこぼす。その直後、雷の球体が刀弥に向かって放たれた。
今までのことを考えると、フレイムボールやエアアローと同じなんてことはまずないはずだ。
なにが起こるのか、その球体に集中しながら、ともかく攻撃から逃れるために刀弥は右へと飛ぶのだった。
すると、彼の後を追うように雷の球体も右へとその進路を変える。
刀弥の動き読んでリアが事前に軌道を設定していた可能性もあり得るが、それだと最初のフレイムボールと同じだ。
もしやと思い、刀弥は再び右へと飛ぶ――と見せかけて左へと飛んだ。
そうすると、雷の球体は右へと行こうとしたが、刀弥が左へ飛んだのに合わせて急いで左へと向きを変えた。
ちらりとリアのほうを見ると、彼女は慌てた顔を浮かべながらじ

っと刀弥のことを凝視している。
おかげで、この魔術のことが少しわかった。
「これは発動後も操作できるタイプか」
「正解。そういう風に魔術式が組まれてるの。ただ、操作に集中しないといけないから結構大変なの。私じゃ一個でも無防備になりやすいし……」
つまり扱いの難しい魔術ということだろう。
ともかく、この攻撃に対処しなければならない。雷なので斬って破壊するという選択肢はない。と、なると……
その思考と共に刀弥は足元から小石を拾うと、なんとそれをリアのほうへと投げつけた。
「え？」
思わずそんな声を漏らして、慌てて小石を避けるリア。その隙を突いて刀弥は雷の球体を突破する。
思った通り、他のことに意識を大きく取られると操作ができないらしい。後は視界を奪うなどの方法もありだろう。見たところ、操作はリアの視覚が頼りのようだ。
リアは雷の球体の操作を諦め、新たな魔術式を構築している。どうやら雷の球体で追いかけても間に合わないと判断しようだ。
リアが新たに発動した魔術。それは以前フォレストウルフたちと戦ったときに自分たちを守ってくれたあの魔術だった。
『ウォールストーム』
リアの周囲に竜巻の壁が現れ刀弥の侵攻を遮る。
フォレストウルフがどうなったかを知っている刀弥としては、足を止めてそれを眺めるしかない。
「魔術式によっては発動中、体内で生成されているマナを常に供給できるように組んでいる魔術もあるの。その場合マナ切れで消えることはないから……」
「術者の精神力次第ってことか」
「そういうこと」

刀弥の返事にリアが笑みを浮かべて頷いた。
だが、そうなると九ティム――約三〇分程――ぐらいはこの状態が続くことになる。しかも、気を抜けばその瞬間、『ウォールストーム』を切ってリアが攻めてくるケースだってあり得るのだ。
もっとも、三〇分近くずっとこの状態はまずないだろう。そうなれば不利なのは精神的に弱ったリアなのだから、必ずどこかで隙を突いて攻めてくるはずだ。
とはいえ、リアが攻めてくるとしたら、それは彼女が有利になる状況だろうから主導権は以前、彼女が持っているままだと言える。
それが嫌ならなんとかして刀弥から攻めないといけないが、残念ながら刀弥にこの竜巻を突破できる力も術もない。
そうなると残るのは竜巻が切れた瞬間を狙うことだけ。攻撃を誘うという手も浮かんだが、それだけでは弱い。他にないものかと刀弥は考え込む。
竜巻の高さはおよそ刀弥の身長の三、四人分。近くに高い木もないので上から飛び込むという手も使えない。
「……穴を掘って下からなんてのは無理だしな」
そう呟きながら刀弥は地面を見る。と、刀弥の目に小さな小石が映った。
それを見て刀弥は先程の雷の球体での対処を思い出す。あの時は小石を投げて意識を雷の球体の操作から逸らした。
今回はそちらの効果は薄いだろうが、攻撃手段としては有効的かもしれない。
「やってみるか」
そうして彼は適当な石を拾うと、それを空高く目掛けて投げつける。
石は放物線を描きながら、高くまで上がっていく。そうして頂点まで辿り着くと後は重力に引かれ下へと落ちていった。落ちた先にあるのは竜巻の縦穴。
「痛っ！？」

石は見事にリアに当たったらしい。竜巻の中から声が返ってくる。
その調子で刀弥は石を何度も投げ続けた。
「ちょ、ちょっと、刀弥。痛い、痛いって」
「と言ってもこれでも一応攻撃だからな」
一つ一つのダメージは微々たるものだろう。とはいえ、それを何度も食らえば、さすがにまずいだろうし、もう少し大きな石ならかなり効くはずだ。
「〜〜！！　わかった。降参。降参」
その言葉と共に『ウォールストーム』が解かれ、そこから頭をさすったリアが姿を現した。
「刀弥の意地悪」
「仕方ないだろ。あれしか手がなかったんだから」
恨みがましい目を向けてくるリアに刀弥がそう弁明する。
「……まあ、そうかもしれないけど」
理解はするが感情は別ということなのだろう。まあ、それは仕方がない。
「まあ、今日はこれで終了だな」
「そうだね」
遠出もする以上、これ以上の疲れを残すのは避けたほうがいいだろう。
「とりあえず汗を流して出発かな？」
「そうだな」
そうして二人は汗を流すために、自分たちが泊まる宿屋へと戻ることにしたのだった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7367t/

無限の世界

2011年9月27日02時27分発行